
リテラエルネルア

リシュベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リテラエルネルア

【Nコード】

N3885I

【作者名】

リシュベル

【あらすじ】

ある世界で悪魔狩人として活躍している青年が依頼の最中に魔法少女リリカルなのはの世界へと来てしまった。

史実では有り得ない要素を取り入れてしまった物語はどうなるのか、そして行き着く先の結末とは……

更新について

えーっと、最初に生存報告を…
生きてますよー

本題。

長らく更新しないで楽しみにしてくださった方々申し訳ありません。
当小説、リテラエルネルアはただいまリメイクしております。

原因としてはところどころ違和感があったり無理やり感があったり
と今の自分としては納得できない状況となっていました。

より質の向上を図るためにリメイクという決断をしました。ストーリー、ネタはそのままです。でも「それでもいい」と思ったださるなら頑張ってリメイクしていきますので応援のほどよろしく願います。

プロローグ（前書き）

皆さんはじめまして、この度このサイト様で小説を書かせて頂きますリシュベルと申します。以後名前だけでも記憶の片隅にちょこっと置いて貰えたら幸いです。

今回書かせて頂く内容は魔法少女リリカルなのはS.t.t.sを舞台にDMC（決してクラウザー様の方ではありません）の内容を加えたコラボ小説で進めていきたいと思えます。

ただ自サイトも運営している故、更新が遅くなりますが生温い目で見守って頂ければこれまた幸いです。

さて、注意事項ですがまず主人公がオリジナルキャラです。そして内容も過激な表現がある可能性が出て来ます、その辺を考慮したうえで御了承下さい。

ブローグ

廃墟や瓦礫の山、空は雲が掛かり薄暗いがまだ日中の時間帯だ。

見た目も酷い惨状のこの景色だ、ここで大規模な事件が遭ったことを醸し出す。長いアスファルトで舗装された道があるためここは空港だと予想できる。

その一角の場所に光が現れ一際強い輝きを放った後一人の青年が姿を現した。

青年は金髪で幼さ残る顔立ちではあったが成人を迎えているだろう。

服装は見た目は普通だが上着となる服が違う、右側はノースリーブだが左側が袖があり先に行くほど広がって行くデザインだ。そして最大の違和感が両手には小太刀にしては長い刀が握られていた事だ。

「……何処だよ、ここ」

青年は刀を納めると戸惑いながら辺りを見渡す。

「……空港か？」

おかしい。ここまで大きな空港がこうなっているのならば自分が知らない訳がない。

青年は状況把握のため外に出る。

「日本、……って訳ではなさそうだな。 ヤバイ、俺パスポート持ってないぞ」

心配する点がズレている様なので見た目ほど困惑して居ないようだ。

「!？」

すると背後から物音が聞こえ瞬時に臨戦体勢に移り、背後に振り向く。

「…ん？ ロボット…だよな」

青年の視線の先には球体状にコードが伸びているロボットだった。

【 ¢ & § ▼ ¢ @ \$ # 】

恐らく故障しているのだろうか機械音を放ちながら上部からベルトを伸ばし青年に襲い掛かる。

「おいおい、なんなんだよコイツは。 こんなやつ見たことねえぞ」

青年は自身の記憶を探るが残念ながら該当する物はなかった。

「けど悪いがやられてやれないな、壊させてもらっぞ機械野郎」

*

「…………次元振動？」

太もも辺りまである金髪のロングヘアを先の方で纏めているスーツ姿の女性が通信士からつけた報告を聞き確認する。

『はい、ミッドチルダ臨海第8空港跡にて微弱ながら次元振動を感知しました。それに伴い同位置にてガジェット・ドローンの出現が確認されました。先程シグナム副隊長が出撃されましたが、フェイト隊長にも伝えるようとの事です』

「！？ わかった、直ぐに向かう」

『ではシグナム副隊長共々、ご無事を——』

ピッ——

金髪の女性「フェイトは通信を終えると三角形の形をしたものを取り出し天に翳した。

すると淡い光に包まれ、光が収まると服装が変わり、髪型もツインテールになっており手には長柄の斧を思わせる機械じみた武器を握っていた。

フェイトはフワッと浮くと凄まじい勢いで空を飛んで行った。

*

青年はロボット―ガジェット・ドローンの攻撃を避けながら考え事をしていた。

「（やはり、というかコイツは俺の居た時代にはない技術が使われている。となるとここは未来の世界か？）」

青年は憶測の域にしかないと首を振り目の前の敵に意識を向ける。

「あばよ」

青年は攻撃を交わし出来た隙にガジェット・ドローンを斬り裂かんと肉薄する。通常ならこれで決まりだが……。

ガギンッ―

「硬てえ」

余りの強度に刀が弾かれてしまった。

ガジェット・ドローンは青年のこの隙を逃さんとベルトアームで捕らえようとするが――。

「ウラァッ!―!」

ガジェット・ドローンを蹴飛ばし間合いを作った。

蹴飛ばされたガジェット・ドローンは瓦礫の山に突っ込み埋もれていた。

「くそ、なんつう強度だよ」

刀をよくみると輝が入っていてこれ以上使用すると折れてしまう程の状態だ。

しかしもう一振りの刀は無事なので輝が入った刀を納め、代わりに朱い装飾銃を手にした。

「やはり機械といったら弱点は電気だろ」

そう呟くと彼の握る刀には肉眼で視認出来る程の紫電が纏っていた。

瓦礫の山が崩れ落ちる。それはガジェット・ドローンが出て来た合図だ。

右手に持つ朱い装飾銃で狙いをつけ引き金を引く。

自身の魔力を弾丸に変換した弾は朱い尾を引きながらガジェット・ドローンへ向かう。

しかし体に当たる前に魔力弾は消失した。

「あちゃー、障壁持ちかよ」

近距離では強固なボディに守られ、遠距離では障壁で守られる。とどのつまり鉄壁を見事に具現した物だ。このままでは紫電を纏わせた斬撃も先程のように障壁に掻き消され刀も使い物にならなくなってしまう。

だが、それはそれでやり様はある。 紫電をとめ刀を鞘に納める。

「来たれ『水流』、混ざれ『雷撃』……」

青年の呟きに応えるようにガジェット・ドローンの周りに雷を帯びた水流が現れた。

ここで察して欲しい、水は電気分解するとある物が発生する事を。

水は H_2O だ、それを電気分解すると H と O が発生する——つまり『水素』と『酸素』だ。

となると。

「爆ぜろ」

青年はその場から下がりながら近くにあった鉄片をガジェット・ドローンに投げ付けた。

青年の思惑も気づかぬままガジェット・ドローンは向かってきた鉄片を問題無いと認識し無視する。

鉄片がガジェット・ドローンの体を掠め火花が走る。

すると轟音と地響きを撒き散らしながらガジェット・ドローンを中心に爆発が起こった。

*

「来たか、テストロッサ」

フェイトがミッドチルダ臨海第8空港跡に向かっていている最中に彼女の見知った人物が視界に入った。赤紫の長髪をポニーテールにした意志の強そうな女性、シグナムだ。

「ガジェット・ドローンが出て来たならばもしかしたら次元振動の原因はレリックかもしれない」

「うん。けどなんで空港跡になんて」

「レリック自体が高エネルギーを有しているためだとは思って…」

…」

二人が現場に急ぎながら会話をしていると。

【現場付近に生体反応1あり】

フェイトの持つ武器から無機質だが男性らしき声が聞こえた。

その直後、前方から爆発が起こり黒煙が上がる。

「急ぐぞ、テストロッサ!!」

「はい!!」

*

「ぷはッ」

山を築いていた瓦礫から埃まみれの青年が出て来た。彼は爆風から身を守るため敢えて瓦礫の中に飛び込んだのだ。

「ええと？ いたいた」

周りを見渡しガジェット・ドローンの姿を見つけた。やはり障壁持ちといってもあれだけの爆発の爆心地に居たのだ、当然無事ではなくスクラップ同然のボロボロとなり所々から火花が散っていた。

「こりゃ驚きの耐久性だな、まだ動いている」

青年は朱い装飾銃を取り出しガジェット・ドローンに銃口を突き付ける。

ガジェット・ドローンは青年に攻撃を仕掛けようとするがベルトアームがなくなり、さらにコードも無くなっているためどうしようもない。

「Jack pot」

これだけの損傷で障壁が働く訳がない、そう確信し青年は引き金を引くと魔力弾はガジェット・ドローンを貫通し動かなくなった。

「つたく、人騒がせな。ああくそ、人が居そうな場所に移動しないと――」

青年は敵意を感じとり居場所を捜す。

「我々は時空管理局だ、武器を寄越し同行願おうか」

青年は声のする方向に、銃口と視線を向ける。

「アンタら誰だ？」

「我々時空管理局の者だ、もう一度言おう。武器をこちらに渡し我々について来てもらおうか」

青年の前に居た人物はフェイトとシグナムだった。

「悪いがそれは出来ない」

「それは我々に敵対意識を持つということだな？」

「あ、そういう訳じゃ無いんだが……これ俺の仕事道具な訳だから渡せないというだけで」

「ちょっとまってシグナム。貴方は此処で何をしていましたのか？」

青年とシグナムが睨み合う中フェイトが言葉を挟む。

「何をしていたって気が付いたら此処にいて、変なロボットが襲い掛かってきたから戦闘になったんだ」

ほら。と、先程戦っていたガジェット・ドローンの残骸を指す。

「あのガジェットを倒したのか」

「ガジェット？　しかも時空なんかってなんだ？」

青年は聞き慣れない単語に疑問符を浮かべる。

「……時空管理局を知らないのか？」

「……なにそれ、それに此処何処よ」

シグナムはため息を吐き剣に掛けていた手を離す。

それを確認した青年はもう感じられない敵意に銃を下ろした。

「ここはミッドチルダ臨海第8空港跡だ」

「……知らねえ」

「ねえシグナム、彼はもしかしたら次元漂流者かも」

「可能性は高いな」

「私はフェイト・Ｔ・ハラオウンと言います。　良ければ貴方の名前と此処へ来る前の状況をお話していただけますか？」

フェイトに言われ、青年は少し悩んだ。　だが、情報が乏しい彼にとって状況把握のために有効なものだと判断し、話すことにした。

「……俺の名前は神崎　暁だ。　ある依頼を受けてとある島へと来ていた。　だがその時不思議な宝石を手にしたら光に包まれたんだ。　そして気が付いたら此処にいたという訳だ」

「その『ある依頼』というのは？」

「それは――！？」

暁の表現が一変、その変化に二人が気づくと辺りの空間がまるでガラス板のような音と共に碎け異形が現れた。

「なんだ、こいつらは！？」

その異形とはボロ布を纏い身の丈ほどの鎌を持ち赤い眼光を放っていた。そのただならぬ風貌と雰囲気二人は戦闘体勢に移った。

「こんなところにまで来たか」

「貴方はこいつらの事を知っているんですか？」

「ああ、受けた依頼つてのが『悪魔の討伐』だ。そしてコイツらがその『悪魔』さ」

「悪魔だと！？」

暁は翠の装飾銃を取り出すと朱い装飾銃と共に構える。

「（二丁銃？ ティアナと同じ？）」

朱と緑の装飾銃を見て二人はガンナーだと思った。

「さあてパーティーの始まりだ――！」

暁は空に銃を向け銃声をだし戦闘開始の狼煙をあげた。

プロフィール（前書き）

オリジナル主人公の初期設定に入ります。

プロフィール

「神崎 暁」

ある世界で悪魔狩人として裏では名の通る青年。

金髪にまだ幼さ残る顔立ちだが清々しい印象を受ける。

性格としては基本明るく接しやすいが事悪魔になると性格は一変、大胆不敵になる。

使用武器は小太刀より刀身が長めになっている刀が二振りと朱と翠の装飾銃を使用するものの、それに加え魔術も使役出来るというオールラウンドな戦闘が可能だ。

ただもうひとつ隠された武器があるようだが……。

第一話

「はぁあ!!」

暁は悪魔——ヘルプライドを回し蹴りでダウンさせ、頭を踏みつけて胴体に何発か撃ち込んだ後蹴飛ばした。

「乱暴な戦いかただな」

それを見ていたシグナムがヘルプライドを斬り捨てながら率直な感想を述べた。

「悪いがコイツら相手に遠慮する気はさらさらなくてな」

暁はシグナムを見て感心した。普通このような悪魔を見たら恐怖に支配されるだろうが彼女は臆する事なく斬り捨てたのだ、フェイトと同じだ。

「しかし次から次へとキリがないな」

シグナムは周りを見渡した。ザッと見ただけで50は越えているだろう。

「コイツら下級悪魔は個体自体はそんなに強くはないが、厄介なのはその数だ。一度現れたら次々に現れる。簡単に言えばゴキ○リみたいなものだ」

……聞いてはいけない単語によって、想像してはいけない光景を思い浮かべてしまい二人は表現を青くする。

「え、コイツらゴキ。リなの!?!」

「言うな、テストロッサ!! 想像したくはない!!」

「言つてて悪いが俺も勘弁だ」

余裕そうだなこの三人……。

しかし、しっかりとヘルプライドを倒してるのは流石と言つべきか。

「……カンザキとやら、コイツらを掃討したら我々と来てもらうか。コイツらを知っているならば説明をしてもらわねば」

「別に良しさ、どうやら俺の知っている場所じゃなさそうだからアンタらについて行った方が状況把握できるはずだ」

彼としては出来るだけ早く状況把握をしたいのだがそれをヘルプライド達はさせてくれない。

「さあてそうと決まったらとつと終わらせようか!?!」

暁は朱い装飾銃をしまつと翠の装飾銃を持ち替え刀を抜いた。

「!?!」

暁が刀を抜くと夥しい量の紫電が纏いシグナムは驚く。

「（なんだあの魔力量は!?!）」

「さて、そろそろ終幕といこうか」

暁は両手を広げ悠然とした態度でヘルプライド達の群れに近づき、その時に気付いた。 翠の装飾銃から淡く光が放っている事を。

「き、貴様、何をしている!？」

確かに今の暁の行動を見る限り死に行っているようなものだが、だが暁にとってこれはいつものことだ。

暁に襲い掛かってきたヘルプライドを一閃すると瞬く間に砂へと散った。 そこからはもうクライマックスへの舞踏だ。

軽やかステップ、俊敏なターン、それはダンスをしているかの様だ。

しかしその軌跡にはヘルプライドを倒したという事を大量の砂が示していた。

「二人とも避けるよ!!」

その一言でシグナムとフェイトは直感的に危険と判断し、空へと飛ぶ。

淡く光っていた翠の装飾銃を天に向け引き金を引いた。すると銃口から巨大な魔力の塊が撃ち出され上空へ留まると弾けた。

「『スフィア・レイン』……kick off!!（くたばれ!」

！」

親指を立て、それを下に向けると先程弾けた魔力が雨粒状の弾となり降り注いだ。

それは辺り一帯のヘルプライドを貫き、余波で瓦礫にも穴が空いた。それは蜂の巣と言う比喻を現した光景だ。

「これほどの殲滅魔法を使いこなすとは……。奴は一体何者なんだ？」

あれだけ居た悪魔という異形を瞬く間に駆逐した暁に警戒するシグナム。

「おゝい、終わったぞ」

暁は刀と銃を仕舞うと二人を呼んだ。

「神崎さん申し訳ありませんが武器をこちらに渡して頂けませんか？」

二人が暁の傍に來るとフェイトが武器を差し出すよう暁に言ってきた。

言われた本人は「あゝ…やっぱり？」と苦笑いを浮かべていた。

「仕方ない、とりあえず情報を手に入れるためだ」

と、自身に言いかけ暁はガンホルダーを取り外しフェイトに渡し、刀も鞘ごと渡した。

＊

―機動六課宿舎・部隊長室―

「一応紙面にて簡易的な質問の解答を書いてもらっただけですけど……」

今、暁は簡単な質問が書かれた紙に応えを書き終え目の前の女性に紙を返した。

この女性、シグナムやフェイトからすると名ははやてと言っらしい。

「出身地が日本の『桜木市』ってちょっと聞いたことないなあ、なのはちゃんはどうや？」

はやては隣にいる栗色のサイドテールの女性「なのはに聞いてみた。

「ううん、聞いたことないよ」

その一言に暁は眉間に皺を作ったため息をついた、自身の中で一番可能性が低い答えがでたからだ。

「どうしたんや、神崎さん？」

「いや、アンタら二人名前からして日本人だろ？ そのアンタら

が知らないとなると可能性的に俺は異世界からこの世界にということになる」

「異世界だと？」

この場に似つかわしくない紅髪の少女が訝しげに放つ。

「並行世界ーパラレルワールドーから俺はこの世界に来た、と言うことだ。くそ、あの水晶に触れなければ良かった」

「水晶やて!？」

暁の言葉に過敏に反応したはやてが身を乗り出してきた。他の人物も目を見開いていた。

「神崎さん、水晶つてのは……………こんなんですか!？」

はやてが端末をいじりある画像を映したモニターを暁に見せた。赤い水晶、表現するにはそれが最適だった。

「ああそれぞれ。ただそのケースみたいものに入ってたんじゃないかって動力源として置かれてたな」

暁は右手を出しながら掌を上にした。

「!？」

掌から光が出たと思ったら赤い水晶を暁は握っていたのだ。それを見た全員はまた目を見開いた。

「神崎さん平気なんですかそんな素手で持ってて!？」

「んゝ、最初は気分悪かったがすぐ収まったな」

「あかんやん!! シヤマル、はよ神崎さんを診てえな!!」

「は、はいはやてちゃん!」

「ちょ、ちょいまって!？」

いきなり慌ただしくなった部屋で暁は待ったをした。

「気分悪くしたのは向こうでコイツを手にした瞬間だけだ、それにコイツからはもう高エネルギーは感じないぞ!!」

「……………へ？」

「恐らくだが俺がこの世界に来る時にその高エネルギーで移動したんだろうな」

「そうですか。神崎さんそれは私達が探している『レリック』というロスト・ログアです。それをこちらに渡して下さい」

「『ロスト…………』なに？」

はやては簡易的に説明をした。

「要はオーバー・テクノロジーの物を事を『ロスト・ログア』と言い、それを回収・管理するのがアンタらの仕事か」

暁は腕を組み、納得したように頷く。

「ならこの『ロスト・ロギア』を回収義務があるな」

「ほら」っとレリックを差し出す。

「ありがとうございます、なのはちゃんお願いや」

「うん、レイジング・ハート」

なのはは機械的な杖を出現させて持つと先をレリックに向ける。
するとレリックは暁の手をすり抜け、レイジング・ハートという杖の先端部にある水晶部に吸い込まれた。

「さて、次の話にいきますが。神崎さん、先程の戦闘についてシグナムとフェイトちゃんから聞きました。貴方はアンノウンについて『悪魔』と言ってたそうですね」

『悪魔』と聞き神崎は目を細める。

「ああ、俺は『デビルハンター悪魔狩人』という『悪魔』専門のハンターをしている。しかしアンノウンって言うのは？」

「この二、三ヶ月の間にアンノウンと遭遇したという報告があります」

はやてはモニターを戻し、再び端末を操作した後またモニターを暁に見せる。

「ですがこの二週間の間に確認例が急上昇しているのです」

「……どいつもこいつも戦った事のある奴ばっかだな」

「そこで、神崎さんをお願いします。お預かりした武器はお返しします、ですからどうか私達に力を貸してください!!」

急に立ち上がったかと思うと勢いよく頭を下げるはやてに皆が驚く。

「はやて、なにコイツに頭なんて下げてんだよ!？」

紅髪の少女がはやてに声を放った。

「じゃあ、取引だ」

「え？」

はやてが頭をあげると暁は真剣な表情ではやてを見ていた。

「テメエ、今の状況分かってんのか!!」

紅髪の少女が暁の胸倉を掴む。

「ヴィータ、やめい。それで、取引の内容とは？」

はやてが止めるとヴィータが渋々離れた。

「俺の寝床と食事の提供。それをしてくれるなら喜んで協力しよう」

「…………は」

もつと凄い条件が出されるかと覚悟していたはやてにとって思いがけない言葉だった。

その一言は周りの予想を良い意味で裏切るものだった。

「あの、そんなので良いの？」

思わずフェイトが口に出してしまった。他の皆も同意見で首を縦に振っていた、胸倉を掴んでいたヴィータもだ。

「この世界の通貨や身分証明がないんだ、しかたないだろう」

「なら簡単や、ウチの宿舎に空き部屋もあるし、『協力者』なら多少の謝礼金もでるはずや」

「取引は成立だな。さて、それでこの世界について説明をしてくれ」

寝床や食事の確保が出来たことで笑みを浮かべた曉は次の話を促した。そしてお互いの世界の事も話すようになった。

彼が居た世界とこの世界での似ているが異なり、異なっていて何処か似ている部分が少し明らかになった。

*

機動六課宿舍

空き部屋に案内された暁はベッドに横たわっていた。

「魔法…ねえ」

彼の居た世界で魔法と言う存在は奇跡に等しい力を秘めていた、それは世界に干渉する神の如き力だ。それがこの世界じゃ超科学によるものだと言う。

「（魔力行使という点では似てるんだが媒介が必要ってのはやりにくいな）」

起き上がりテーブルの上に置かれているデバイスと総称される銃に目が行った。

彼の武器はこの世界では禁じられているので違法にならないよう改造するとの事だ。それまでの間に合わせて借りたのがこれだ。

魔銃やともかく二振りの刀は戻ってきても思いつきり違法なので使い物にならない。

「魔術は使えるが武器が戻ってくるまでガンスタイルでやるしかないか」

とりあえずデバイスの使い方を知りたいので誰かを探しに部屋を出た。だが、この行動が彼にとって面倒な出来事に発展するとは微塵にも思わなかった。

第一話（後書き）

さて、プロローグから第一話までを投稿しましたが如何でしたでしょうか？

ところどころ至らないところがございますが精進していきたいと思いますのでよろしくお願いします。

m () m

第二話（前書き）

デバイスの使い方を教えてもらう為に一人宿舎内をさ迷う暁。ある場所である人物と遭遇したことにより本人の意志とは別方向な展開へと開いて行く。

第二話

「あれ？ 神崎さん」

トレーニングルームらしき部屋を見つけ中に入るとどうやら先客が居たようだ。白い服を身に纏ったなのはが杖を持ち空中を高速移動していたのだ。

一方入って来た人物に気付いたなのはは暁に声をかけた。

「えっと、確か高町？」

「はい、高町なのはです。それでどうかしたんですか？」

「ちょうどいいや、コイツの使い方を教えてくれ」

ズボンのポケットから借りたデバイスを取り出す。頼まれたなのはは空中から暁の近くに降り立つ。

「デバイスに意識を集中すればいいんですよ」

……簡単に言ってくれる。そう思った暁は言われた通りに意識を集中する、自身が使う魔銃と同じ様に。

「——っ、なんか違和感あるな」

意外と簡単に出来た事に驚くが、その手応えに暁は顔をしかめた。

「初めて使うわりには上出来ですね、魔力の扱いは馴れてるんで

すか？」

「人並みにはな、んで？ 後はトリガーを引くだけか？」

「そうですね試しに撃ってみて下さい」

言われるままに引き金に指をかけ、引く。

銃口から金色の魔力が弾となり撃ち出された。

「出ましたね」

「出たな」

撃ち出された魔力弾は途中で消滅した。視線を下ろすとブローバックで排出された空薬莖が暁の足元に転がっていた。

「うんうん、これなら午後の訓練に参加かなあ？」

なにやら隣では顎に指を当て、頷きながら一人納得しているのはが居た。なにやら不吉な単語が聞こえたが。

「いずれみんなにも紹介しなくちゃならないんだし早い方がいいよね、うん」

自己完結して暁の方を向き――

「神崎さん、午後にやる予定の訓練で模擬戦をするので参加してください」

陽気に宣告するのは。

「ちょいまで、何故？」

「他の皆に紹介と、どれ程の実力があるのかしりたいので。」

「……っ」

断りたい、そもそも使い方を教えてくれと言っただけでなぜ訓練に参加する方向に話しがすっ飛んでいるのか。切り出したくても満面の笑みを向けられたら言葉が出ない。

「……オーライ」

仕方なく了解の言葉を出した。それから少しの時間が経ち――
機動六課宿舎から離れた広場に四人の男女を前に暁となのはが立っていた。

「こちら一連のアンノウン事件の協力者の神崎 暁さん。今日から機動六課の一員として動く事になりました」

なのはの紹介で軽く挨拶すると四人の自己紹介が始まった。

「スターズ3、ティアナ・ランスターです!!」

「スターズ4、スバル・ナカジマです!!」

先にオレンジ髪のツインテールの女性から始まり、鉢巻きをした青い髪の女性が続き――

「ライトニング3、エリオ・モンディアルです!!」

「同じくライトニング4、キャロ・ル・ルシエです!!」

赤い髪の少年とピンク色の髪の少女が挨拶した。

「（なんで小学生がいるんだ？）」

先程のヴィータといい、この二人といい……明らかに小学生と見える人物が警察機構に該当する所に居る事が不思議でなかった。

「えっと、今日の午後の訓練は内容を変更しラストを模擬戦にします」

「模擬戦、ですか？」

「そう！ 神崎さんも一緒に模擬戦参加してくださいね？」

「……オーライ」

ここに来た手前、今更断る事が出来ないので低い声で返事するのであつた。

*

訓練の内容は基礎体力向上及び魔力操作の訓練。

基礎体力訓練に関しては難無くこなしていくがやはり魔力操作に関しては勝手が違ったためなかなか上手くいかないようだ。

「なはは、さっきは出たんですけどねえ……」

「仕様が違っただろうな、思うようにいかないさ」

先程一発で成功した射撃も今は三割成功と低迷していた。

それは仕方ないといえば仕方の無い事だ。 暁自身、魔銃は自分がカスタマイズしたことで構造を理解し媒介を利用することで魔力を滞りなく通わせているのだ。 このデバイスは暁が銃の基礎知識があるが故になんとか魔力を通わせている程度なのだから。

「やばいなこりゃ、協力どころか足手まといになるな」

「そういえばカンザキ、先程のガジェット・ドローンはどうやって倒したのだ？」

だんだん焦りが出て来た暁に訓練を見ていたシグナムな質問してきた。

「あ、ああ。 あれは魔術で爆発を起こしたんだ」

「爆発だと？」

「そう、水と電気呼び出して電気分解で水素と酸素にしたんだ。そこに火種を投入するとドカンッて訳」

「それが『マジユツ』と言う奴か」

納得したように頷くシグナム。

「ちなみに限りはあるけど使い方によってはやり方は様々あるぞ、
今のはその中の一例だ」

「あのアンノウンの群れを殲滅したアレもか？」

「似たようなものだな。ただあれは媒介の関係で出したから魔術
とはいいい切れないな、魔力の弾だし」

「フム——」

なにやら考え込む。

「そのマジユツとやらを見せてくれ」

思案した結果百聞は一見に如かず。見た方が早いと判断し実演を
促した。

「まあいいけど。そうだな……簡単な奴いこうか」

暁は皆から離れ、意識を集中する。

「『アイシクル』」

呟くと同時に暁の周りの気温が瞬時に低下し、地面から円錐状の
氷柱が術者を守るように突き出してきた。

「これが魔術だ。恐らくアンタ等が言う『魔法』と俺が言う『

魔術』は捉え方が違うが実際は同じかも知れないな」

「そうか、要はデバイスがいるかいらないかの違いか」

「じゃあさ、神崎さんは銃じゃなくてその魔術で戦えばいいんじゃない？」

始終を見ていたなのはが提案したが――

「俺は魔術を織り交ぜた戦闘方だからな、魔術だけじゃ燃費が悪い」

暁の戦闘方は刀や魔銃を中心に魔術を使役するやり方なのだが魔術だけだと異常に魔力を消費したりと使い勝手が悪いのだ。本人も改善する点だと思っているが……、いかんせんうまくいかないのが現状だった。

「武器がいつ頃戻って来るかわからない以上、この銃に頼るしかないんだ。いざとなったら肉弾戦するしかないな」

「体術の心得でもあるのか？」

「まあな。でも銃が使えればそれに越したことはないからな」

といい、再び魔力操作の訓練に取り掛かる。

「（魔銃、余計なことされてなきゃ良いけどなあ）」

機動六課・デバイス開発部

「なんやシャーリー、神崎さんの武器になんか問題があったんか」

デバイスマスターの資格を持つ通信主任のシャリオから暁の武器について話があると言われ、は yet は六課の技術局に来ていた。

「いえ、お預かりしている銃なんですが奇妙な構造をしているんですよ」

シャリオは端末を操作し、画面に暁の朱と翠の魔銃を映し出した。

「な、なんやこれは」

映し出された部分は弾倉部分だ。しかし本来実弾を入れる部分だが弾は入っておらず、紅と翠の宝石がそれぞれ嵌め込まれた電子基盤が入っていたのだ。

「解析によりますと魔力を通わせ、この宝石で増幅し撃ち出す仕組みになってます」

「…凄い技術やな」

「宝石を利用する回路なんて見たことないですからね……抵抗とかどうやって制御してるんだろう」

「ああ、シャーリー？　お願いやから余計な事はしないように」

一人黙々と考えているシャリオに嫌な予感がしたためはやては釘を打っておく。

「分かってますよ、でもこれを応用すればワンランク上の攻撃が可能なんですよ」

「でも宝石なんやろ？ 見たところルビーにエメラルド……高そうな代物やな。あまりいじらんといてな、弁償なんてしたらいくら払わなきゃいけないのか想像したくないわ」

「了解です」

*

所変わって場所は空間シミュレーター、未だ訓練が続いている。

だが内容が変わっている。なのはが繰り出す攻撃を交わしつつけるか一撃を与えるというものだった。

「だああッ、なんだよその攻撃は！？ サイ。ミュかよ！！」

なのはの繰り出す桜色の球体^{ディバイン・シューター}、それは物理的な威力を持つのは魔法でそれは様々な軌道を描き暁に襲い掛かる。

まるで生きているかのようなその動きにある例えが浮かび上がり、暁は避けながら……いや逃げながらマニアックなツツコミを入れた。

しかしサ。コミュってオイ。

「ちなみに今まで5分も保ったことないです!!」

物陰に隠れながらエリオが叫んだ。

「こんなん5分もやってられっか!! 『ライトニング』!!」

振り向きざまに雷の魔術を放つが、なのはのシールドによって阻まれ一撃を与えるまでには至らなかった。

「やっぱり魔術だけだと不便だああ!!」

一時的に反撃に転じた暁になのはの光球が集中する。

それを見た暁は逃走を再開した。

「げ、行き止まり!?!」

路地を曲がった瞬間前方が塞がっていた。後方からは容赦なく光球が迫って来ていた。

壁を背にして迫り来る光球と対峙する。

「ち、《サーキット》!!」

自らの身体能力を上げる強化魔術をかけると、暁は最小限の動きで光球をかわす。

「頼む、出てくれ!!」

光球をかい潜るとデバイスに魔力を送り、祈るような思いでなのは向かって引き金を引く。その願いを聞き入れてくれたのかデバイスから金色の魔力弾が形成されなのはへと直進する。

「レイジング・ハート!!」

【p r o t e c t i o n】

なのはが手を前に出すと円形の魔法陣がシールドとして出現する。

暁の魔力弾となのはのシールドに激突し衝撃がなのはを襲う。

「くう…!!」

なんとか受け止めるがシールドの強度を上回る威力のためシールドに輝が入る。

「スバル、エリオ!! アイツはアレだけじゃ足りない、合図したら一気に攻めろ!!」

「は、はい!!」

「アンタ、なに勝手に指示だしてんのよ!」

「ティアナ!!」

「ひゃい!」

暁がいきなり下した突撃指示にティアナは怒ったが前フリなく名を呼ばれた為変な返事してしまった。

「もうすぐアイツは攻撃を耐えきる、そしたら二人の援護射撃を頼む!!」

「な、なんでアンタの指示に従わなきゃならな「なんだ、『そのくらい』出来ないのか?」―プチン―そのくらい出来るわよ!! やってやるうじゃないの!!」

怒るティアナに対し火に油を注ぐ言葉を投げかけボルテージがあがったティアナは容易に暁の策にのつかった。

「レイジング・ハート!!」

【All light my Master】

魔力を追加し強度を増したシールドは暁の放った攻撃を抑え霧散、なのはは煙に包まれる。

「行け!!」

「ウオアアア!!」

スバルは自身の能力^{ウィング・ロード}を展開し煙の中心地に居るのはへと続く道を出し、その上を疾走する。

エリオも突進性が優秀な攻撃、《スピア・アングリフ》でなのはに突進する。

速度的に言えば推進力を得ているエリオの方が早い。煙が晴れてくるにつれて目標が確認できる。だがなのはの周りには桜色の

光球がいくつも浮いていた。

「煙で視界を遮ってからの追い撃ち、でもまだ甘いよ!」

一番速いエリオ目掛けなのはが光球を放つ。

「!?! ティアナの弾……!?!」

エリオに向かっていた光球がエリオの背後から来たオレンジ色の弾によって撃ち消された。

【p r o t e c t i o n .】

「!?!」

再度出されたシールドによっていなされたエリオはその勢いのままあらぬ方角へと飛んでいった。

「え、ちよつとエリオ!?!」

ちよつとその方角とは背後から攻めようとしていたスバルの方だ。

当のスバルはこちらに向かってきた仲間に驚愕するが反応が遅く

「ウワァア!!」

二人して激突してしまった。

「スバルとエリオがそしてティアナが援護……神崎さんとキャロ

は？」

「本命のご登場オ！！」

咄嗟に声のする方向へシールドを張るなのは、すると暁の渾身のストレートがシールドに当たる。

「うッ……！」

シールドから伝わる衝撃から先程の射撃と同様、いや、それ以上の威力を持っている事がわかる。

「（もしかしてキャラのブーストアップ……！？）」

暁とキャラが確認出来なかったことからこれほどの威力は恐らくキャラの仕業が有力だ。

「（だけどこれを防ぎきれたら……！！）」

そう。今の二人は空中、足場のない所で競り合っているのだ。もしなのはが防ぎきれたら後は暁は落下するしかない、そこに攻撃を加えたらいくらずばしっこい暁でも避けようがない。

やることは決まった、後は耐えきれば終わる。

「《エアリアル》……！！」

しかし暁は足元にミッド式とは異なる魔法陣を出現させ一時的な足場を得る。

「そんな!？」

勝ちを確信していた要素がなくなり声をあげた。

「瞬間的なら空中戦も出来るんだ。 クライマックスだ!！」

パリッーと暁の右脚に電流が走る。

「!！」

迫り来る蹴撃に備え更に魔力を送りシールドを強化した。

「ウラアアッ!！」

なんの変わりもないただの回し蹴りだ。 だがそんな回し蹴りも
肉体強化によって強化された速度や強度をが加わるとそれは強烈な
一撃となる。

「うっうっ…! レイジング・ハート!！」

【All light my Master.】

徐々に亀裂が広がって行くシールドをみてなのはは光球を周囲に
展開させ、自らの危険を省みず一斉に暁に放った。

そして二人は激しい音と共に濃煙の中に飲み込まれて行った。

第二話（後書き）

さて、第二話投稿完了致しました。

暁となのはの戦い、軍牌はどちらに上がるのか！？まあ気になる方はいないと思いますがorz

今回の内容は時間軸としてはアニメ版の第四話あたりですかね？

次回はリニアールへと話しを進めて行きます、暁にとってはこの世界に来て最初の出撃になります。

まだまだ未熟ですが感想や指摘など有りましたらお願いします。

第三話

『ーレディさんから連絡あったがここがその場所か？』

『おいまて、なんでアキラがここにいる。　って聞かなくていいか』

暁は西洋風の建物が並ぶ街を傍観できる高台に来ていた。そこは先客がいてそれは知人だった。　長身に身の丈ほどの大剣を背負い髭を生やしてはいるが調った顔立ちが印象的な銀髪の男性。　そして一際目に入るのが真紅のレザーコートだ。

『まあ『アイツ』が領主だったって言う話を聞いたからな、どいう所か見てみたいのがあるが……話を聞くとどうもきな臭くてな』

『『魔剣教団』か、質の悪い博物館でも開くつもりらしいぞ？』

街の一角に一際大きな建物、城と思われる建物を見る。

『動物園の間違いじゃないか？　悪魔の反応するし』

『……だな。　じゃあそろそろやるか』

長身の男はフットワークをしながら調子を確認する。

『『アイツ』が俺に関する事を残すとは考えられないが念のため調べてから合流するわ』

『オーケーオーケー。 まあお祭の前に終わらせる事をオススメするぞ?』

そういった男性はあろう事か崖から飛び降りた。

『俺的には終わらせてもらいんだがな』

そんな男性の行動に驚きもせず、暁は来た道に戻るように高台から去って行った。

*

機動六課宿舎・医務室

「…いつつ。 何処だここ」

体に走る痛みには暁は目を覚ました。

視界に入ったのは白い天井。 首を動かせば棚には薬品らしき液体が入った瓶、鼻腔を刺激するアルコール臭… 医療部屋だと連想するための材料が揃っていた。

「（ああ、そうか。 俺高町の攻撃を受けて気絶したのか）」

置かれた状況に頭を整理すると自分は気を失っていたということに自覚した。

窓の外は暗くなっていたが部屋の中は明かりがついていた事から

恐らく深夜には至ってないだろう。壁に取り付けられている時計が証明していた。

「8時…か。腹減ったな。」

幸い大きなダメージは残っていなく動くことに苦はなかった。

「ん？」

ベッドから下りてふと窓の外を覗くと見たことあるオレンジ髪のスインテールが宿舎からでていくのが見えた。

「あれは……ティアナだったか」

見かけた手前、気になるので後を付けることにした。通路で出会った人に『散歩してくる』と言伝を頼んで。

後を付けること数分、宿舎からさほど離れていない森の中の開けた場所でティアナは自主訓練していた。

「（おいおい、あんな訓練した後に自主訓練かよ。タフだなあ…）」

呆れ半分でティアナの自主訓練を見つからないように気配を消しながら見ていた。

内容は不規則に現れる光球を両手に持つハンドガンタイプのデバイス《クロス・ミラーージュ》で狙いをつけるものだ。

——しかし。

「（アイツ……疲れきってるな）」

ティアナの表情は青白く、汗の量も尋常じゃない。それなのにティアナは自主訓練を止めようとは思わない、なにかに強要されているかのように続けている。

「（やばいな、止めるべきだな）」

そう結論した暁はティアナを制止させよう茂みから出た。

「!？」

出た瞬間、ティアナは糸が切れた人形みたいに地面に倒れ込んだ。

「なにやってんだか!！」

急いでティアナの側に駆け寄り上半身を起こし、意識の確認をした。

「おい、しっかりしろ!! ティアナ!！」

「……お兄…ちゃん…？」

閉じていた目を開けると焦点が合わない目で暁をみた。

「起きろ!! 寝ぼけんな!!！」

「ひゃあ!？」

暁の怒号で一気に意識がはつきりしたティアナは悲鳴を上げた。

「な、なななな何なのよアンタ！？……ん？」

ティアナ、思考停止。暁の手は自身の背に当てられ金髪の幼さ残る顔が近い。生涯肉親以外の異性からここまで距離が近い事は皆無だったティアナ。

「きゃああああ！！」

悲鳴と共に乾いた音が辺りに響き渡った。

*

「リイン、このデータ間違いないんか？」

部隊長室にはやてをはじめ、各隊長や副隊長、主要メンバーが一同を会していた。

「はいです…何回もやり直しましたしシャルやシャーリーとやっただけ間違いありません」

妖精、そう表記するのが正しいくらい小人がはやての近くで浮いていた。

「出鱈目だな」

かのデータをみたシグナムも冷や汗を流していた。

神崎 暁

基礎能力

リンカーコア 無し

身体能力 A

魔力生成力 S

空間認識 A

状況認識 A +

戦闘技能

基礎戦闘技能 S S S

陸戦技能 S S -

空戦技能 B

補助技能 C

近接戦闘技能 S S

中距離戦闘技能 S

遠距離戦闘技能 A +

単体戦闘技能 S S S

広域戦闘技能 S S

総合攻撃評価 S S S

総合防御評価 A +

総合評価 S S +

「攻撃と防御の差が激しいなコレ」

ヴィータも顔をしかめながら感想を漏らす。データを見る限り超攻撃型だ。それも局地的に投入可能な戦力として申し分ない程

に。

「リンカーコアが無い？ それなのに魔法が使えるの？」

フェイトが我が目を疑うように呟く。 先のアンノウン——晝は悪魔と称した——に対して行った殲滅攻撃も確かに魔力反応はあったのだ。

「世界の違い、なのかもしれんなあ……」

お互いの世界が違う事を話していたのを思い出したはやてだったが結局は推測だ。

「あと、神崎さんが身につけていたペンダントから気になる情報が出ました」

「気になるデータ？」

シャーリーが端末を操作しあるデータを映し出した。

「これは、デバイス！？」

映し出されたのは機械的な両刃の剣だった。

「デバイス、とは言い切れないですね。話を聞くと魔法とは無関係の世界から来たんですね？」

「そや、向こうは魔法じゃなくて魔術らしい。せやからリンカーコアもないんやと思う。——ああゝアカン、頭んなかゴツチャゴチャや、今日はもう終いや」

情報の整理が追いつかないはやては強制的に今日の事を終わらせる。

他のメンバーも同じらしく同意の頷きをした。

*

それから数日後、簡易デバイス化が完了したアグニとルドラを受け取った暁は機動六課宿舎から離れ、人気のない広場に来ていた。刀は構造上全体的に改造しなくてはならないらしいのでしばらくかかるとの事だ。

「よし、弄られていないようだな」

弾倉部分を取り中身を確認した暁は異常が無いことに安心すると弾倉を元に戻した。

すると朱と翠の装飾銃―アグニ&ルドラ―は淡い光を放ちながらそれぞれの自身を主張する色のブレスレットに姿を変え、暁の手首へと付けられた。

このデバイスと言うのは持ち運びの利点として、待機状態という携帯品……もしくはアクセサリ―として持ち運び出来るようになっていた。

「（クラウド・ソラスみたいなものだな）」

似たような物を持っているため暁は自身の十字架を模したペンダントヘッドを見る。

「とりあえず動作確認しとくか」

今後ガンスタイル主流でやって行くであろうと考えていたため再び相棒を出現させ調子を確かめるために色々と試した。

回路に支障は無いまままで通りに難無く魔力を通わせる事が出来た。

一通りの確認が出来た為、日課にしてる訓練でもやろうかと思ったら――

『神崎さん、大変です!!』

アグニの方からウィンドウが出てはやてが映し出される。

「……どうした」

いきなり現れたはやての映像に驚きつつ説明を促した。

「――わかった。まずはヘリポートに向かえばいいんだな?」

内容は山岳地帯を走行中の貨物列車にガジェット・ドローンが取り付いているというのだ。

いまはまだレリックを保管している車両には侵入していないものの時間の問題のようだ。

「今、フェイトちゃんが出払っててなのはちゃんと新人四人しか出撃できないんです。しかも、その四人は今回が初めての実戦なので……」

「了解した。あと敬語は使うなよ一歳しか歳違っんだからな」

「あはは、そうやね……それじゃあ、お願いや」

「オーライ、協力する以上出来る限りなことはするさ」

その返事に満足したのか、はやて笑みを浮かべて通信を切った。

「確か、ヘリポートは宿舎の屋上だな」

アグニとルドラを待機状態に戻しヘリポートへと向かった。

*

ヘリポートへ着くと既に発進準備は整っており、いつでも離陸出来るようその時を待っていた。

「神崎さん、早く乗ってください!」

乗り口で待機していたのはに急かされ急いでヘリに乗り込む。

「行きますぜ!」

シートに座ったのを確認したヘリパイロット、ヴァイスの声が聞

こえたかと思うと浮遊感が体を襲う。　ちなみに暁は向かい合わせの座席で奥の窓側に座っている。その隣にはエリオ、キャロ、向かい側にティアナ、スバル、なのはという順番だ。

だが。

「フリード…なんで俺の頭に乗るんだ？」

暁は自身の頭の上でくつろいでいるフリードにツツコミを入れた。だが本人は居心地が良いのか「キュッ」と鳴いていた。これに對してはもう苦笑いしかでない。　周りも同意だろう。

「今回の任務はガジェット的全機破壊とレリックの確保。　スターズ分隊とライトニング分隊で分かれ列車の前後から七両目の最重要貨物車両に目指し目標を確保」

なのはの口から今回の任務内容を聞かされる。　四人はこれが初の実戦と言うわけあってあからさまに緊張しているのが目に見えていた。

「俺は？」

「神崎さんはライトニング分隊と一緒に行動してください。　私は制空圏を取るためにガジェット・ドローンを破壊します」

スターズにいるティアナは暁と同じガンナーだ、同じ部隊に同じ役割がいるとバランスがおかしくなる。　即決とはいえ利に適っている判断だ。

了解。と返事したあとエリオとキャロを見たところ――

「固くなるな、最初の出撃で緊張するのはわかるが過ぎるのは良くない。少し気を落ち着かせろ」

緊張故なのか脚が震えているので落ち着かせようと二人の頭に手を乗せる。

「高町から指導を受けているのならその成果をだせばいい」

「神崎さん……。はい!!」

ポンポンと頭を叩くと固くなっていた表情が緩み笑みが零れていた。『兄』という存在が自分にもいたらこんな感じなんだろうかと二人は思った。

「ッ!？」

そこでふと前のティアナと目が合った。だがティアナは首を痛めるのではないだろうかという速度で顔を逸らし外の景色を見た。

それをみたスバルが『どうしたのティア?』とか言っていたがティアナはそれを『なんでもないわよ』と一蹴した。

先日の出来事では一応誤解は解いたものの何かよそよそしい。

「そろそろ目的地に着きますぜ!？」

ヴァイスの声でモニターを見ると貨物列車の周りに飛行物体がうようよしているのが見えた。

「あれもガジェット・ドローンか？」

「はい、AMF持ちですが神崎さんが交戦した？型より性能は低いです」

「オーケー、相棒も戻ってきたからな本領を試すには不足無しだ」
そういつてアグニとルドラを待機状態から出現し両の手に収まる。

「かなりゴツイですがこれ質量兵器じゃ無いんですか？」

デザートイーグルをそのままカスタマイズした外見にティアナは指摘したがなのはが訂正した。

「簡易的だけどデバイス化したから問題ないよ」

「……………というかさ、いつの間に着替えてるんだよお前ら」

気付くと他の五人は既にバリアジャケットと呼ばれる衣服に着替えていた事にツッコミを入れた。

「神崎さんはバリアジャケット着ないんですか？」

「んなもんじゃない」

「ええ！？」

そんなに驚く事なのか？と思ったがこのやり取りの最中にも貨物列車はすぐそこまで来ていた。

「それじゃあ先に出て制空権を取りに行くからみんな、訓練通り

「にね」

「……はい!!」……」

四人の気合いの入った返事に満足いったなのはは単身で出撃すべくヘリの扉を開けた。

「スターズ1、高町なのは行きます!!」

なのはは靴に桜色の羽根を具現し勢いよく蒼天の空へと飛び出した。

「速ッ、もう見えなくなっちゃったな」

一瞬にして遠くまで行ったなのはに対し暁は目を開いた。

「そりや管理局が誇る『エース・オブ・エース』ですからね！
おっとフェイト隊長も到着だ」

モニターを見るとバリアジャケットを装着したフェイトがなのはと合流しガジェット・ドローン航空？型編隊を次々と破壊していく。

「新人ども、なのは隊長とフェイト隊長のおかげで予定通り降下ポイントにつけるぞ!! 準備はいいか!!」

「はい!!」

「行け!!」

「スターズ3、ティアナ・ランスター!!」

「スターズ4、スバル・ナカジマ！」

「いきますー!!」

ヴァイスの合図と共に先に出撃したのはスバルとティアナだった。

「次、チビ共と旦那!!」

「「はい!!」」

「よし、俺から先に行くぞ」

暁とライトニング分隊は後部の12両目の屋根へとヘリから降下する。

「うし」

無事に屋根に降り立った三人。

「さあて、手厚い歓迎はあるかな？」

臨戦態勢に入った暁とエリオ、キャロは来るであろう敵の攻撃に備えて身構えていた。

第三話（後書き）

はい、すいませんぐだぐた街道まっしぐらです（汗

ですがお気に入りに登録して頂いた方がいらっしゃるようで当方感謝感激雨嵐です。（「」「」（古い）

しかしなんだかんで一万PVを越えたようです……。もはや

。。。 （ ． ； ） 状態です。

それだけ読んで頂けているというのは励みになります。今後とも宜しく願います！

第四話

銃声、銃声――

迫り来る円筒状の機械、ガジェット・ドローン？型に対し何発も
の魔力弾が撃ち込まれ爆散する。

「12両目制圧完了」

11両目へと続く扉を前に暁が呟いた。

「すごい、AMFなんてものでもないなんて……！」

魔力による攻撃を半減、もしくは無効化する力場を関係無しに貫
く威力にエリオとキヤロは驚いていた。

「（多少出力に変化があるが……帰ったら調整でもしてやるか）」

違和感を感じていた暁は気を取り直して次の車両への扉を開けた。

「うおわ!？」

扉を開けた瞬間『待つてました』と言わんばかりにガジェット？
型がコードをクネクネさせながら眼前にいたので思わず蹴飛ばした。

「お化け屋敷かよ……」

蹴飛ばしあと直ぐさま射撃しこれを撃破する。すると通信が入
り回線を開く。

『神崎さん！新たなガジェット航空？型がそちらに向かつてるです！』

回線を開くとそこには小動物…改めリインフォース？が映し出されていた。

「高町達は？」

『別方向からきた？型の増援の対処しています！』

「了解、あとはこつちでやろう」

通信を切ると背後にいるエリオとキャロに向く。

「ということだ。俺は迎撃しに行くからあとは二人で進め」

「え、でも神崎さん空戦出来ないんじゃない？」

指摘するキャロとエリオの間を通ながら――

「やりようはいくらでもある。後ろの奴らは俺に任せて二人は七両目を目指せ。それと自分の力を試すいい機会だ、おもいつきりやれ」

これまた頭をポンポンと叩くと侵入するときに開けた穴を通り屋根の上へと登る。

「行こう、キャロ！！」

「はい！！」

二人は気合いを十分に11両目へと入って行った。

「来た来た……」

走行中故に風圧が暁を襲い掛かるがそれをものともせず屋根の上に立っていた。

過ぎ行く景色の中、上空からこちらに迫ってくる飛行物体が幾つか見えた。

「まだ距離があるな…試しに広域魔術でもやってみるか」

暁は銃を持ったまま腕を下ろし目をつむり、自然体で構える。

「『我は請う、断罪の刃。 与えよ、紫電の刃。 我が前の仇なす輩を討ち滅ぼさん』」

暁の足元にミッド式でもベルカ式でもない魔法陣が広がり魔力が暁に集まってくる。そして眼を開くとオレンジだった瞳が赤く染まっていた。

「黒焦げになれ！！『ライトニング・セイバー』！！」

腕を振るうと上空に足元と同じ魔法陣が現れガジェット航空？型編隊に紫電が降り注いだ。

そのひとつひとつがガジェット航空？型をAMFごと易々と貫き次々と爆発を起こした。

「なるほどな、障壁を上回る攻撃なら阻まれないって事か」

瞳の色が赤からオレンジへとグラデーションのように戻っていった。

「お、残った奴もいたか。機械のくせになかなか骨があるじゃないか」

煙の中から辛うじて大破を逃れたガジェット航空？型が出て来て光線が暁を襲うが一步横に移動し避ける。

「墜ちろ……」

アグニに魔力を溜めて引き金を引く。朱い魔力弾が尾を引きながらガジェット航空？型にあたり爆散した。

「……やっぱり燃費悪い」

身体を襲う軽いけだるさを感じながらリインフォース？に通信を入れる。

「おい、後方からの増援はこれでおわりか？」

『は、はいです！ すごいです、デバイスも無しにあんな魔法を使うなんて』

魔法じゃねえって……。そうツツコミたかったが今は戦闘中ということなので抑えた。

「エリオ君！！」

「！？」

後ろから聞こえた叫びに暁は振り向くと以前この世界にやって来た時に対峙したガジェット・ドローン？型の同型機がベルトアームでエリオを捕まえていた。

「まずい！」

あのままだと崖下へと投げ落とされる！そう思った暁はアグニで阻止しようとしていた。

「！？ 障壁か！！」

目に見えるほどの障壁に撃つことは無駄だと判断した暁は肉体強化をかけ、屋根の上を駆けた。

「エリオー！！」

叫ぶがエリオは気を失っているらしくぐったりとしていた。

無情にもガジェット？型はエリオを車両の外、つまり崖下へと投げ飛ばした。

「エリオ君ッ！！！！」

キヤロは悲痛な叫びを上げながら助けようと思う一心で自らも飛んだ。

「キヤロー！？」

それを見た暁も我が眼を疑う。

「ちいー！！」

暁の身体から炎のように立ち上る靄が出て瞳も赤く染まっていく。だがキャロから溢れ出る魔力に訝しんだ。

「なんだ…!？」

よくみると桃色の光が二人を包み込んでいた。

「キャロ？」

この感じはキャロのものか？ と、成り行きを見ていると光がどんどん膨れていき弾けた後には巨大な翼龍の背中に二人は乗っていた。

「あれは、フリードか？」

外見的特徴からフリードと予想できるがその大きさに暁は驚いた。とても先程自分の頭でくつろいでいたフリードとは似ても似つかない。

「フリード、ブラストレイ!!」

キャロの命令と共に光がフリードに吸収され、フリードと同サイズの魔法陣が足元に現れる。

ゾクッ―

これは危険だと直感で感じた暁はそこから離れた。

離れた直後、フリードの口からブレスが放たれガジェット?型を襲う。

「くっ……！」

辛うじて巻き込まれはしなかったものの余波の熱風が暁を襲う。

ブレスの隙間から見えるAMFで直撃していないのが見えた。

「うおおー！」

ブレスが止んだと思ったらエリオがスピーア・アングリフで突進し獲物のストラーダでAMFごと貫き――

「う、アアアアアッ……！」

魔力刃が伸びて背後まで貫き、全身のバネを使い縦へと斬り裂いた。

ガジェット？型は火花を散らしながら爆散する。

「こりゃあ凄いな」

その様子を見ていた暁は感嘆と見ていた。

『ガジェット全機破壊を確認。 スターズがレリックを回収しました、この作戦は成功です……！』

通信回線からリインフォース？の作戦終了の声を聞き二人は安堵の息を吐き、エリオは腰を落とす。

「よくやったな、エリオ。 たいしたもんだよ」

エリオに近づき横にしゃがむと笑みを浮かべながら頭をクシャッ

と撫でた。

「はい。でもキャラのブーストのおかげですよ」

撫でられても嫌な顔ではなく、寧ろ照れているようだ。

「んじゃあ訂正しておこう。たいした奴らだよお前ら二人は」

*

時同じくして一人の男性が暗い部屋で笑みを浮かべながら先程の戦闘をモニターで見ていた。

モニターに映っていたのはエリオ、フェイト、スバル……、そして暁だった。

「ククク、必ず手に入れる……」 そう呟く男性だが部屋の暗さがより一層の不気味さを増していた。果たして彼の言う『手に入る』とはどういった意味を成すのか…。

*

レリックの搬送をするためヘリで先に帰還するスターズの二人。

ライトニングは事後処理の為列車を停めて現場に待機していた。

「あぶねえな…。思わず一次解放するところだった」

暁はやることが無いので列車の屋根へ寝転がっていた。

『神崎さん、スターズと一緒に帰還してもいいんよ?』

不意にはやてから映像通信がはいる。

「……そうだな、そうさせてもらうか」

悪魔の反応も無いしこれ以上いても邪魔になるだろうと考えた暁は素直に聞き入れた。

「!？」

『どうしたん?』

身を起こそうとした暁は直感的に感じた寒気に暁の表情が一変する。

「八神、悪魔が来たぞ」

『なんやて!?!』

気配のする方向に眼を向けると紅い鳥みたいな飛行物体がこちらに接近しているのが見えた。

『なのはちゃん、フェイトちゃんあのアンノウンが現れた!!
確認例にあった紅い鳥や、迎撃をおねがい!!』

『了解!!』』

モニター越しから聞こえる二人の声が聞こえた。

「八神、この通信は二人に聞こえてるか？」

『？　そうやけど、それが一体？』

「ブラッドゴイル、人間の生き血を浴びたガーゴイルみたいな下級悪魔だ」

『生き……』

息を飲む音がモニターからでも聞こえる。

「関して俺の世界で悪魔関係で伝説になってる話をしなかったな。帰還後に話す」

『……わかった。　それでその何とかゴイルの攻略方とは？』

「手っ取り早いのは血のヴェールを剥がした後、本体の石像を破壊。　高町やフェイトなら魔力波を当てればすぐ終わるさ」

暁は通信を切るとアグニとルドラを構えいまだ遠くに見えるブラッドゴイルの群れを見据える。

「神崎さん、アンノウンが!!」

後ろから事後処理をしていたエリオとキャロが駆け付けてきた。

「大丈夫だ、攻略方教えたから高町達が撃破するさ」

見るとなのはが桜色の魔力波を放ち血のヴェールを剥がし、あらわになった本体の石像をフェイトが破壊するというコンビネーションで確実に数を減らしていく。

（悪魔を臆せず対峙するとは中々肝が据わってるな）

その光景を見ていた暁は改めてこの世界の人間に対して感心した。悪魔とは人間の恐怖を誘う装いであるのが普通だ、だが少なくとも彼女等は平然と戦っていた。

（『あの時』にもそんな人間がいればアイツは魔帝なんてふざけた奴にも殺られなかっただろうに）

「神崎さん？ どうしたんですか？」

「なにがだ？」

声のした方を向くとエリオがキョトンとしていた。

「あ、いえ…、なんか悲しそうな顔してたので」

「気のせいだろ？」

暁は一蹴して視線を戻すとブラッドゴイルの群れは掃討されていた。

「神崎さん、アンノウンを撃破出来ました。アドバイスありがとうございました」

二人が暁のそばに降りると礼を述べた。

「撃破したのは二人の実力だ。とりあえず宿舎に戻ろう、話しておく事があるからな」

その後迎えに来たヘリ乗り込み機動六課の宿舎へと戻る一同だった。

*

「おい、ダンテ。アキラはここに居たのか？」

その頃暁の居た世界では銀髪の青年と同じく銀髪の男性がある遺跡の中を歩いていた。

ダンテと呼ばれた男性は真紅のレザーコートを翻し青年の方を向いた。

「俺が知る訳無いだろ。しかし見るよ坊や、噂通り悪魔がわんさかだ」

前を向き直るダンテの視線の先にボロ布を被り痩せこけた悪魔が現れた。ダンテ自身、数年前の出来事を見たヘルプライドだ。

「文献で見た奴らだな」

青年は片刃の大剣、男性は無骨で鎧に髑髏をあしらった不気味な両刃の大剣を構えた。

「意外に勉強熱心だな」

「…アンター言多いんだよ」

悪魔を前に軽口を叩く両者。ダンテからしたら素直な感心から述べた言葉だった。が青年はそれが感に触った。

「…褒めたつもりなんだがな」

息を吐きやれやれと両手を上にあげる。

「さて、奴さん達もそろそろ痺れをきらしてきたぞ。準備は良
いかい坊や」

「いいぜ」

二人は視線を鋭くそれぞれの獲物を持つ手に力が入る。

「Let's Rock!!!」

掛け声と共に二人は地を駆け、悪魔の群れの中に自身の身を投じた。

第五話

「——さあて、話そうか」

そういつた暁は自身の世界に伝わる魔剣士の伝説について話そうと宿舎の会議室に主要メンバーが集まっていた。

「ああ…出鼻をくじく様で悪いんやけど話す前に一つ質問が…」

怖ず怖ずと手を挙げるはやて、しかし視線は暁ではなく自分の前に置かれてる香ばしさ溢れる山盛りのクッキーと芳醇な薫りの紅茶だ。恐らくアッサム茶葉を使用しているだろう。

見渡せば殆どのメンバーがクッキーをマジマジと見ていた。スバルやエリオに関しては一段と魅入っていた、特にスバルはよだれを垂らしていた。はっきり言ってはしたくない。

「このクッキーと紅茶、誰が用意したんや？」

「……長話になるから食堂の調理場を借りて茶とお茶受けを用意した。クッキーに関しては俺のオリジナルだ」

「え！？これお店で買ってきたものじゃないんですか!？」

まず実家が喫茶店のなのが声を上げた。

「戻ってきてから姿が見えないと思ったら食堂の調理場にいたんだ」

続いてフェイトが苦笑いしていた。

「なんかアンノウンより先に神崎さんの素性が知りたくなってきた」

コクーン――

皆一斉に頷いた。

「……悪かったな、料理するの好きなんだよ」

余程意外だったのか全員が驚愕の声をあげる、これだけの人数で一斉に声をあげればその音量たるやかなりのものだろう。

「耳が痛いぞ」

瞬時に耳を塞いだもののやはり並外れて大きかった為ダメージを受けた。特に鼓膜に。

「え、だって神崎さん男の人なのに……」

「それにイメージ的に……」

「なんだよそのイメージって……。とりあえず俺の事は置いていて話するぞ。これは俺の世界でお伽話として語り継がれているが実際に起こった実話の伝説だ」

どんなイメージを抱いてたんだ、という暁は呆れながらも本題に切り替えた。

遙か昔、魔界にスパードと言う魔剣士が存在した。彼の者、人々を愛し、正義に生きる者。

ある日、魔界の人間界進行により人々に恐怖と絶望を与え、混沌が支配しようとしていたその時彼は立ち上がった。

彼は魔界を封印すべく、自ら同胞に剣を向け、魔界の王にも戦いに挑む。

長きの死闘の末、スパードは自らの強大な力と共に魔界を封印する事に成功すると言う伝説が語る継がれてきた。

しかし時と共にその伝説は人々の記憶からどんどん忘れ去られていった……。

「そして約2000年の月日が流れて今に至るという訳だ」

「なんだよそれ、よく出来たお伽話みたいなものだな。悪魔とか魔界とかさ」

一区切りつけ皆の反応を待とうとした時ヴィータが鼻で笑う。

「お伽話、話しだけならな。だが、実際はどうだ？ これまでの確認例や先程のブラッドゴイル……その目で見たんだろ？ これは間違いなく現実だ、アンタの言う体のいいファンタジーじゃない」

「……なんだとテメエ？」

「よせヴィータ」

暁の指摘にヴィータは目付きを細め待機状態のグラーファイゼンに手を掛けるもシグナムが止める。そんな様子を気にもとめず先を話す。

「それと、スパイダが施した封印についてだが。例える話で言えば『網』だな」

「網……ですか？」

シヤマルが聞き返すと暁が肯定の頷きをする。

「そのおかげで強力な悪魔はこちら側、つまり人間界にこれなくなった。逆に弱小な悪魔はその網をかい潜る事が出来るものの何かを媒体、依り代が必要となる。あのブラッドゴイルだと石像と血だな」

要するに結界とは目の大きい網と比喻するのが適切というわけだ。

「八神、これまで確認出来た悪魔を表示してくれ」

「はいな」

はやてが端末を操作し、今まで確認できた悪魔の画像データが呼び出しスクリーンに映した。

「こいつらの中でその強力な悪魔と言うのは……こいつ」

スクリーンの前まで歩き、ある悪魔をさす。

その悪魔は全身が黒で人型だが、見るもわかる獣のような強靱な

四肢が伺える。

「こいつは上位種の悪魔だ、自称光を司る悪魔とっている」
鼻で笑うように説明した暁。

「ちよつと待って、その黒いアンノウ……悪魔って強力なものなんでしょう？　なのになんで結界なんて通れるの？」

フェイトが暁に質問する。先程の暁の説明じゃ、その結界という網に引っ掛かりこちらに来れないはず。

「結界に亀裂が生じてそこから来たか、魔界と繋がってこちらに来たか……最悪なパターンは——」

一瞬を開け。

「何者かが『こちら側』から喚び出したか、だな」

流石にこれは皆驚くだろう。人の手であるアンノウン達が出現するとなるならこれはれっきとした犯罪だ。

「そういうのは可能なんですか？」

「知識と『鍵』があればな。俺の世界に至っては自らの欲望のために悪魔と契約しようとする奴も居た」

高町の質問に対し暁は自身の世界で実際に遭遇した事例を上げた。

「そしてある奴は悪魔とその力を利用し『楽園』を築くだとかおかしい世迷事を放つ奴もいる」

「なんでそんな…」

「それが人の欲望というやつだ。利己心でな……。ところでこいつ、ベオウルフというんだがいつ姿を確認したんだ？」

暁一つ気になることがあるのかベオウルフに関する情報を聞いた。

「えっと、二ヶ月前だな。それがどないしたん？」

「上位悪魔は言葉が喋れる知性が備わってるからな、何か言ってなかったか？」

「ちよつとまってな、今映像データ探すから」

はやてが再び端末を操作し目的のデータを探す。

「ん……。あ、あつたこれや!!」

スクリーンに映し出された光景はベオウルフと対峙している管理局の局員達だった。

「……………!!」

「……………何言ってるか聞こえないな」

「ん……。じゃあこれなら？」

徐々に音声が拾えてきたがそれに比例してノイズ音もでかくなる。だがベオウルフの発した言葉はしっかりと聞き取れた。

「裏切り者、スパイダの血族は何処だ——！！」

咆哮といえる叫び声に画面越しからでも恐怖を感じる。画面越しからでも感じる恐怖だ、これを直に受けた管理局員は身を硬直し動けないでいた。

そしてベオウルフが映像を記録していたであろう管理局員に近づき、その豪腕を見舞った。そこで映像は途絶えた。

「……………」

「悪魔とは人の恐怖を与える風貌をしている。闇を恐れることで悪魔は生まれいずる」

「こんな奴、見たことねえ……………なんなんだよ」

あの勝ち気なヴィータが恐怖故に少し震えている。

「八神、映像をきつてくれ」

「りよ、了解や……」

操作する指の動きも恐怖により震えていた。見渡せば皆少なからず恐怖を感じていた。

「……………ひとまず話せる事は以上だ」

フォワード陣も恐怖していて特にキャロがぐずっていたので話を終了し暁は会議室を後にした。

＊

「おいダンテ」

「なんだい坊や」

男性と青年。 以前とは違う森の中をふたりして木の枝を分けながら進む。

「ここどこだよ、明らかに遺跡じゃねえぞ」

「俺だって知らないさ」

道に迷ったと言わんばかりの内容だ。

「あの機械を撃ち抜いたのがまずったな」

「おい！ なに言ってるんだ坊や、お前だって容赦なく撃ち抜いただろ」

森の中で木霊する二人の声、聞くからに子供地味な喧嘩だ。

「にしてもここ、何処だよ。 魔界じゃないだろうな」

「いや、それは無いな。 肌を感じる空気が違うからな」

昔、魔界まで行った事のあるダンテが自らの経験を元に「ここは魔

界では無いと確信する。

「それに魔界はこんなに明るくないしな」

二人は森の中を歩いてはいるものの樹海のような暗さではなく森林浴出来そうな気持ちの良い木漏れ日が二人を包む。

「……なあ思ったんだがアキラもここに飛ばされたって可能性はないか？」

「……なくはないな」

先に調査をしていた暁が消息不明になったと聞き今度はこの二人が遺跡を調査するはめになった。

暁が消息不明になったとしたら自分達のように何処かに飛ばされたという可能性はでかい。しかし同じ世界に飛ばされた可能性は限りなく低い。

「とりあえずだ。坊や」

「なんだよ」

「食い物さがすぞ」

「……異議無し」

流石の二人も悪魔を倒しうる力があるが、空腹には耐えられなかった。

＊

「——んで、俺に銃の稽古をつけて欲しいと」

会議室からでた暁は愛銃の調整のために自室で手入れをしていた。そこに来客が来たので扉を開けるとティアナが立っていた。

「はい、私は強くなりたいです」

部屋の中に招き話を聞くと上の言葉が出てきた。

「『強くなりたい』、そういい気持ちはわかる。だが一朝一夕じゃ強くなれない、少なくとも今のおまえじゃ無理だ」

「な、なんでですか!？」

否定の言葉を受け怒りながら反論するティアナ。

「強くなる、ということはそういうことだ。誰でも最初から強いなんて奴はいない、皆それぞれ修羅場をくぐり抜けてきた結果で『強さ』を手に入れたんだ。実戦経験が少ないという点においてそれが自覚出来ないおまえじゃないだろう」

「く……」

おそらく凶星をつかれたのだろう、反論しようにも出来ないでいた。そんな様子に暁はティアナが何を想うのかが気になった。

「……………訓練に対して不満があるのか？」

「いえ、そんなんじゃないんです……………、だけど駄目なんです今のままじゃ……………」

管理局の『エース・オブ・エース』と言われる高町なのはによる訓練だ、不満などない……………だけど。そんなもどかしさに顔を下に向け肩を震わせる。

「……………ふう、ティアナ外に出る」

「え？」

ため息を吐いた暁は調整の終えた双銃を待機状態にして立ち上がる。

「俺がいつもしている訓練と一緒にやるぞ」

未だ話がわかってないティアナの横を通り抜け部屋から出る。

「ちょ、ちょっと待ってください!？」

果たしてこのあとティアナにどういう影響を与えるのか……………、暁はティアナの内に秘めた危うさを感じ一抹の不安を抱いた。

第六話（前書き）

今回は主人公視点で行きます。

第六話

俺達はいまへりに乗り込み仕事先へと向かっていた。

「警備の仕事、か？」

仕事の内容はとある場所の警備か。

「そや、ホテルアグスタにて骨董品のオークションが行われるんやけど中にはロスト・ロギアがはいってんのや。そこでウチらの次の任務はその貴重なロスト・ロギアの護衛と参加者の安全の確保や」

「おい待て、ロスト・ロギアってのは危険な奴でそれを回収するのがここの仕事じゃなかったのか？」

たしかこの六課の方針はロスト・ロギアの回収、及び管理だと聞いていた。

「そうなんやけど、中には取引可能なロスト・ロギアがあるんや。もちろん管理局の許可があつてな。それに一連のガジェットドローンの生産者がわかつたんや」

モニターには男性が映し出された。

「ジェイル・スカリエツィ、生体関係の違法研究で指名手配されているの」

説明を引き継いだフェイトが話すが、こいつの経歴を見るに高学

歴と申し分ない、いかにも天才と言えるな。この憎たらしい顔がなければな。

「コイツがあのがジエットの生みの親？」

「はい」

レリックというロスト・ロギアを狙うガジェットドローン、その生みの親となるこのスカリエッティとは少なからず因縁はあるということか。

しかし、あれだな。

「話しは代わるが八神」

「なんや？」

「この制服、誰のだ？ 俺にあうサイズなんて都合よくあるのか？」

昨夜、着替えに困っていた時に八神から「ずっと同じ服というのもキツイやろし、ここの服に着替えたらええよ」と渡されたのが機動六課の茶色の制服だった。

「一通りのサイズは在庫あるってきいてたしな。それに男性のは女性のより多いんや」

「なるほどねえ」

「でもよく似合ってますよ」

「きゅ〜」

高町から褒めの言葉がでたので素直に受けとっておく、ついでに
定位置になりつつある頭の上のフリードも同意見だろう。…なん
となくわかる。外をみると都市が見えてきた、もうすぐ到着か。

八神、高町、フェイトの三人はホテル内の警備。フォワード陣
とヴィータは周辺の警備、俺はどちらでも言うことだがとりあえ
ず中を見てからにすることにした。ヴィータは俺に対し、よく思
つてないらしく睨んでいたが敢えて気にしない。

「お待たせ」

ホテルのロビーにて三人を待っているとパーティードレスに着替
えた三人が戻ってきた、やはりパーティードレスの肌の露出度が高
いのは世界共通か。

「へえ、よく似合うな。馬子にも衣装とは……よく言わないか
ら青筋だすな」

元の世界にいた時も身内に同じような事を口走ってしまったから
な、あの時の地獄は魔界より酷い経験したな……。

「…これは少し教育的指導が必要みたいだねなのは」

「奇遇やなフェイトちゃん、ウチも同じ事を考えとったわ」

「少し、お話しようか。神崎さん？」

「悪いがそんな実力を行使したお話は熾烈に激烈に猛烈に遠慮しとく」

「ここは大人しく退散したほうが得策だな。」

「ふむ、中は大丈夫なようだから外の様子を見てこよう」

このままでは虎に狩られる兎の図になるからな。 出口まで全力で走る！！

「あ、逃げた！！」

後ろでなんか言ってるが無視だ。 なんとなく……いや、絶対に修羅が居るからな。

*

それから数時間後予定通りオークションは執り行われていたが、ガジェットドローンが突如襲撃してきた。

大体、お決まりのコースなんだよな。

「わるい、遅くなった」

「神崎さん！？」

オークション開始直前になってまたホテル内の見回りをしていた

から合流に遅れてしまった。

ティアナの横を駆け抜けながら双銃を出しガジェット？型目掛け跳躍、ドロップキックをかます。蹴飛ばした後体勢を直し、魔力弾を数発撃ち込む。

障壁が展開されていた様だが関係なく撃ち貫いた。よし出力は安定しているな。

「？」

ふと後方から魔力を感じたのでそちらを見た。

「シュウウー！ツッ！」

「ティアナ？」

視線の先、ガジェットで見えないがその先からティアナの声がした。

魔力量からして強烈な一撃でも放つところか、まあ良いけどさ…。

「味方まで巻き込む気かよ……」

射線上には俺とスバルがいるのを見落としてないか？

スバルは気づいてなさそうだし…。

「くっそおおおおッ！！」

何処からかヴィータの声が聞こえるがスバルの方が優先だ。

「え？」

「まったく、しかたねえ、な!!」

スバルの前にでて迫り来る魔力弾に対し身構える。俺は防御に
関しては自信がない、だから――。

魔力を込めた拳で『相殺』する。

衝撃により俺とスバルは煙に包まれる。

「――げほッ、くそ…むせる」

「か、神崎さん！？ 大丈夫ですか!？」

背後からスバルが声をかけてくる、大丈夫じゃないならやらんぞ。

「お前、……なんで？」

飛んできたヴィータが信じられないような表情でこちらを見ている。

「心外だな、『仲間』なら当然だろ」

「あ……、ああ……」

ティアナは体を震わせながらこちらを見ている。だが…。

「神崎さん、何を!？」

ルドラの銃口をティアナに向け魔力を溜める。

「テメ!？」

ヴィータが止めに入ろうとするが残念、俺の方が早い。

引き金を引くと翠の魔力弾が幾つも形成されティアナに向かう。

「まだガジェットが残っているんだ」

標的は背後からティアナを襲おうとしていたガジェットだ。

自分の重大な過ちに気づき呆然としていた為に背後には気付かなかったようだ。

「ちつ、スバル、ティアナ連れて離脱しろ。後は俺とコイツでやる」

まだ残っているガジェットに舌打ちをして指示を出す。

「勝手に指示すんじゃないよ!？ お前はただの協力者だろうが!！」

「確かに俺はただの協力者だ。だが戦闘出来ない程にショックを受けた奴を守りながら戦えいいのか？ ある意味じゃ適切な判断だと思うが」

「ぐ…!」

そこまで言うとはヴィータは押し黙ってしまったが仕方ない。

「スバル、早く行けよ」

いつまで突っ立てるつもりだよ。

「は、はい!!」

スバルが撤退してから俺達はガジェット達を殲滅し六課に帰還した。　どうやらオークションも終了し参加者やロスト・ログアも無事ということなので今回の任務は成功とあったところだ。　だが問題もでた、先ほどのティアナのミスショットの件だ。

酷く落ち込んだ様子のティアナ、外で一人で地面に座っていたが一人にしておいた方が良かったろうと判断しそつとしておいたと同時に嫌な予感が過ぎる。

出来れば気のせいであって欲しかったがそれは裏切られた……数日後のトレーニングにてそれは起こった。

*

スターズとライトニングでわかれ模擬戦をしている時だった。

「神崎さん」

「フェイト、どうした？」

ヴィータ、ライトニング二人と観戦していたらフェイトがやって来た。

「今日の模擬戦代わろうかと思ったんだけどなのはに断られちゃって」

「たしかに最近のアイツの訓練密度は高いからな…すこし休ませないとな」

教導隊の訓練やここでの訓練……たしかに密度が高い。フェイトの話だと夜遅くまでフォワード陣の訓練の映像記録を見ていたと言っていた。

だが、なぜ高町は訓練の意味を伝えない？

それゆえにティアナは不安し自分に劣等感を抱くことになるのだ、スバルからティアナがそのようなことを呟いていたと聞いた。そう思うと段々と苛立ってきた。

「ティアナや高町は何を考えているんだ」

「何をいつてるんだお前」

先日以来俺に対して接しかたが少し柔らかくなったヴィータが訝しげに聞いた。

「ティアナは強くなりたーい一心で俺に教えてほしいと言ってきた。だが高町の訓練は意味あるもののティアナにはその意味が届いてなかった……だからアグスタの時にあんな無茶をしたんだ」

「アイツ、お前にそんなことを頼んでたのか」

「ティアナさん……」

隣にいたエリオとキャロが心配そうに彼女を見ていた。

「大事にならなきゃいいが……」

そう呟くがやはりその期待は裏切られた。

無茶な戦略を立て危険を省みない行動をとったティアナとスバルに対してついに高町がキレた。

「……どうしちゃったのかな？」

レイジングハートを待機状態にして二人の挟撃を受け止める高町、ティアナのダガーを素手で止めたせいか血が滴る。その事態に理解したティアナは悲痛な表情で下がり積もった不安を打ち明ける。
が――

「頑張ってるのはわかるよ？」

魔力が増大している？ 何をする気だ！？

「神崎さん？」

「けどね、模擬戦は喧嘩じゃ無いんだよ？」

あの眼は正気じゃない――！

「少し…頭冷やそうか」

「《サーキット》！！ 《エアリアル》！！」

肉体強化をかけ、魔法陣の足場を作り二人の間に急ぐ。

お互いに魔力を溜め、放とうとしている。　ちッ、間に合うか！？

「起きろ、《クラウド・ソラス》！！」

【了解】

胸元のペンダントを取り相棒を起こす。

音声がでた後、十字架を模したペンダントが光を放つと身の丈程の大剣に変わった。　見かけは機械仕掛けの大剣といったところだ。

「オラアア！！」

なんとか二人の間に入り、高町がティアナに放った魔力砲を断ち切った。

「か、神崎さ…ウツ！？」

俺はティアナの鳩尾に一発入れ気絶させる。　ぐったりするティアナが落下しない様に片腕で支える。

「邪魔しないで欲しいな、神崎さん」

高町の言葉を見殺し、ティアナを医務室に行かせるためにスバル

にまかせよう。

「スバル、コイツを医務室に運んでくれ」

「は、ハイ!!」

やって来たスバルにティアナを渡し俺は高町と向かい会う。

「お前、ティアナを撃墜しようとしたな？」

確かに危険な行為したのはマズイ。だがそれ以上に高町がティアナを墜とそうした行為もマズイ。

「なぜだ？」

「……どうということかな？」

どうやら話を通じてないらしくそれが俺の苛立ちを加速させた。

「ちッ、いちいち言わなきゃならねえのか？ はつきり言っぞ」
「テメエも頭冷やせ」

クラウ・ソラスの切っ先を高町に向けて言い放った。

「酷いこと言うね神崎さん、でもそういうあなたも頭冷やそうか」
そういった高町はレイジングハートを出し球体状の魔力を形成し自身の周囲に展開した。

「足場のない空中でわたしと戦えるの？」

「やりようならいくらでもある」

「へえそう、なら是非とも見せてほしいな」

そういった高町は球体を操り俺に攻撃して来た。俺はそれらを全てきりおとす。

「クラウド・ソラス、スタンモードに移行。物理ダメージ最小限、魔力ダメージ優先」

詳細設定をして極力怪我しないようにする。

【スタンモード……移行完了】

設定完了の音声を受け俺は高町に切り掛かる。

「はああ!!」

「レイジングハート」

【Yes my master.】

高町がレイジングハートに命令を出すと桜色の魔法陣が現れる高町を護るように展開した。だが――

「!?!」

「吹っ……飛べええ!!」

その防御ごと飛ばし、高町はビルに突っ込んだ。

埃と塵を巻き上げる先を見据え俺は別のビルの屋上に着地した。

「あのなのはガードごとすっ飛ばしたのかあいつは!？」

離れた場所からヴィータの声が聞こえた。

【魔力反応健在】

「だろうな、流石に気絶はしないだろ。もしもの時は一次解放するぞ」

【……いいの?】

「空中戦するならその方が良いだろ。あの姿にはならんようにするし」

あの姿になるのは、なるべく避けたいからな。

「まあ一気に決めるときの奇襲に使うか」

出来るなら一次解放する前に気絶できればいいんだが、まあ無理だろうな。

【魔力反応増大】

ほらな？

「……なんかさ、やな予感するんだが」

たしか聞いた話しじゃ高町って砲撃が得意とかだったような……

「やっべー!」

危険を感じすぐさまそのビルから移動するため跳んだ。

すると高町が突っ込んだビルから魔力の砲撃が俺が今いたビルの屋上を削った。

ルドラを取り出し、数発撃ち放つ。

砂煙に隠れている中で乾いた音がしたので防がれたんだなと思う。遠距離なら向こうの方が上手か、なら突っ込むしかないな。

「《エアリアル》!!」

魔法陣を出してその上に乗り高町に向かって飛ぶ。

「自由のきかない空中で移動なんて無謀だよ?」

ビルから高町の声と共に魔力の塊が無数に飛んできた。

「ちッ!」

身を振り、避けきれない物は切り伏せた。そのため速度を落とされやむなく《エアリアル》を出して上に着地した。

「凄いね神崎さん、リミッターが掛かっているとはいえ結構本気な

んだよ？」

ビルから出てきた高町が足に同じ魔力光の羽根を出して浮かんでいた。

「なら本気でこいよ、じゃないと今度は俺がいただくぞ」

見上げる構図ででかい一撃を要求するように挑発する。今回はいただくというのは嘘ではない、事実勝機は有るしあいつは俺が空戦出来ないと思ってる。

「……それじゃ遠慮なく。 レイジングハート」

【All right my master.】

レイジングハートが光を放ち、収まると形状が変わり先端が槍のような形になった。

「まさかなのはやつスターライトブレイカーをぶっ放すつもりか!？」

「なのは!？」

「たしか神崎さんってバリアジャケット無いんですよね!？ まともに喰らったらただじゃ済みませんよ!？」

「神崎さん!!」

上からヴィータ、フェイト、エリオ、キャロ。

そこまで驚いているなら相当な一撃が来るのだろう。

「一次解放するぞ、モード変更ランス」

【了解】

クラウド・ソラスが大剣から槍へと形状を変えると俺は眼をつむる。

「スターライト……」

「一次解放、リテラエルネルア（躍動の力）……………」

身に収めた力の一部を解放するために枷を外す。

「ブレイカアアアー！！」

「——トリガー！！」

枷を外した直後、高町が放った桜色の魔力の奔流が俺を飲み込んだ。

第六話（後書き）

さあ白い悪魔とガチバトル勃発しました！！ あれ？当初はこんな予定なかったのに……何処で道を踏み外したんだろ……。

まあとりあえず説明をw 主人公が最後に言った『リテラエルネルア』、当作品の題名にもありますがヴァルキリア神話から使わせていただきました。意味は『躍動の力』と言うことです。

あと初の感想をいただきましたあ！！

バシバシ ヽ(T T〃)

ありがとうございます！！これを励みにこれからも頑張って行きたいと思います！！

第七話（前書き）

さて、突如勃発した暁となのはのガチバトルの軍配はどちらに上がるのか！？

第七話

あの二人の戦いから一夜明け、翌日。

会議室で暁はスバルとティアナ、なのはを前に機嫌悪く立っていた。対して三人は椅子に座っているものの暁の威圧感に圧され体を縮めていた。

他の隊長陣やメンバーも居たが触らぬ仏…いや『神』になんとか…、巻き込まれないように距離をおいている。

当事者の構図が蛇に睨まれた蛙に見えるのは暁の背後に阿修羅が見えるからだろうか……、もちろん実際に見えるわけではないがそう感じてしまう。だが手にしている『ある物』が異彩を放っていた。

どういうわけか部屋の片隅にある椅子が見事に壊れていた。

「んで、お前ら頭は冷えたかよ」

「……はい」

「うう……」

「よし、なら一発ずつやってから説教だ」

手にしている物で素振りしながら三人に宣告する。

「ちょ、ちょっと待ってください神崎さん!？」

「一発ずつでそれでやる気ですか！？　そのハリセンで！！」

三人は暁が手にしている『スパーデンジャラス超危険ハリセン・仏陀切』を見て動揺していた。

たかがハリセンで、とは思っただろうがそこは暁のマッドの才能の現れか威力が半端ない。

片隅にある残骸、それがこのハリセンの威力を裏付ける。

「まだわからん様なら三発ぐらいいいこうかと思ったが、それは余りにも可哀相だから一発でいこうというわけだ」

「一発でも十分過ぎる威力だと思うんですけど！？」

「というかホントにハリセンですかそれ！？」

スバルとティアナは一字一句見事なタイミングでハモった、それはもう素晴らしいステレオで。流石長年コンビを組んでる仲だ。

確かにハリセンにしては……というかハリセンとは考えられない威力を有している。

流石にそのハリセンを使って暁の力で叩かれた時は命に関わるだろう。

「大丈夫、威力は抑えるし瀕死になってもこの注射で復活させるから」

黒い……、会議室には日差しも入り電気もついているのに暁の周りには黒く…闇が漂っていた。しかも手にしている殺傷力を持った伝説のツッコミアイテムと、どす黒い液体が入った注射器が恐怖を二人に与えていた。

「……そういう問題じゃないですってええ！！！！」

六課宿舎に三人の悲痛な叫びが響き渡った瞬間だった。

*

時は遡り昨日の戦闘。

「リテラエルネルア（躍動の力）……トリガー！！」

暁の身に秘められたる力の一部を解放し、迫り来る魔力砲に身構える。

やがて魔力砲は当たり、地響きと砂埃が舞い上がり辺りを覆う。

「……………」

あの手応えなら直撃だろうと着弾点を見入っていたのは――
――だが。

【Master!!】

レイジングハートからの警告が出た直後、暁のいた場所から何か

が飛んできた。

「槍？」

飛んできた何かを確認するとそれは先程形状を変えたクラウド・ソラスだった。

「ホントに凄いなあ、今のはリミッターがあるとはいえ全力全開だったんだけどなあ」

なのははそれ避けると飛んできた場所を特定しディバイン・シューターを撃ち放つ準備をする。

「……いない!？」

風が吹き砂煙が流されたがそこに標的となる人物が居なかった。

「そんな、何処に!？」

「後ろだよ」

「!？ きゃああああ!!」

背後から声が聞こえたので直ぐさま振り返ろうとしたが襲い掛かった衝撃によってなのはは悲鳴をあげながら落下していった。術式が途切れたためシューターが解除され消滅した。

クラウド・ソラスを投げたあと一瞬それに注意が逸れた隙に暁は瞬時になのはの背後に飛び、回し蹴りで落としたのだ。

魔力のフレアによって背中に翼を形成し浮かんでいた暁、一際眼を引くのは暁の瞳が赤く光っていた事だ。

「クラウド・ソラス」

投げたクラウド・ソラスを喚び戻すと勝負を決めるために再びなのはに向かって投擲した。

「うつ……………！？」

起き上がろうとした時に真横にクラウド・ソラスが刺さり、直後背後に何者かが着地する音が聞こえた。もはやそれが誰とは言う必要はないだろう。

「Jack pot．いい加減頭冷えたか？」

背後に降り立った暁はアグニを出し、銃口をなのはの頭部に付けた。

「……………はい」

「オーケー、それじゃ説教といきたいところだがティアナが目覚めたらにしよう。お前ら一緒に説教だ」

それで今に至る。

*

「ツたく。 お前ら何がしたいんだ、ホント。 スバルもスバルだ、相棒の暴走をとめなくてどうする」

「え、だ、だって言っても聞かないん」「だったら手綱でもしとけよ」……そっか」

スバル、意外と阿呆だ。

「なに納得してるのよバカスバル！！ 神崎さんも人を暴れ馬のように言わないで下さい！！」

「そのまんまだろうが……まだ地盤が固まってない時期に上へ上へ先走りしすぎなんだよ。 その結果が、これだ」

「う……」

今回の事は確かに焦り、不安から出た自分の過失だ、故にティアナ押し黙ってしまう。

「あのお神崎さん？」

今まで黙ってたはやてがその沈黙を破った。

「なんだ八神」

笑みが……妙に清々しい笑顔が恐怖を誘う。

おまけにハリセンを握り直したのが見えたのではやてもたじろく。

「いやあ、模擬戦の内容みたんやけど。 神崎さんの使ったあの

デバイスみたいななんなん？」

デバイスみたいなもの…つまりは暁の使ったクラウド・ソラスの事だ。そして以前皆が気になっていた事柄でもあった。

「あれは俺の作ったものだ」

そういつた暁はハリセンと注射器背中に仕舞い、ペンダントに手を触れた。

というか背中に仕舞い込むとは…その背中はどついう構造をしているのか…。

「それ自作なんですか!？」

「まあな」

「神崎さんの世界って技術力もこつちと似てるんやねえ…。しかも自作てことは神崎さんも技士やってたんか？」

はやてがそう質問すると暁はあからさまな難しい表情をする。

「いや、俺の世界の技術力でいえばコイツはオーバーテクノロジーだ。故に使わないようにしてたが今回はそうもいなくなってるな」

「…「うつ…」」

ジト目で睨まれ三人は呻きをあげる。

「まあこの世界だとそのデバイスに近い存在だな。まんま質量

兵器ってわけじゃないし」

「ならなんでそのオーバーテクノロジー技術を神崎さんはもって
はるん？」

はやての目が真面目に、探るような目で暁を見据える。

確かに、もとの世界じゃオーバーテクノロジーとなる代物を彼は
自作だと言った。

「悪いが言えない。 時と機があればいずれ話すさ俺の正体と共
に」

「……ふう。 わかりました、ではその時になつたらきちんと話
いよ？」

少しの間を置いて息を吐き出したはやては暁のその一言を信じよ
うと思いこの話題を終わらせようとした。

「さて」

「「「！？」」「」」

暁が説教再開しようとして背中の手を延ばし当事者三人がビクツと体
を反応させたその時、緊急事態を知らせるアラートが鳴り響いた。

「どないしたん！？ ……うん、…空からガジェットが？」

ガジェットが現れたと聞いて暁は眼を細めた。

「……………チツ、命拾いしたな」

最後の方は呟くように言ったのだがそれをはっきりと聞いた者が。

「……（絶対ヤル気だったよ）」「……」

——と心で泣きながら不謹慎にもガジェットの存在に感謝した。

そして、出撃準備を終えた一同はヘリポートでその時を待っていた。

空中戦となるのではとフェイト、ヴィータと暁が出撃することになった。

先の模擬戦で空中戦も可能とわかったので空中での戦力として数えられたのだ。

「ティアナは出動待機から外れておこうか」

ティアナの心体の疲労も相俟ってか体調を考慮したなのはなりの判断だが……。

「言うこと聞かない奴は要らないということですか？」

ティアナはそれを逆手に取り陰の入った声でなのはに聞いた。

「自分で言ってる分らない？ 当然のことだよ、それ」

「……………」

また始まった。模擬戦の時ほどではないが二人のやり取りに暁の表情に再び闇が入った。

「お、おい神ざ…」

それを見たヴィータが暁を止めに入ろうと暁の裾を掴んだが、振り向いたスイッチが入った表情に言葉を詰まらせ思わず手を離してしまった。そして暁は背中に手を伸ばし目当ての物を取り出した。

そうあのハリセン、スーパーデングジャラス『超危険ハリセン・仏陀切』だ。

「——私みたいな凡人は死ぬほど頑張らなきゃ強くなれないんです!!」

出撃前だというのにまだ言っている二人のもとに近づく。

「ティアナ……!!」

シグナムがティアナの肩を掴み、殴り付けようと拳を振るったがその拳は空を切ったのでシグナムはおかしく思った。だが拳が空を切る前に乾いた音が聞こえたような……。

「あううう…」

見ると頭を抑えながらうずくまっているティアナと近くにハリセンを持った暁が立っていた。

「か、神崎？　それで叩いのか？」

恐る恐る聞いてみるが暁は反応しない。代わりになのはに向か

ってもう一発。

パンツ……！——

「きゃあッ！？」

うん、実に良い音だ。

「いつまで低レベルな言い争いしている、出撃だつてのによ？」

「はわ！？」

うずくまるなのは襟を引っ張りへりに引きずり込む。

「はう！？ か、神崎さん、や、やめ……………」

「問答無用」

……………。

「——さて、フェイト、ヴィータ時間が惜しい。 急ぐぞ」

なのはをへりに連れ込んだと思ったらなのはの抗議の声が聞こえた。 が、それもすぐに止み、清々しい笑顔の暁が顔を出した。

一体彼女になにをしたのか…。

仲間の安否を確かめるためにも、ひいては自分の身を護るためにも素直にへりに乗り込む二人。

「ティアナ」

暁の呼び掛けにビクツと肩を震わせながら暁の方に顔を向ける。

「お前は自分が悲観するような凡人じゃない。お前にはお前なりの強さがある、それに気づいてないだけだ」

「え？」

今、あの人は何て言った？ そう思い聞き返そうとしたが扉が閉められヘリが離陸した。

*

「―さあて、今回の作戦はどうする？」

ヘリの座席に座っている暁が眼を覚ましたのはを含めた三人に聞いた。

「なのは、大丈夫？」

「うん、心配無いよフェイトちゃん。さっきより調子が良いんだー!!」

眼が覚めたと思ったら妙に元気で肌がツヤツヤしていたなのはを見てフェイトは心配した。

先程なのはになにをしたのかと尋ねたが暁は会議室で取り出して

たどす黒い液体が入った注射器を打ったという。

なのはもどうして寝てたのか分からないでいたが知らぬが吉という事で胸の中にしまった。

「んで、今回の作戦はどうすんだのは？」

「ん」と、神崎さんは一応近接も中距離も出来るとして。大体どのくらい飛行持続出来ます？」

遠距離だと魔術主体になるので燃費が悪いと言っていたので必然的にクラウ・ソラスによる近距離、双銃による中距離戦闘が暁の役割となる。

「出力調整と戦闘の魔力消費量によるが、およそ15分ってところだ」

本来の力を出せば魔力の消費などなく長時間の飛行が可能だが今の状態だと枷があるのでこの時間が妥当だと判断した。

「ならフェイトちゃんとヴィータちゃんが前衛、神崎さんが中距離にて前衛の支援射撃及び迎撃を。私は後方火力支援します」

「おう、まかせろ！！」

今回の編成にヴィータが意気込み力強い返事をする。

「了解だよ、なのは」

「了解した」

次いでフェイト、暁もなのは編成に頷いた。

「行くよ、レイジングハート」

【Yes my master.】

「行こう、バルディッシュ」

【Yes sir.】

「行くぜ、グラーフアイゼン!!」

【ja.】

三人は愛機を取り出し各々のバリアジャケットを着用する。

「扉開けますぜ!!」

バリアジャケットを着用したのを確認するとヴァイスはヘリの扉を開ける。

気圧と高度、速度もあつてか突風が襲う。だが四人は平然と外を見据えていた。

「スターズ1、高町なのは。行きます!!」

「ライトニング1、フェイト・T・ハラオウン。行きます!!」

「スターズ2、ヴィータ。行くぜ!!」

なのは、フェイト、ヴィータの順でそれぞれ大空という海に飛び込んだ。

「さあ、大空でのパーティーと行こうか!!」

暁も魔力のフレアで翼を形成し、自身も飛び立った。

第八話（前書き）

2 / 2 2 後部に文章追加したため修正投稿しました。

第八話

大空を飛び回る四人はガジェット航空？型の大部隊と対峙していた。

「中距離マルチショット行くぞ！！」

魔力を込めたルドラとアグニを構え、前衛に注意を促す。

前衛の二人が射線上から離れたのを確認するとルドラの引き金を引く。

翠の魔力弾が幾つも発生し前方のガジェット達に当たり爆発する。

「もう一丁お！！」

続いてアグニの引き金を引き、朱の魔力弾が同色の尾を引き連れながら射線上にいたガジェット達を撃破した。

「おいおい……、なんつうでたらめなやり方だよ」

あの一瞬で十数体撃破したやり方を見てヴィータは呆れた。

「多数ならルドラの方が向いてるからな」

左手に持つルドラをガンスピンしながら言葉を放つ。

通常射撃だけなら両方とも余り変わりはないがチャージショットを放つというなら話しは別だ。

アグニは高威力重視、ルドラは対多数重視といった改良を施し、今までの死地を共に乗り越えてきたのだ。

「後方火力支援いきまーす!!」

後ろでなのはがチャージを終え、発射準備をしていたので二人は散開した。

二人の間をなのはが放った魔力砲が通り、多数のガジェット達を巻き込み爆発が軌道上に起こる。

「……はつきり言うぞ、高町のあれの方が出鱈目だ!」

ビシッ。と効果音が付きそうな勢いでなのはに指を指す。

「確かに、なあ……」

過去になのはの砲撃を喰らった経験がある者にしか分からない気持ちだ。

「え!? な、なんのことかな?」

自分が何を言われてるのか分からずに戸惑うなのは、自覚はないのか?

「……まあ良いた、続き続き」

困惑するのはを余所に引き続きガジェット撃破に取り掛かる。

ここまでは順調だ、だが変化は突如として訪れた。

ゾク……

「!!」

体を襲う寒気が暁の気持ち切り替えた。

「神崎さん、どうかしたんですか？」

雰囲気の変わりように一番早く気づいたのはなのはだった。

「……」

「どうしたの、なのは？」

あらかた掃討したフェイトがなのはに聞くがその時にフェイトも気づいたようだ。

「神崎さん、眼が……」

暁の眼が赤く光っていた事に。

「きやがった」

「え？」

呟くように放たれた言葉が聞こえなかったのはは疑問符を浮かべた。

「クラウド・ソラス」

【了解】

双銃を待機状態にして暁はクラウド・ソラスを出現させた。

「悪い、少しの間離れるぞ」

そう告げた暁は魔力を一次解放してどこかへと飛んで行った。

「「ええゝ!?!」」

状況が理解できない二人は驚きの声をあげた。

「おい、神崎の奴どこ行っちゃったんだよ!?!」

それを見たヴィータが駆け付け事情を聞いた。

「わ、わかんないよ……。何か呟いたと思ったら飛んで行っちゃったんだよ」

「っち、とりあえずアタシが神崎の奴を追うからここは任せたぞ
!?!」

「う、うん。ヴィータちゃん、お願い……。気をつけてね」

「任せろ!?!」

ヴィータは暁の後を追うべく、暁が向かった方角へと飛んでいった。

＊

「——気配の感じからここらへんなんだがな…」

気配の出所を探し草原を歩いていた暁。

「クラウド・ソラス、周辺探査をかけてくれ」

【了解】

クラウド・ソラスに探査を頼んだ次の瞬間——

「ガアアアッ!!」

物凄い咆哮と共に落雷が起きた。

「……………ブリッツか!?!」

落雷地点を見ると、雷電を身体に走らせ凶悪な双眼をした雷を使役する悪魔が暁を睨み付けていた。

「この状態じゃ、近接はむりだな」

夥しい雷電が身体を被っているため近づく事が出来ない、攻略としてはどうにか雷電を止め一気に倒す必要がある。そのためクラウド・ソラスを戻し、待機状態の双銃を出した。

「ジャアッ！！」

凄まじい速度で飛び掛かるブリッツ。

「相変わらず速いな……！！」

電爪を避け雷撃の余波を喰らわないよう間合いをとりながら引き金を引く。

「そして相変わらず堅いな、くそ……！！」

悪態をつきながらも応戦する暁。

「ガアアアッ……！！」

射撃で対抗していたが突如としてブリッツの様子がおかしくなった。

ブリッツの身体が雷電による黄色から赤い色に変化したのだ。

「なっ……！？」

ブリッツと何度か交戦経験がある暁でさえもこのいきなりの変化に驚きの声をあげた。

「こいつ、様子が違う……！！」

一度ブリッツから離れる。　これまで戦ってきたブリッツは追い詰められるとこのように赤く光るのだが今回そこまでダメージを与えた訳ではないし、そこまでダメージがあるとは言えない。　故に

今回の事態には暁に緊張が走る。

「神崎！！　なんだそいつは！？」

「ヴィータ！？」

声のする方向を見ると赤いバリアジャケットを身につけたヴィータがこちらに向かって飛んできた。　新たなタイプのアンノウンを見てヴィータは暁に聞いた。

「！？」

一瞬だけブリッツから目を離してしまいブリッツの行動を見逃してしまっていた。

ブリッツは両腕を広げ手にエネルギーを集中させていた。　しかし標的となるのは目の前の暁ではない、眼がヴィータの方を向いていたのだ。

「ヴィータ、逃げろ！！」

「は？」

何を言ってるのか分からずヴィータは空中で停まった。

バリバリッ！！――

はつきりと電撃の音が聞こえるほどにエネルギーを溜めたブリッツが両の手を合わせ攻撃態勢に移つり電撃砲がヴィータを襲う。

「ちっ、馬鹿が!!」

ヴィータに悪態をつきながら暁は魔力のフレアを出して飛び上がりヴィータを蹴飛ばした。

「がはッ!! テ、テメエなにしゃがる!!」

いきなり蹴飛ばされたのが氣にくわず突っ掛かるが目の前の状況に氣がついた。

自分が今居た場所に暁が電撃を受け落下していったのだ。

「か、神崎いいッ!!」

落下していく暁を助けようとヴィータが近づこうとしたが赤い格子状の何かに阻まれそれ以上近づけなかった。

「な、なんなんだよこれ!？」

悪魔が自分のテリトリーとして形成する結界で発生元である悪魔を倒すか悪魔自身が消さない限り消えることはない。

「くそ…、久し振りに痺れたぞ…この電気野郎」

痺れが残る身体を震わしながらアグニを杖がわりにして立ち上がる。

「グアアッ!!」

ブリッツは電気の特徴を活かし目で追えないほどの速度で地を駆

け――

「……………」

凶爪がふらつく暁の胸を貫いた。

*

「――あ？」

「どうした？　ってこの感じは…………アキラ？」

ダンテは違和感を感じ、ネロは己の右腕の反応に懐かしいものを感じた。

「とんだミラクルだ。俺達アキラと同じところに飛ばされたみたいだな」

「だが、どこに居るんだかわからねえよ」

「確かにな」

二人は道中出会った悪魔達を倒しながら森を抜け、一先ず人の居るところに向かっていた。

（だが、アキラの奴…………悪魔化したな）

ダンテは暁に起こった異変に眉間に皺を寄せた。

＊

「神崎い！？　おいしつかりしろ、おい！！！」

倒れゆく暁を見て結界の外で叫ぶヴィータ、なんとか中に入ろうと結界をグラーファイゼンで叩くがなんの効果もない。

「ギャギャギャギャー！！」

ブリッツは獲物を倒した高悦感から高笑いを上げた。

倒れた暁を中心に流れ出た鮮血が池を作り出した。通常この出血量では即死の域に至る事をヴィータは理解している。

「畜生、またなのか！？　またアタシは守れなかったのか！！」

自身の嫌な記憶がフラッシュバックする。何年か前になのはが重傷を負いそれから誓った想い、今回目の前で新手のアンノウンが暁の背後から胸を貫いた。

その状況が酷似しているため心理的にダメージを受けていた。

「神崎いッ！！！」

ドクンッ――

「え？」

何処からか聞こえる鼓動音、それは心理的ショックを受けていたヴィータの鼓膜を刺激した。

「……………そこまで叫ばなくても聞こえるっての」

「お前、まだ生きて……………」

「勝手に殺すなよ」

ゆっくりと立ち上がる暁にヴィータは何が起こったのか理解できないでいた。

「グア……………」

先程まで高笑いを上げていたブリッツが暁の様子を見て警戒していた。

「神崎、もういい立つな!!」

「大丈夫だ、傷ならじきに癒える」

立ち上がった暁は後ろにいるブリッツを睨み付ける。

あの出血量から素人目から見ても即死なはずだ、なのに暁は平然と立ち上がったのだ。

「ああくそ……………おいテメエ、覚悟は良いんだろうな?」

キッと眼を鋭くすると暁を中心に風が吹く。

「文字通り、出血大サービスだ――」

暁の身体が淡い光に包まれ――

「――遠慮なく受け取れよ――!」

光り輝いた後には先程までの容姿とは異なる外見をした暁がいた。

「か、神……崎……?」

容姿は髪が腰まで伸び耳も細く伸び、服装も黒を基調としている。そして一際異質なのは……二対の翼が背部にあることだ。

「《時空にして漆黒が命じる、彼の者を束縛せよ》」

暁がなにかの詠唱を唱えるとブリッツの周りに鎖のような物が空間から現れ、ブリッツの四肢と首に巻き付き捕らえた。

「ギィアアアッ!!」

苦悶の声を上げ振りほどこうと足掻く。しかしどれほどの力が加えられているのか鎖はびくともしない。

ブリッツから更なる力が放たれ赤く光るがそれはすぐに収まった。

「無駄だ、例え自爆しようともその力は封じる……」

暁は背を向け、ゆっくりとブリッツから離れる。

「貴様には俺のオーマの力にて葬ろう」

手の平を前に翳し、魔法陣を展開し再度呟く。

「《時空にして漆黒たる我が命じる、断罪の刃にて彼の者に凄惨なる裁きを与えよ……我が名は『明星の暁』——》」
あかつき

詠唱を唱えるとブリッツの周りに幾つもの魔法陣が浮かび取り囲む。暁が手を上へとあげると魔法陣が光りだす。

「《滅せよ》」

腕を横に振ると暁の前に展開していた魔法陣が砕け、ブリッツを囲んでいた魔法陣から大量な魔力を孕んだ奔流がブリッツを飲み込んだ。

悲鳴や断末魔をあげる事を許されない攻撃によってブリッツは消滅した。

結界の大元が居なくなつたため空間を遮っていた赤い結界は硝子が割れるような音を出しながら砕けた。

「……………」

「……………何呆けてんだよ」

悪魔を倒し、結界もなくなつたというのになんの反応が無いヴィータに暁は聞いた。

「お前、本当に神崎か？」

訝しげに聞くヴィータに暁は苦笑いした。確かに風貌から言って先程の暁とは似ても似つかない、唯一似ている所があれば幼さが残っている顔立ちぐらいだろう。

「まあこの格好だしな、そう思う気持ちも分からなくはないな。今元の姿に戻る」

再び淡い光りが暁を包むと陸士服を着た元の暁に戻った。貫かれた傷はなくなり綺麗な肌が見えているが服は穴が開いているうえ、前面が血によって濡れていた。

はつきり言って気持ちの良いものじゃない。

「……………よし、スフレッド威力最弱」

威力を最低までに弱めた術式を組み立て暁の頭上から滝のような水流が暁を飲み込み血を洗い落とす。

ほんとまあ器用なやり方である。

「ぷはぁ、さっぱりした！」

血を洗い流した暁は清々しい表情をしていた。すると通信が入り回線を開くとなのはが映し出された。

『神崎さん、ヴィータちゃん聞こえる？』

「ああ、聞こえるぞ」

暁が反応するとなのはは安堵の表情と息を吐いた。

「良かったあ、いきなりどこかへ行っちゃうんですから心配しましたよ……」

「悪い悪い、悪魔の反応があつたからな。とりあえずその悪魔は倒したからそっちに合流するわ」

通信を切ると暁はヴィータに向き。

「……何か言いたそうだな」

身構えるヴィータにそう言った。

「お前は……何者だ……！」

ヴィータの問い掛けに暁は笑みを浮かべた。

「……人間を愛する人間だが人間じゃない存在だよ。そういえばヴィータさ、さっき俺の名前を叫んでたよな？」

悪魔の力を解放する前の事を思い出しその話を掘り返す。

するとヴィータは顔を真っ赤にした。

「ばばばば馬鹿いつてんじゃないよ！？ 誰が叫んだんだよ……！」

面白いくらいに動揺し慌てたので暁は心の底から笑った。

暁はヴィータをからかいながら帰還すべくその場から飛び去った。

＊

ブリッツとの戦闘から二時間たった後、その場所に一人の少女がやって来た。

「やっとみつけた。　なんだってこんな世界に来たのかしら？」

青紫色の髪を両方結わい、風に靡かせながら辺りを見回す。

青紫色の髪を後ろで結わい、風に靡かせながら辺りを見回す。

「世界を移動したんならそりゃあ見つかるわけないわね…」

少女はハア…とため息を吐き、呆れた。

「暁ちゃんの魔力は……あっちか」

暁の魔力を探り、微かに感じた方角に少女は移動を開始した。

果たしてこの少女は何者で、何が目的なのか…。

第九話（前書き）

遅更新になってしまい申し訳ないです。（――）。

第九話

「……………」

目を覚ますと視界に飛び込んできたのは白い天井、鼻腔を攪る薬品の匂い。自室ではないがここが何処なのか瞬時に理解した。

「身体はもう大丈夫ですか？」

「とりあえず平気だ」

身体に容態を確認し首の骨を鳴らす、その時に時計に眼が行った。時刻は昼前11時辺りだ。

「はあ良かった、神崎さん二日も眠りっぱなしだったんですから心配してたんですよ」

「そうか、悪いな」

「いえいえ、これも仕事ですから。それにしても皆大騒ぎでしたよ、戻って来るなりいきなり倒れたんですから」

前回、帰還した暁はブリッツにより負傷した傷と力の解放の反動により倒れ、昏睡状態に陥っていたのだ。

単なる力の解放なら極度の疲労感で済むのだがあの即死レベルの傷を負い、その治癒にも力を割いたのだ。故に反動として昏睡したのだ。

まあ死なないだけマシだろうな……といつも思っただが。

「それにヴィータちゃんから聞きましたよ。神崎さん、あなた自分で人間じゃない存在と言ったそうですね？」

「言っただな、俺は普通の人間じゃない」

「そして自分の正体は悪魔だと」

「ああ、言っただ……ん？」

思わず相槌を打ったが、言っただ覚えがない言葉を聞き疑問符を浮かべた。

「待て、俺は悪魔だなんて言っただ覚えはないぞ」

「ええ確かに言ってますね、でも神崎さんが眠っている間にお客が来て貴方の事を話しましたから皆ももう神崎さんが悪魔だって事は知ってますよ」

この世界には暁が知っている人物はもちろん、暁を知っている人物はいないはずだ。そのうえ暁の正体を知っているのは元の世界でも親しい者しか知らない、となると……。

「なあ……そいつってどういう「ああきいらあちゃあん……!!」」

そのお客の容姿を聞こうとしたら廊下からでかい足音と聞いた事がある声が突如聞こえた。

「……………エルム!!!!????」

一瞬固まった暁だがその声の主が分かったのか名を叫んだ。

すると医務室の扉が勢いよく開かれた。

「やっと見つけた!!」

少女、エルムは暁の姿を確認すると勢いよく抱き着いた。

「グハッ!!??」

未だベッドの上に上半身が起き上がった状態で勢いよく抱き着かれたらその衝撃はどのくらいだろうか。

ゴンッ――

「£§□%”&　　　　!?”」

その勢いに耐えられず暁は再び上半身をベッドに任せるのだが位置がまずかった。

勢いによって位置がずらされベッドの頭の方にある鉄パイプに後頭部を打ち付けてしまったのだ。

これは流石に痛いだろう。

現に暁は後頭部を押さえながらベッドの上で悶えている。

「いつつ、エルム!　なんでお前が居るんだよ!?”」

何とか起き上がり頭をさすりながら涙目で訴える。

「何でつて、暁ちゃんを捜してたんだよ？」

ぶくうと頬を膨らませながら不機嫌そうに応える。

「ちなみに彼女も元は悪魔だって事も皆しってますので」

「……………オイコラ」

「にゃあゝ!?!」

シャマルの放った言葉に暁は青筋を立て、目の前にいるエルムの両頬を両手で摘んだ。

「おんどりやゝ何処まではなしてんだゴルア!?!」

そしておもいつきり引つ張った。

「ひはひひはひゝゝゝ（痛い痛いゝゝゝ）!?!?!」

引つ張られた頬はギャグ漫画みたく伸びる伸びる…。

「か、神崎さんいくら何でも小さな子供にそんな酷い事しなくても…!」

「ひよおだひよおだあゝ（そつだそつだあゝ）!」

シャマルの宥めにエルムは涙目で同意する。しかし暁は止める

どころか逆に摘んだ頬を廻しだした。

「うにゃあ~~~~!?!?!?」

「そんなこと言うのはこの口か、口か、口かあッ!!」

「ええ加減にせいッ!!」

スパアンツ!!

「又ガッ!?!」

ぐるぐると頬を廻してたらいきなり頭部に衝撃が走る。しかも
先程鉄パイプに頭をぶつけた箇所にピンポイントで。

「暁さん!! そんな子供をイジめるなんてみっともないやない
か!!」

「はやてちゃん!?!」

暁の頭部をアタックしたのは我等が部隊長八神はやてである。
手にしてるのはハリセンのようだ、暁の頭とハリセンから煙りのよ
うな靄が立ち上っている。しかしこのハリセン、どこかで見たこ
とある気が……。

というか何処から湧いて出て来た。

「あ、暁ちゃん……?」

プシュ、と擬音が聞こえてくるような靄を立ち上らせている暁

を先程までやられていながらもその身を案じる。

「おい、八神い!!」

復活。

「お前何処から湧いて出て来た!? それと俺の『超危険ハリセン・仏陀切』をなんで持つてる!？」

やはり暁のハリセンか。

いろいろ突っ込みたい所はあるがとりあえず重要な順位でこの二つをあげた。

「前者は企業秘密だから話せへんわ。これは暁さんが寝てる間に拝借したんや。いやあええなあ〜このハリセン♪ これ見てるとなんか関西人の血が滾ってくるわあ♪」

「お前、鳴海市の人間だろうが」

以前六課の皆で地球の鳴海市へロストログアの調査に出向いた事があり隊長の三人はその住人ということがあった、しかも何の因果か暁の世界の自宅とこの世界のなのはの自宅が住所が同じというのがわかり暁は複雑な気持ちになった。

この話しは別にするとして元に戻る。

「はあ……………んでどうするんだ? 俺とコイツ、アンノウンと同じ存在なんだぞ?」

「アンノウンと同じ存在やろうが暁さんは暁さんや。 エルムちゃんも可愛いからもっぱら問題なしや」

はやてはそういつてエルムに抱き着く。 暁はともかくエルムが可愛いから問題なしって… どうやら別次元の話になってる。

「そーいやエルム。 お前どうやってこの並行世界に来れたんだ？」

「えっと、この空間魔石を使って来たのよ」

抱き着くはやての手から抜け出したエルムは背中をゴソゴソと漁り目当てのものを取り出す。

その様子を見たシャマルとはやてはビクツと肩を震わせた。 暁といいこのエルムといいコイツ等の背中は某青狸の四次元ポケットか？

「けど並行世界だから余程魔力を喰うのね。 悪魔達から奪い取った魔力が一回でパアよ」

取り出したのは手の平サイズの綺麗な琥珀色を放つ石だった。

「そうか、魔界の何処かの馬鹿が人間界に侵攻してくるときに先手として使えると思っていたが、こういうことに使えるとは思わなかったな。 空になった魔力は奴らからまた奪えばいい」

「そうね、まあ向こうにはスパーダの息子と血縁者が居るし彼女達も居るからそういう馬鹿が出てきても問題無いだろっし」

「特に有名な奴はムンドウスぐらいか？ 何年か前にダンテにやられてたからなあしばらく大人しくしてるだろうし」

「まあ人間が魔界とのトンネルを無理矢理繋げなければ問題ないわね」

「「????」」

暁とエルムが話してる内容がわからない二人は疑問符を浮かべていた。

「あのー暁さん、エルムちゃん？ 何の話したかみえないんですけど……」

怖ず怖ずと手を挙げるはやてに対し二人は思い出したかのような反応を見せた。

「なあシャル、私ってそんなに存在感薄いんやろか……」

はやてに泣きつかれたシャルは励ますように頭を撫でるのであった。

それからたいした出勤や揉め事もなく二週間が経過したある日の

午前中、暁はシャーリーの所にいる。預けていた刀が戻ってくるのだ。

だが預けた本人は「そういえば預けたままだったな」といいはやてやシャーリーの呆れを買っていた。

「お待たせしました。はい、これです」

そういつてシャーリーから手渡されたのは青い指輪だ。

「一個？」

暁が預けたの刀は二振り。戻ってきたのは一個の指輪恐らくこれが待機状態なのだろうが何故一個なのだろうか。

「神崎さんは状況に応じてスタイルを変えるみたいなので二振りの刀をまとめました。フォームチェンジによって一刀や二刀に出来ます。1stフォームが一刀、2ndフォームで二刀ですね」

「へえ、なあデバイス化していいか？」

一応隣のはやてに許可をとる。

「ええよ」

許可が出たので意識を集中しデバイスモードにする。

「うし……んで2ndフォームってどうすんの？」

「ただ命じれば良いんよ」

はやての助言通りに刀―アネモネ―に言葉を発する。

「2ndフォーム」

言葉に反応するようにアネモネが光り、両の手に刀が納められた。

久々に手にした相棒により感激の声が上がる。

「スゲー、輝が見事に修復されてる」

輝が入っていた箇所をマジマジと見入る。

「その刀の刀身は特殊金属の様なので中々思つようにいきませんでした。ですが構成物質が近い金属が見付かったのでそれで代用しました、切れ味は少し落ちましたが強度は以前と変わりませんよ」

我ながら良い仕事しました。と付け加えた。

「サンキュー、助かるよ」

シャーリーに礼を述べアネモネも待機状態に戻す。

「所で暁さん、明日はどうするん？」

「ん？」

「フォワード陣は順調なら明日午後が訓練なしになんよ。んでフォワード陣には少しやけど休暇を与えようかと思つとってね」

「ああなるほどね。　そうだなあ街に繰り出そうとしても不案内だしエルムを連れて誰か誘うか。　これありがとな」

そういつてアネモネを待機状態に戻して暁は部屋を出た。

＊

「あれ？神崎さん」

午後になりフォワード陣のメンバーを捜していると隊舎の入口付近で私服姿のエリオとキャラ口と出会った。

キャラはフリルが付いた洋服に唾広の帽子、キャラ自身のカラーと同じピンク色で年相応な可愛らしい格好だ。

エリオも動きやすそうで活発なイメージをそのまま服にした格好だ。

「お？　二人してお出かけか？」

「はい、街まで行こうかと思ひまして」

「神崎さんも一緒に行きますか？」

向こうから誘いが来てついて行こうかと思つたがふとあることに気づいた。

「（二人で行くつて事は、デートだよ……）」

異性の二人が仲良く街へ繰り出すのでデートの線が濃いと見て、野暮な事はしない方が良くと結論し同行を辞退する。

「……いや、二人で行つてこいよ。 仲良くな」

「「はい!!」」

なんとまあ微笑ましい仲に暁は笑みを浮かべる。 エリオとキヤ口は暁に返事をして元気よく隊舎の玄関を出て行った。

「……ティアナ達に聞いてみるか」

残るはスバルとティアナに期待を抱きつつ二人を探すことにした。

*

結果から言うに暁とエルムはスターズの二人と共に街に繰り出していた。

「「お~~~~~!!」」

街に入ってからというもの二人は声をあげてばっかだ。

都会らしい町並みに人気が多く、大都市と言う方が的確な表現だ。暁の服はこの世界に来た時に着てた服を着ている。

「凄いはしゃぎっぷりね……」

「そうだね」

「……はあ」

そんな二人の行動に驚き半分呆れ半分で呟いたティアナの言葉に同意したスバルもテンションが上がっていてティアナはため息を吐いた。

二人で大騒ぎし、特徴ある服。これだけでも通行人から好奇の目で見られているというのもティアナがため息をつく一因なのだが。

「神崎さん、欲しいものはなんですか？」

「まずこの好奇の視線から逃れたいので暁の用事を済ませようと思う。」

「そうだな……とりあえず食材を買いたいな」

「食材？」

「ヴィータの奴からクッキーのリクエストが来たからな…毎度厨房から頂くつてのもあれだしな」

どうやら前回の作が評判良かったらしくまた作ってくれとせがまれたのだ。その話しに三人——特にスバルが食いかかった。

「え!!!またクッキー作るんですか!?!」

「暁ちゃんの手作りクッキー!？」

「私達も呼んでくださいよ!!」

口にした矢先暁はしまった…と思った。

「分かった、分かった! その時はお前達も呼ぶから!!」

あまりの剣幕に暁は一瞬恐怖を覚えた。

「あ、ティア。アイス食べようよ!!」

「アイス!? 食べたい食べたい!!」

暁の返答に満足がいった三人、その中のスバルが視界に入った移動販売車に目を奪われた。

スバルが誘ったのはティアナだったのだが何故かエルムがくいていた。

「じゃあ行こうよエルムちゃん」

「行こう行こう」

二人はそのアイスクリーム屋に向かった。

「はあ、せつかくの休暇時に悪いな。付き合ってくれて助かる」

「いえ、大丈夫です。あの、彼女も暁さんと同じ悪魔…なんで

すよね？　なんというかそうとは思えないんですが」

「そりゃあそうだろ。　魔界では俺と行動を共にしてたから人間くさくなるさ」

ソフトクリームを買いに行った二人を待ったために暁とティアナは近くにあったベンチに座る。

すると緊急通信が入り二人は回線を開く。

「こちら神崎、何があった？」

『神崎さん、エリオとキャロがレリックらしきボックスに繋がれた少女を保護したと連絡がありました。　座標を送りますのでティアナとスバルと共に現場に急行してください！！』

画面越しのなのはの表情は真剣な顔付きになり、仕事モードだった。

「了解だ。　ティアナ」

通信を切った暁は隣に座るティアナを見ると、ティアナも真剣な顔付きになり頷いた。

「スバル、すぐ向かうわよ！！」

「エルム、仕事だ！」

向こうに居る二人に聞こえるように声をあげると、二人はアイスを頬張りながら戻ってきた。

「ふおっふえー（オツケー）！！」

「ふおーふあい（了解）！」

「「はあ……」」

気の抜けた返事に暁とティアナはため息を吐いた。

第九話（後書き）

なんかだんだんとぐだぐだしてきた感が……。

第十話（前書き）

すいません。汗

長らくお待たせ致しました！
今回はいつもより長めですw

それでは第十話をお楽しみ下さい、

第十話

「素晴らしい、やはり素晴らしいよ彼は!!」

暗がりの部屋で高ぶる感情を抑えることが出来ず声をあげる男性、学者みたいな白衣を身に包む彼はフェイトが追う広域次元犯罪者として指名手配されているスカリエッティである。

「流石にかの伝説の魔剣士、スパイダと同等の力を秘めている事はある!!」

スカリエッティは先日のブリッツと暁の交戦の映像記録を見ていた。一体いつの間に、そしてどのようにして記録したのかは謎である。

「魔剣士、スパイダとは一体何者なんですか？」

出て来た固有名詞に女性——戦闘機人ナンバーズ・No.1『ウーノ』——が訪ねた。

「彼の世界に伝わる伝説の剣士だよ！ 人間の為に同胞の悪魔を裏切り、刃を向けた人間の英雄さ!!」

「悪魔と言うのは最近になって現れたアンノウンの総称ですか？」

「そうだ。しかしこの彼は悪魔でありながら悪魔らしからぬ存在。スパイダをも越えた異質の存在なのさ！」

どうやって調べたのかスカリエッティは並行世界であるはずの暁

の世界に伝わる伝説と暁の正体を知っているのだ。

「その上高度な工学知識を有しているというではないか！」

「工学知識？ まさかアルハザードのモノだとも？」

「いや、だが私が知っている中で一番アルハザードの技術に近い知識を持つ者だ。彼の作品は他の誰よりも素晴らしいのだ、ああ実に興味深い……」

「はあ……」

ウーノはスカリエッティの癖——発作と言う——が出たのでため息を吐いた。

*

「カンザキ アキラ？ それ誰っすか？」

とある部屋で何人かの女性が見られる。髪型、身長等がばらばらだが全員同じフィットスーツを身につけている。

その中では主人公である神崎 暁についての話になっていた。

「管理局にあのアンノウン関連で協力している者だそうだ」

右目に眼帯をしている——及びこの中で一番小さい——No.5のチンクが質問に応える。

「ふうん、どうせオッサンなだろ？」

No.9ノーヴェが管理局に協力する人物を想像し自身の頭の中で思い描くと厳つい筋肉質の男性ができた。

「いや年齢は二十歳前後だそうだ」

No.3のトーレが端末を操作し記録映像が流れる、それは暁がこの世界に來た直後の悪魔との戦闘映像だ。

「若っ！？ あ、でもなんかひよろっちい奴っすね。弱そうっす」

予想してたより若かったのでNo.11のウェンディが驚きの声をあげたがよくみると身体がやや細身なのを見て安堵した。

「弱そう？ 外見で判断するのは良くないぞ」

敵を見掛けで強弱を判断したウェンディをみてチンクが注意する。

「う、すまねっすチンク姉……」

チンクの指摘を受けウェンディは小さくなる。

「ドクターの話だと管理局の中でもトップクラス以上の実力持つ猛者だそうだ」

スカリエッティから暁の話を聞いていたトーレが他の皆に聞こえるように言った。その話を聞いたチンク以外のメンバーが驚いた。

「え！？　なんでそんな奴が居るっすか！？　そんなの聞いてないっす！！」

「奴はこの世界とは関係ない世界の住人なのだ、まあ次元漂流者だな。　どうやってこの世界に来たのかわからんがアンノウン関連で管理局に協力しているらしい」

映像は暁がルドラを使い、《スフィア・レイン》でヘルプライド達を一掃した場面だ。

「うへえ……　こんな大量のアンノウン相手を……。　反則っす！！」

「それだけの实力があるってことだ」

「奴が管理局に協力している以上奴との交戦は避けられない。いつになるかわからないが心しておけ」

トーレが締めると他のメンバーは頷いて応えた。

*

一方現場に着いたスターズと暁、エルムの四人は先に来ていたなのは達と合流した。

だがその時に六課では見掛けない人物がいて暁は首を傾げた。

その人物は『ギンガ・ナカジマ』。　スバルの姉であり、この近くで起きたトレーラーの横転事故の検証の為に来ていたという。

検証していくうちに子供がはいるサイズの生体ポットを発見し、何かを引きずった跡が残っていたため保護した少女が人造魔導師であることが推測される。

よってスカリエッティの仕業である可能性があるため今回六課の指揮下にはいるとのこと。

「貴方、が民間協力者の神崎さん？ 私はギンガ・ナカジマ、スバルの姉です」

「神崎 暁だ、宜しく。そしてコイツが」

「エルムです、暁ちゃんのパートナーしてます」

三人は自己紹介していた。

「しかしスバルの姉か……」

スバルの姉と聞いて暁は驚いた。

「それが、どうかしたんですか？」

ギンガは暁に問い掛けるが暁は「んゝ……」とギンガとスバルを交互に見る。

「いや……ぱつと見では似ても似つかないな。まるで真逆だな」

「……あの子は活発ですからね」

ギンガは『この人も振り回されたんだ…』と思い心中で同情した。

「高町い、これからどうするんだ、ずっとこのままってのも無し
だろ？」

後ろを向き保護したと言う少女を気にしているなのはに指示を仰ぐ。

「そうですね。じゃあこの娘はこのままへりで搬送するからフ
ォワード陣は現場調査、おねがいね？」

「……はい……」

なのはの指示に従い四人は地下水路の調査へと向かった。

「よし、エルム。お前はあいつらのフォローだ俺はへりの護衛
につく」

「え……！？」

上司の指示にフォワード陣は勢いよく了解をしたのだが、一方の
エルムは不満の声をあげた。

「『え……』ってなんだ」

「だって久々に暁ちゃんに会えたのに離れるのは嫌あ」

まさか不満の声をあげるとは思わなかった暁。エルムは見上げ
るようにして頬を膨らまし抗議した。

「万が一ヘリが襲撃されても飛行可能な俺の方が迎撃に出れるだろっ」

「それはわかるけどぉー!!」

ため息を吐き暁は最終手段に打って出た。

「……………よし、ミルフィーユで手を打とう」

「私にまつかせなさい!!!!!!」

「ええええッ!?!」

スウィーツを交換条件にしたらあんなに渋ってたエルムが即受け入れたのだ。これには周りの人物は声を出さずにはいられない。

「暁ちゃんのミルフィーユっ」

あの渋りは何処へやら…エルムは上機嫌でフォワード陣の後を追った。

「ふ、ちよろい……」

エルムの性格を熟知している分どうすれば良いのか扱いがわかってるので暁はしてやったりな笑みを浮かべた。

するとロングアーチから通信が入り回線を開く。

『こちらロングアーチ!! 地下水路、及び海上方面からガジェット反応!! 直ちに迎撃をお願いします!!』

シャーリーは周辺探査をしていた時にガジェットの大群をキャッチしたといった。

『ヴィータがそっちに向かってるから合流次第ラインとペアで南西方向から、なのはちゃんとフェイトちゃんが北西方向から制圧！』

続いてはやてがモニターに現れ、出撃命令を下した。

「了解！了解！了解！」

『へりは暁さん、護衛お願いします！！　ギンガは新人のサポートやー！！』

「了解しましたー！！」

はやての指示に従いエルム同様にフォワード陣の後を追った。

「オーライ、……………といきたい所だが割り込み客が来たようだ」

暁は違和感を感じ、待機状態のアネモネをデバイス化する。

『八神隊長！！　アンノウンの出現を感知しましたー！！』

『なんやて！？』

モニターの向こうで驚愕の声が聞こえた。　予想外のアンノウンの出現にロングアーチに緊張が走る。

暁が上空を睨み付ける先の空間が割れ、その亀裂から悪魔が出て来た。

それは全身黒一色だが屈強と見た目でわかる体躯。

見た目の凶暴さから上級悪魔だろう。

「あれは記録にあったアンノウン!?」

「確か暁さんの説明ではベオウルフだったと…!」

以前アンノウン説明時に見た悪魔、ベオウルフ。あの時感じた恐怖が蘇りなのはとフェイトは身体を一瞬震わせた。

「匂う…匂うぞ…。これは裏切り者の匂い!! アムカディムウー!!」

「ベオウルフかよ…めんどくさい奴が出て来たな」

あからさまな嫌な表情を出す暁。

「同胞の敵!! 裏切り者に死をおお!!」

「下がれ!!」

咆哮と共にベオウルフの剛腕が暁に向かって振り下ろされる。暁の言葉にハツとなった二人は上空へと飛んだ。

「相変わらず馬鹿力だな!! ったく!!」

難無く避けると暁が居た場所にベオウルフの腕が轟音と共に地面に減り込んだ。

「暁さん、裏切り者ってなんですか！？ それに『アムカデウム』って」

「…人間に味方した悪魔だから裏切り者、んで魔界での俺の名前がアムカデウムってただけだ！！ コイツの相手は俺がする、お前等は海上のガジェットに向かえ！！」

フェイトからの質問に返すとアネモネを振るい衝撃波を放つ。

狙いは減り込んだ腕。 しかし命中するも微々たるダメージも与えた手応えがない。

「でも暁さん一人じゃ「今のお前らは邪魔だから言ってるんだ！！」！？」

赤く光る眼で睨まれ、その威圧感で身が竦み上がり恐怖を感じた。

「ツち…。 良いから行けよお前ら！！ ハリセン出すぞ！！」

「ふえ、フェイトちゃん行こう！！」

暁の禁断兵器の単語をだされたのはは必死にフェイトを促す。

「う、うん！？」

その友人の必死な形相にフェイトはある意味あの悪魔より怖いと思った。

「…………まさかお前が並行世界——こんな所——に居るとはな。その執念深さには感服するぞ」

二人が行ったのを確認して暁はベオウルフに話し掛ける。

「憎くきスパード同様、貴様は同胞を裏切ったのだ！！ 貴様らに死を与えるまで我は追い続ける！！」

「スパードの息子に眼を潰されたのに執行者気取り御苦労なこつた！！」

地を蹴り、ベオウルフとの間合いを詰める。

「これ以上はこちとら迷惑なんでな、ここいらで退場させてもらうぞ——」

魔力を纏わせたアネモネを振るい、斬撃を与える。

「ヌグッ……オオオオオ！！」

ブシュッと斬られた足から鮮血が吹き出す。

苦痛に声をあげるが次の瞬間咆哮を放ち、剛腕を振るい反撃に出る。

「グウ……！！」

アネモネで受け止めるが衝撃までは防ぎ切れずしかも体格差がある故、暁は建物に飛ばされてしまった。

「そんな物か、アムカディム！！ 貴様の力は！！」

「——この力……ベオウルフ、貴様まさか」

一撃を貰い、暁はある懸念が生じた。

「気付いたか、一度はスパイダの血族にやられた身…だがムンドウス様が力を与えて下さり蘇ったのだ！！ 裏切り者共に死を与えるためになア！！」

「やはりムンドウスの仕業か……退場なんて生温い事言わずに消えてもらうしかないな」

「人間の姿に成り果てた貴様に果たして出来るかな？」

「人間が弱いだなんて思ってたんじゃないよ。人間は思いがあるから強くなれるんだよ、人間を、舐めてんじゃないやねえッ！！」

眼光を鋭くし、暁の身体から魔力の靄を立ち上らせる。

「2ndフォーム！！」

アネモネに命令すると光を放ち、二振りになる。

「It is the opening of the show time！！（さあ、ショータイムの始まりだ！！）」

左手に持つアネモネの切っ先をベオウルフに向け幕開けを宣言し

た。

*

「「!？」」

暁とベオウルフが対峙しているころ街から少し離れた草原で銀髪の男性と青年がある力を感じた。

ダンテとネロの二人は暁の放つ力を感じたのだ。

「おい、ダンテ!!」

「ああ、アキラだ。感じからして近いが嫌な匂いもする…、あの野郎こんな所にまで来たのか」

ネロはダンテに急ぐよう促すがダンテは昔戦った悪魔の匂いがしたので顔を顰めた。何年前か、テメンニグルという魔界と人間界を繋げるトンネル…塔で出会ったあの悪魔。

「この歳になってもまた親父の尻拭いかよ…。　　まったく勘弁願いたいね」

「…なんの話だよ？」

「…いいやこっちの話だ。　　急ぐぞ」

話を切り上げ、二人は地を駆け出した。

＊

「暁ちゃん…?」

地下水路でフォワード陣と合流したエルムも暁が放った力を感じ取った。

「エルムちゃん? どうかしたの?」

急に立ち止まったエルムを不思議がり声をかける。

すると水路全体に振動が起こった。

「じ、地震!?」

「いえ、魔力反応が上からあります。 神崎さんのかと!」

スバルが突然の揺れに驚くがキャロは反応からの推測し応える。

「……………質の悪い悪魔が現れたようね、あなた達は気にしないでいいわよ、このまま調査を続けましょ」

「え? なんで…?」

「私達は地下水路の調査に来てるの、それを放棄するの?」

「それは…」

エルムの正論にスバルは言い淀む。

「心配しなくても曉ちゃんがやられるような事はないわ、私達は私達のやるべき事を全うしましょ？」

表情をやわらしくし、自らの役割に集中するようにと促す。

「随分と神崎さんの事を分かってるようだけどどどういう関係なの？ あとパートナーとも言ってたけど？」

後ろにいるギンガが訪ねる。

「私達は元々悪魔で魔界では共に行動していたの——スバル、ティアナ伏せて！！」

「「！？」」

ギンガの質問に答えるが、前方に現れた気配にエルムは声を張り上げる。

エルムは赤い魔力の玉を複数放ち、伏せた二人の頭上を通り気配の主へと襲う。

放った魔力玉は前方に飛び、なにもない所で弾けた。

「何なのコイツ！！」

姿を表した異形にティアナは敵意を向ける。

「エルムちゃん、コイツも悪魔!？」

「いえ、この気配……悪魔じゃないわ」

スバルが臨戦体制に移りながらエルムに聞くがエルムはそれを否定する。

「どっちかと言ったら仮面ライダーっばいわね」

しかし、別な方向へと連想する。暁といいマニアックな連想をするな。

「仮面ライダー？」

ピンとこないエリオが疑問符を浮かべる。

「私たちの世界で放送している特撮番組よ」

「へえ…面白そう!！」

エルムの説明を受け、仮面ライダーなる番組に興味を示したエリオだった。

「確か地球でそんなのやってたわね」

そこに思わぬ援護が。

「ギン姉…?」

「ほら、最近地球の物がミッドチルダで流行ってるじゃない？」

それで一部、ミッドチルダで放送している番組にも地球のが入っているよ。確かその内の一つじゃない？」

「そうなんですか!？」

ミッドチルダでも放送しているというのを聞いて、エリオは聞き返した。

そこまで興味を持つなんてやはり生まれはどうあれ男の子なんだなと思う瞬間だ。

「……なんか頭いたくなってきた」

あまりの緊張感の無さに思わず片手で頭を押さえ愚痴を零す。

「えっと……ファイトです?」

「なんで疑問形？」

「……………」

そんなメンバーを見ながら異形の者は冷や汗をかいていた。

「……………ガリュー行こう」

暗闇からもう一人、小さな人影が現れ異形―ガリューに言葉を放つ。

ガリューは少女の言葉を受け、地を蹴った。

「！？」

「へえ、意外に速いのね」

しかし目の前に現れたエルムによって動きを止められ、エルムとの間合いを取った。

「え！？ いつの間に！？」

スバルは先程まで背後に居たエルムの位置から今のエルムの位置を交互に見た。

距離にして5M程だが自分の目でも捉えきれなかった速度に驚愕した。

「けど人が話してる時に襲うなんて――」

右拳を引き、左手を前にだし腰を据える。

その右の拳から腕にかけて魔法陣が幾つか回転していた。

「感心しないわね……」

「！？ ガリユー、避けて――！」

エルムの異変に気付いた少女がガリユーに警告を放つ。しかし同時にエルムの攻撃が放たれようとしていた。

「《裂衝撃》」

エルムの口から放たれた言葉に本能故か敵意に危険を感じたガリユーは横へ飛ぶ。

「消えた!？」

「!？」

エリオが驚愕の声をあげると同時に地下水路を揺るがす程の振動が襲った。

「私の間合いに入ったら逃げられないわ」

「ガリユー!？」

地下水路の壁にエルムがガリユーを押し込む形で二人は姿を表した。ガリユーの腹部外殻の一部が割れ、輝が腹部全体に広がっていた。

「安心なさい、手加減はしたから命に心配はないわ」

エルムがガリユーから離れると膝を降り、崩れ落ちる。

「ガリユー!！」

悲痛な声をあげながら駆け寄る少女。

「そのこ、貴方を護りたいって気持ちが強いのね。 どういった事情があるのかはわからないけどこの場は退きなさい」

「……行こうガリユー」

そういつて少女はエルムに一睨みするとガリューと共にその場から消えた。

「さ、調査を続けましょ」

エルムに纏う空気が穏やかになり、笑顔を向ける。

「さっすが元悪魔、ちびっ子とはいえアンノウンを圧倒するなんて」

その実力を垣間見えたティアナはエルムの力に呆れていた。

「悪魔と言えども力はピンからキリまでよ。私は元々上級悪魔だからだけど、暁ちゃんは悪魔でも異質だからね」

当然！！と言わんばかりの無い胸を張り、自慢げに話す。

「神崎さんが悪魔？」

事情を知らないギンガが訝しげに呟く。

「まあ、あなたは六課では見たこと無いし知らないのは無理ないでしょう……さっき途中まで言っただけと私と暁ちゃんは悪魔で、暁ちゃんが特別、異質な存在だからね。さ、調査を続けましょ？」

強制的に話しを終わらせ、皆を促した。

「（まさかアイツがこの並行世界に手を出して来るとはね……）」

先程感じた暁の力と共に敵対すべき悪魔の力にエルムは拳に力が入った。

*

「——うらあッ!!」

右に持っていたアネモネを投げ、ブーメランの様な回転、軌道を描きベオウルフに向かう。

そして投げた直後、暁は地面を蹴り間合いを詰める。

「甘いわ!!」

ベオウルフは向かってきたアネモネを弾く。

「1st!!」

弾き飛ばされたアネモネは粒子になり1stモード、一刀モードの一振りが暁の手元にあるのみだ。

「2nd!!」

そして再び二刀モードに戻る。デバイス化したことにより刀を投擲、その後の回収が省略され戦闘の幅が広がったのだ。

二刀モードにした後、跳躍し目線がベオウルフ同じ高さになる。

「フハアアッ！！」

目の前に来た相手を叩き潰すかのように上から下へと拳を振り下ろす。

「《エアリアル》！！」

しかし暁は《エアリアル》をだし、それを足場に拳を避けると背後に回り羽根らしき突起を斬る。

「グオオオオオッ！！」

「け、ムンドウスに力を貰いながらその程度かベオウルフ！」

斬られた部分から赤い飛沫が噴き出す。暁は苦痛の声を挙げるベオウルフに対し挑発するように剣先を向ける。

「貴様、昔のアムカデームではないな……！」

「はっ、昔のままだと思ったのか？ そいつはご愁傷様だ。人間になつてからも悪魔共と戦つて来たからな、お陰でこちとら力をつけさせて貰つたよ」

「貴様、更に同胞を手に掛けたな！！」

「人間界侵攻なんてめんどくさい事してるからだ。ムンドウスもいい加減諦めろつての……」

暁は腰に手を当てやれやれと首を振った。

「ま、そんな訳だ。貴様も四の五の言っでないで消えろ」

「ふざけるなァッ！！ 己が同胞の怨み……貴様の死を持って晴らしてくれる！！」

ベオウルフが咆哮と共に一際まばゆい光を放つと背中突起が伸び、羽根を形成した。

「さっすが自称光を司る悪魔。昼間なのに良く光る良く光る」

アネモネを待機状態にして暁は体術の構えを取る。

「そんじゃ、メイスイベントでも始めるとしようかベオウルフ！！」

ダンツと震脚を起こし、更に靄を立ち上らせる。その立ち上らせた靄は暁の両腕に集中させ纏わり付ける。

「又ウァァッ！！！！」

ベオウルフは背部の羽根で己の巨体を浮かし、拳を引きながら暁に突っ込んだ。

「図体がでかい割に、速えなあおい！！」

対する暁は左半身を前に出し、腰を落とし体勢を安定させて身構える。

ベオウルフが振るう拳が暁を襲うが暁は靄を纏わり付かせた左腕を前に出し受け止める。

しかし体格差、速度も相俟って地面に跡を残しながら押されて行く。

「ウラアアッ!!」

「ヌ!？」

途中でベオウルフの拳を払いのけ、反撃とばかりに腹部に一撃をいれるべく右手に力を込める。よく見るとその右手に纏わり付いている靄が微かに赤く光っていた。

「ハアアアッ!!」

「グオッ!？」

力の乗った見事なストレートがベオウルフの腹部に減り込んだ。

「《バースト》!!」

そう叫ぶと指向性の爆発を起こしベオウルフは後方へと飛ばす。

次に暁は左手を突き出すと、靄がベオウルフに向かいまるで手の様に掴む。

「まだまだ行くぞ!!」

靄を使って急接近しベオウルフと肉薄する。

「オラオラオラオラオラオラッ!!」

双方未だ宙に浮いている状態で暁は凄まじい速さのラッシュを叩き込む。

「フンアアア!!」

「ぐがッ!」

ラッシュ中、ベオウルフが身を振らせ暁を真横方面に蹴り飛ばし、横の廃ビルに轟音と共に突っ込んだ。脇腹辺りが嫌な音が聞こえたので肋骨が何本か折れたのだろう。

しかし悪魔であるが故にその治癒に掛かる時間は僅かだ。

「ちい、肋がいったか……」

廃ビルから出た暁はやられた箇所を触りながら込み上げてきた血を吐き捨てた。

「ヌオオオオ!!」

「グハッ!」

ベオウルフは咆哮しながら暁に接近し、その速度のまま体当たりし暁と共に廃ビルへと姿を消した。

「ウゼエ!!」

しかし次の瞬間、暁が再度指向性の爆発を起こしベオウルフを弾き出す。

続いて出て来た暁は上着がボロボロになり左の袖が肘から無くなっていた。

「くそ、お気に入り台なしだ」

暁は上着のボタンを外し脱ぎ捨てる。

『神崎さん、大変です！？』

暁の横にウィンドウが現れ、ロングアーチのアルトが切羽詰まった表情で映し出された。

「どうした？」

その様子からただ事ならぬ気配を察し、先を促す。

『市街地よりオーバーSランクの魔力反応、標準がヘリに向けられています！！』

ヘリが狙われていると聞き、暁は悪態をつく。

「ちい、ベオウルフの馬鹿野郎が邪魔で防衛に向かえない。他の奴らは！？」

『八神部隊長及びフェイト隊長、高町隊長は敵部隊の殲滅に当たっていて間に合いません！！ 同様にフォワード陣も敵対勢力とおぼしき人物と交戦し間に合いません！！』

暁は目視出来る分自分が行けば防衛出来ると思った。 しかし予

想外にもベオウルフが強く、このまま防衛に向かえばヘリにも危害が及ぶため行くに行けない状況だ。

「オオオオオオ！！！！」

弾き飛ばしたベオウルフが咆哮をあげ乗っかっていた瓦礫を吹き飛ばした。

「くそ、何とかならねえのか！！」

「ヘイ！！　なにやら面白い事になっているなアキラ！！」

「は？」

焦りから不意に出た言葉だが、突如として覚えのある声と気配、魔力を感じ取った。

「なんだよアキラ、ボロボロじゃねえかよ」

それも一人じゃない、二人の…だ。

一人は真紅のロングレザーコートを羽織り、無骨な大剣を担ぎ曉の前に降り立った。

そしてもう一人は紺のコートを着て機械仕掛けの片刃の大剣を手に持ち背後から現れた。

「お前ら…なんでここに！？」

真紅のコートを着たのはダンテ、そして紺のコートを着たのがネロ。二人の突然の登場に暁は心底驚いた。

「お前に来た依頼が俺の方にも来たんだよ。　そこで坊やと一緒にやってたら気が付いたら此処に居たって訳だ。　コイツの相手は俺がやるからお前は急げ、遠くでヤバイ気配がするからな」

「匂う…匂うぞ！！　これは憎きスパードの血族の匂い、我が身に受けた屈辱を晴らす！！！」

「悪いダンテ、ネロ。　詳しくは後で聞く此処は任せた！！」

暁は二人にこの場を任せると魔力のフレアで羽根を形成しヘリへと向かった。

「さあて、任されたからにはやらないとな。　準備は良いか、坊や」

「は、上等…！」

ダンテはネロに確認すると不敵な笑みを浮かべながら応えた。その言葉に満足すると自身も笑みを浮かべる。

「オーケー、なら始めるか」

二人はそれぞれの獲物を構え持つ手に力を入れる。

「Let's rock！！」

掛け声と共に二人は地を蹴りベオウルフに向かっていった。

第十一話

「オーバーSランクの攻撃、ヘリに標準がロックされました!!」

「ヴァイス、もっと速度は上げられないのか!？」

『いまやっていますがこれ以上速度をあげると機体が持ちません!』

ロングアーチで慌ただしく声が飛び交う。

『誰か間に合わへんの!?!』

ウィンドウ越しのはやても危機感からか声に険が籠る。

「一番近いのは神崎さんです!! ですがベオウルフと交戦中!」

シャーリーがはやてに応えようとアルトが割り込みを入れた。

「八神部隊長、神崎さんとベオウルフの交戦地点に新たな生体反応を2確認!! これは、人!？」

『人やて!?!』

「神崎が交戦地点から離れヘリに向かっています!!」

『なんやて!?! どういう事や!?!』

変わる変わる状況にはやては声を荒げる。

「ベオウルフと新たに現れた人物が交戦に入りました!!」

「……味方、なんか？」

新たに現れた人物、それが何者かはわからないがなにはともあれベオウルフと戦っているというのなら味方の様だ。一先ずヘリの防衛が優先だ。この戦闘が終わったら暁に聞こう。そう区切りをつけた。

*

「クラウド・ソラス!!」

魔力のフレアで出来た羽根を飛ばたかせへリに向かう暁。途中でクラウド・ソラスを起動し自らも悪魔化する。

「クラウド・ソラス、砲撃モード!! 高魔力砲を相殺する!!」

【了解、チャージ開始】

大剣のクラウド・ソラスが光に包まれ形状変化し先端が二股に分かれた槍になった。

暁から魔力が送られクラウド・ソラスが赤く淡く光だした。

「《時空にして漆黒が命じる。我より後方の空間を隔絶しろ》」

高魔力砲の射線上に止まり、暁が言玉を咥くと暁の後方の景色が霞んだ。

「（これでヘリへの被害は心配ない。後は、魔力砲の相殺か）」

暁は魔力反応のある地点を見つめる。すると光を放っている場所を見つけ更に目を懲らす。

「……女？」

獲物を構えている人物をよく見るとボディスーツを着ていたために身体のラインがわかる。その形から女性と思った。

【チャージ完了】

クラウド・ソラスからの音声を聞き大きく呼吸し、暁は腹を括った。

「よし、クラウド・ソラス。砲撃準備、《ダークネス・ブレイカー》を放つ」

【プラストモード移行。《ダークネス・ブレイカー》発射準備】

クラウド・ソラスが応えると暁はエアリアルを出してその魔法陣の上に立つ。

【魔力チャージ完了】

完了の音声がでると、目の前に新たな暁と同じ大きさの魔法陣が現れた。外側の円が右周り、内側の円が左周りと別々の回転をし

ていた。

【射線上前方より高魔力砲接近】

クラウド・ソラスの言う通り女性らしき人物が居た場所から高魔力砲が発射されこちらを飲み込まんと向かって来ている。

「さあて、受けてたとうじゃないか——」

槍状のクラウド・ソラスをヒュンヒュンと風を切る様に回し迫り来る高魔力砲を見つめながら暁は不敵な笑みを浮かべた。

「——行くぞ」

【了解】

回転を止めクラウド・ソラスの切っ先を目の前の魔法陣に向けると回転が止まり、黒い靄が溢れ出す。

「【《ダークネス・ブレイカー》！！】」

腰を落とし、構え、言葉による引き金を引く。

魔法陣からは膨大な魔力を孕んだ漆黒の奔流が現れ、眼前にまで迫った高魔力砲とぶつかる。

高魔力同士がぶつかり合った影響で爆発、衝撃波が広範囲に拡がり近くにあったビルの一部が壊れ辺りは煙に包まれた。

＊

「神崎さんは！？　へりはどうなった！？」

その時の状況をモニターで見ていたロンググーチ内、グリフィスがシャーリーに結果を催促する。

「待つて下さい、爆発の影響で電波が悪く……！！」

シャーリーが目まぐるしくコンソールを叩く。

「！？　来ました！！　へりの生存を確認、神崎さんも無事です！！」

生存報告を聞いた途端ロンググーチ内に歓喜の叫びが響いた。

＊

「《サーキット》！！　クラウド・ソラス、ソードモード移行！！
対象人物に接近する！！」

【了解】

肉体強化をした暁は羽根を羽ばたかせ高速で前方にいる人物のもとへと向かう。

*

「スパードの血族、アムカディム共々我が手で絶やしてくれる！
！」

一方、暁に代わってベオウルフと対峙したダンテとネロ。

「おい、いい加減にしろよ！！　しつこい奴は嫌われるって相場が決まってるんだ！！」

ダンテが無骨な大剣―リベリオン―を右手に持ちながら地を駆ける。

「アムカディム……確かアキラの悪魔名だよな」

聞き覚えのある名前を聞き、ネロも獲物―レッドクイーン―を左手に持ちながら聞くが、生憎ダンテは先に行ってしまう答えは返って来なかった。

その事に対しネロは「ちッ」と舌打ちをした。

「人の話しは聞けよ」

そう言ってネロも地を駆ける。

「眼を潰されたぐらいじゃ物足りないようだな！！　今度はお前自体を潰してやるぜ」

「小癪な！！　昔のようにはいかんぞ！！」

「ああそうかい」

ネロは左腕の袖をめくると上下二連の六連装のリボルバーブル
ーローズーが握られていた異形の腕が現れた。手の甲や腕の外側
は外殻らしき甲殻で被われているが内側や指、手の平、外殻の亀裂
から水色の光が漏れていた。それに伴うようにブルーローズも光
を放っていた。

「喰らいな!!」

魔力を込めた一撃がベオウルフに向かう。

「ヌグッ!!」

その一撃は右肩辺りに当たり、時間差で爆発を起こした。

「ダンテ!!」

「言われなくてもわかってるよ」

リベリオンを構えたダンテが跳躍、体勢を崩したベオウルフに向
かって斬撃を繰り返す。

「セアアアッ!!」

一閃。見事な光の軌跡を残しながらダンテはベオウルフの腹部
を斬り裂いた。

「■■■■■■■■■■!!」

声にもならぬ悲鳴と盛大に噴き出す赤い飛沫を撒き散らしながら
ベオウルフは上半身と下半身との別れをした。

その図体が地面に落ちた時地響きを起こした。

「……意外に呆気なかったな」

「ああ、アキラとの戦闘で手負いだっただけだから」

若干の物足りなさを感じたネロが呟くように言っているとダンテが応え
た。その時凄まじい爆音と衝撃波が二人を襲った。

「!？」

「おーおー、アキラの奴派手にやってるなあ」

煙に飲まれながらもダンテにはお構い無しだ。

「——おいダンテ、あれがアキラのデビルトリガーか？ どう見
ても悪魔には見えない」

一陣の風が吹き、煙が晴れるとあらわになった暁の姿を見たネロ
が訝しんだ。

「そっぴや坊やは初めて見るな。 あいつは元々人間に一番近か
った悪魔らしいからな、俺も初めて見た時は同じ感想だったさ」

「なんだよ、その『らしい』ってのは」

「子供の頃に親父から聞かされてたんだよ、『魔界には私と同じ志がある悪魔が居る、人間よりも人間らしい悪魔がな』ってな」

「ダンテの親父？ スパーダかよ…… っておい待てよ！？ なんとスパーダがアキラの事知ってたんだよ、スパーダの伝説は2000年前だ、どう見てもアキラの年齢は俺とそう変わらないはずだ」

「それは本人に聞けよ、俺が本人の了承無しに喋る訳にはいかな
いからな」

「うわっダンテ！？」

「ん？」

後方から驚いたような声を上げ、名を呼ばれたのでダンテは振り向き声の主を見た。 下水道から出て来たエルムが驚いていてその後ろにフォワード陣とギンガが居た。

「へい、嬢ちゃん！！ 嬢ちゃんも居たのか！？」

「それはこちらの台詞よ！？ あなたどうやってこの並行世界に来たのよ！？」

「んなもん知るか、気が付いたら居たんだよ」

「ん？ 後ろの人は初めて見るわね…… ダンテと魔力が似ている？
もしかして暁ちゃんが言ってたネロ？」

「アキラちゃん？」

一年近く前に暁から要塞都市での話を聞かされた事があった、
その中でスパイダの血筋の人物に会ったと話していた。そのスパ
イダの血筋、という情報材料から彼がネロだと思った。

「嬢ちゃんも元々悪魔で暁と共に魔界で行動してたんだとよ」

「こんな小さな子供も悪魔？」

「悪魔と言えどもいろいろ居るって事さ」

「エルムちゃん、こちらの方々は？」

ギンガがエルムに質問するとエルムはどう説明すれば良いのかと
迷う。

「ええと…」「こちら神崎、ヘリを狙った人物に接触。しかし敵増
援の介入により逃走、追跡を頼む」

回線が開き、モニターから悪魔化した暁の姿が映し出された。

その姿を見たフォワード陣とギンガが眼を見開いた。

『え！？ 暁さん！？ なんなんその姿！！』

『え？ あ！！ やべ、このままだった！！』

暁は悪魔化した状態の姿で通信回線を開いたが故、その姿を知ら
ない者が見たら自分が暁だと名乗っていても『誰？』になるのは至
極当然である。

そんな皆を代表したはやてが通信越しに驚いたので暁も自らの姿に気付いた。

『とりあえずそっちに合流する』

暁が通信を切ると、はやてが広域攻撃魔法を使用、同時にその範囲内に暁が居ることを失念していた……。

「……ねえティア、あのあたりって」

「間違いなく神崎さんが居るエリアね……」

爆音が止んだ後通信から――

『はやてえ！？ テメエ俺が居るのを忘れてんじゃねええ！！』

『か、堪忍やああ！！』

『お前も『ハリセン』の餌食になりたいようだな！？ 今すぐ来い！！ 来ないならこっちから行く！！』

『いややあああッ！！！？？』

という二人のやり取りが六課のメンバーに音声付きで映し出されていた。

第十二話

六課の宿舎に戻った一同、そこで主要メンバーが会議室に集まっていた。

しかし視線の先はダンテやネロに向けられていた。

なんだかと言うと、その外見故だ。

整った顔立ち汚れの知らぬ白のような銀髪。 なにもかも貫くような眼光をしている。

ネロは普通に座っているがその横に座るダンテの態度もそうだろう。

「んで？　なんでダンテとネロはこの並行世界にこれてるんだ？」

「さあな、俺にもさっぱりだ」

そういつて机に足を乗せながら天井を見上げた。

「俺とダンテである機械を撃ち抜いたら、気が付いたらこの世界に居たんだよ」

ダンテの代わりにネロが説明する。　すると暁は「ほう…」と意味深な相槌をうつ。

「おい、坊や」

「その話を詳しく頼む」

何故かダンテがネロを止めようとするが暁は構わず話を促す。

*

「なんだこれ？」

二人がこの世界にやって来る前、暁が消息を絶ったという遺跡内を探索していた。

悪魔の出現が確認出来たが暁がやられたとは思えないほど下級悪魔しかいなかったのだ。

探索を続けたある時、広間に出た。機械だらけのこの部屋は遺跡の作りからは有り得ないほど高度な技術が使われていた。しかし機械にはあまり知識がないこの二人が眼にしたのは。

『テヤンデー』

まあるい機械。加えて言うなら眼が『—』なっていて言葉を放つなり赤く点滅していた。

「俺が知るか」

『ミトメタクナイ！！ ミトメタクナイ！！』

「とりあえず無視だ、他を当たるぞ」

丸い物体を見なかった事にして踵を返すと。

ズドンッ――

「……………」

入口が何処から降ってきたのか肉体美とタイトル付けしたほうが適切なポディビルダーの像で遮られてしまった。

『ミトメタクナイ！ミトメタクナイ！ミトメタクナイ！！テヤンデー！！！！』

徐々に音声が高くなって来る丸い物体に二人は怒りを覚えた。

「チ」

舌打ちしたのはネロ、ダンテはエボニーとアイボリーを抜き、ネロもブルーローズを手にした。

「……ブツ壊す！！！！！！」

声も揃え、二人は丸い物体に撃ち放った。

ガキーン――

しかし光るなにかに遮られ、弾丸が丸い物体に届くことはなかった。

『ザマーニロ……』

プツン――

何かが切れる音……。

「上等だデメエ!!」

「俺達をなめんなよ!!」

二人は悪魔の力を解放する。

ダンテは赤い悪魔と称する方がしっくり来る姿をしていて、ネロは背後に悪魔が上半身現れた。

「――ってちょっと待てエエツ!!」

ズバズバンツ! プシユ~~~~

空気を切り裂く音と心地よい音、該当部位から煙が出る音が部屋に響く、更にその音の結果を表す床に頭から伏す影二人。

ネロが未だ説明しているにもかかわらず暁は中断させ、しかもハリセンで二人を叩き伏せる。

「なかなか痛いぞアキラ」

「いきなり何しやがる!!」

「うわっ!? 復活速ツ!!」

叩き伏せられた直後に起き上がり抗議する二人、その復活速度に餌食になった人物が驚きの声を上げた。

はやてだ。頭に包帯を巻き、頬に絆創膏を貼っていていかにも重傷そうだがこれが前回の暁による仕打ちということは誰も触れない。

シグナムが止めに入ったのだが未だ悪魔状態の暁で獲物が『超危険ハリセン・仏陀切』だ、その威力を知っているので強く入れないでいたがはやてがシグナムの背後に隠れた為そのシグナムごと叩き落と（撃墜）したのだ。　　憐れ、シグナム。

そのシグナムは未だ医務室にてシャマルの治療を受けていた。

「なにするじゃねえよネロ！？　お前ら八口相手になにデビルトリガー使ってたんだよ！！」

話を聞く限りだとその物体はガンダムのマスコットの存在、『八口』だろう。

なんで暁が八口の事を知っているやら……。　　いや、そもそも何故遺跡に八口が居るのか気になる。

「お前ら何したか覚えてんのか！？　ネロは橋の装置の操作がわかんないからって銃で撃ち抜くわ、ダンテはミュージックボックスぶち壊すわ、スパイダの機械音痴受け継いでんなよ！？！？！？」

仁王立ちしたままくし立てる。　　その手にはいまだハリセンが握られたまま。

「あれ？　確かスパイダって」

「確か神崎さんの世界の伝説の魔剣士の名前」

フェイトとなのはがスパイダという単語に気が付いた。

「ああこの二人、スパイダの子孫だ。特にダンテに関しては実の息子だ」

「ええ！？　だってあの話しじゃ2000年前って！？」

「悪魔に剣を向けたのが2000年前ってだけだ」

「じゃあ、ダンテさんのお父さんは……」

「2000歳以上！？」

まあ単純計算ならそうなるだろう。

「悪魔ってのは基本的に超長寿なんだよ」

無論、俺もな。と付け足した。

そこでネロが先ほど疑問に思った事を聞いてみた。

「なあアキラ、スパイダはアンタの事を知っているような口ぶりをダンテから聞いたがそれは一体なんなんだ。それにアンタは何年生きてんだよ」

悪魔は超長寿と言い、自身もそうだと放ったのだ。ネロの疑問も当たり前と言える。しかもその疑問には一同頷く。

「……まあいつか」

「なんか今更って気もするよね…」

「基本、ここの奴らはお人よし軍団だからな」

追求もしない上に本人から話すまで待つという考えを持つはやてを始めとし機動六課の大半は人がいい、良すぎるほどお人よしなのだ。

だから、最初暁は一抹の訝しさを向けたがそれは本心からだとかると苦笑いしかでなかったのだ。

「まあ、ヴィータはあの姿見た事あるから驚きはしなかっただろう?。」

いきなりヴィータの名前が出て来たので一同視線をヴィータに向ける。前回、悪魔化した姿で通信を開いたのでその姿は六課のほぼ全員が驚愕した。しかしヴィータだけは眼を見開いただけの反応だった。

「ヴィータちゃん、どういう事?」

「以前俺がいきなりどっか行っちゃったって時だ。その時の相手がブリッツでちょうど交戦中にヴィータが現場に来たんだよ。俺が頼んで黙っててもらったんだ」

なのはの問いに俯いてるヴィータに代わり説明する。

黙ってたダンテもこの話しに加わった。いきなり自分の話しに切り替わったので暁は眉を顰めた。

「んで？ 結局分かり合えたのか？」

ティアナとなのはは暁に説明をした。

「管理局のなんだかんだ言ってもお前ら未成年なんだからな、お互いの内を通じるなんて出来やしないんだ」

その未成年発言にある人物が視線を向ける。

「暁さんは今二十歳なんよね？ ついこの間まで未成年だったんじゃない」

はやてだった。

「人間での年齢だったらな、悪魔としての年数も加えたとお前らの数十倍は年上だ」

「そうになると俺はアキラを『おじいちゃん』と呼んだ方がいいかな？」

ダンテが暁に対する呼称を変えようとするが暁に睨まれ両手を上げた。

「お前に言われるとスパイダより年上になるから却下。俺はスパイダより歳下だ」

「暁ちゃん、話がどんどん脱線しちゃってるよ」

脱線した話を戻そうと原因である暁に指摘する。

「そうだったな悪い、んであの姿つてのが悪魔としての俺の姿。そして、異質の存在として知られていた」

「異質？」

「実際には私も、何だけどね。まあ見せた方が早いかもね」

スバルの返しにエルムも自らも異質の存在だと明かす。

すると二人は頷き光に包まれる。

「これが俺の本当の姿で……」

「私の本当の姿よ」

暁はリテラエルネルアを周りに影響しないよう解放しエルムも自らの悪魔への引き金を引く。

エルムは少女の身体から女性の姿に変わる。

ツインテールをポニーテールに変え、身体も成長し妖艶たる雰囲気醸し出していた。

一同はその容姿と衣服に口を開けた。

「なんで巫女服やねん!？」

そう、はやての言う通り、今のエルムは神社に居る女性が着る上下紅白の衣装……巫女服を着ていたのだ。しかしその名前しかり、どういった衣装であるかは日本の文化を知る人間しか知る由も無い。

「法衣のデザインを考えてたら色んな服が掲載されてた雑誌を見つけて『これ良いなあ』って決めたのよ」

「（それ、絶対コスプレの本や）」

と、思ったはやては暁に視線を向ける。

すると暁は苦笑いで返した。

「どういう訳か身内がその本持ってた……、あらかじめ言っておく、コイツに似合ってると思うが俺の趣味じゃないからな」

あらかじめと言うあたり本当じゃないのか、と弄ろうとしたはやてだが暁が自身の背中に手を回したのを見て慌てて謝った。

「ったく。とまあこんな感じに異質と言われる由縁は悪魔なのにはば人間の容姿だからさ。ついでに技術もあるからな、ダンテが持つてるリベリオンやネロが持つてる閻魔刀……あれは俺が作ってスパーダに渡した物だ」

「これアキラが作ったのかよ!？」

ネロが悪魔の右腕から閻魔刀を具現化し見せる。

造りが日本刀と酷似し、人と悪魔を分かつ刀である。

「うそ… 凄い魔力があの手から感じる」

閻魔刀から漏れだす禍々しい魔力を感じ取ったティアナが冷や汗をだしながら驚いた。

「この世界の規定で言えばロスト・ログアに指定されてもおかし
くはないぞ」

「な、なんでそんな代物作ったの？」

「制作を頼まれたからな。俺とスパードは同じ志しを持っていた、だから俺はそれを引き受け三つの刀剣を制作した。先程言ったりベリオン、閻魔刀、あとは奴と同じ銘のスパード。そっぴやスパードは誰が持つてるんだ？」

「……トリツシュだ」

「あの人… か」

暁はスパードの所持者がトリツシュと聞き苦笑いした、彼女が魔帝に創られた悪魔である事を知っているからだ。

「基本的に俺が作る奴には魔力付加するからその影響もあるだろ
うな」

暁とエルムはもう一度頷き合つと二人は再び光に包まれいつもの青年と少女に戻った。

「エンチャント？」

「ああ、俺達の世界では物体に魔力を付加させることをエンチャントと呼んでいる。だが俺は制作時にエンチャントしてるからな、並の魔具じゃないんだよ。同じ理由でコイツも」

そういつて取り出したるは、かの恐怖を誘う凶器だ。

「ヒイツ!？」

悲鳴を上げたの一番真新しい犠牲者、はやてだ。

「ただの紙だけじゃないぞ。薄く延ばしたダマススス鋼とカブレライト鋼の合成鋼を挟んで折って、最も負荷のかかるしなりの部分に聖骸布の複製を縛り付けて更にエンチャントによって強度やオプシオンを付加。それから幾重もの改良点を見つけては改造して現状に至る域……ってどうした？」

「それは何と言うか……」

魔改造、その言葉がしっくりくる。そう思った一同、うんうんと頷いていた。

第十三話（前書き）

ぬふう…（しー）

ネタが…誰かネタ・構想継続スキルを恵んでくださいえ！！（切実）

ちなみに今回は戦闘無しです。

第十三話

「おいエルム……何とかしてくれ」

俺は今非常に困難な状況に陥っていた。

「あはは…流石に私でも無理だよ曉ちゃん」

頼みの綱であるエルムに救援の手を求めるがその手が来ることはなかった。

元の世界でもこういう相手にここまで苦戦することはなかった。いや、俺の生活からすると、こういう状況になるのは縁遠いものだった。そりゃあ過去にこういうのは経験しているが、まさか今になってまたやるとは思いもしなかった。

「あははは、たかいたかい〜!!」

「いだだだだ!?! 髪引つ張るなガキンチョ!!」

俺の頭の上でガキンチョが髪を引つ張りながらはしゃいでいた。

フリードといいコイツといい俺の頭はなにか出てるのか!?

*

まず、経緯を話そう。

俺達の正体を語った次の日、高町達が聖王教会なる所の御偉いさんから呼び出しを受けて向かう予定だった。

見送るためロビーに向かったのだが。

「なに集まってるんだ？」

「あ、神崎さん」

隊長達とフォワード陣が何か囲んでいたので、その何かを覗き込んだ。

「……オッドアイ？」

そこに居たのは先日保護した少女が泣きじゃくっていた。

その時見えたのが左右の異なる瞳の色だ。

「あ……」

すると少女と目があつた。

「パパ……？」

「……パパ！？」

少女の発言と共に一同こちらを見る。　いやいや、おかしくないか？

「お前ら俺がこの世界の住人じゃないって知ってるだろ」

少女の言葉を真に受けこちらに視線を向ける、コイツら……。

「あはは……そうですよ」

取り繕って笑い出す高町を睨みつつ背中に手を伸ばす。

ズザザ――

その動作によってとばつちりを喰らいたくないフォワード陣達とフェイトが高町から離れた。

「ふええ!？」

「よしよし餌食再びってやつだな」

「……パパ？」

視線を下にすると少女がこちらを見上げていた。……流石に子供の前では教育上まずいよな。

背中に伸ばした手を戻す、その際に高町が安堵の息を吐いたが俺は気にせず少女と同じ視線の高さまでしゃがむ。

「なあ、なんでパパなんだ？」

少女はキョトンとし――

「パパはパパだよ？」

と返した。 うん、まあ確かにパパはパパだそこは間違えてないんだが……そこフォワード陣笑うな。 そういう意味で睨んだら物凄い勢いで後ずさった。

「いや、なんで俺がパパなんだ？」

「だってパパはパパでしょ？」

……はあ、なんか疲れる。

「そういえば神崎さんが来てからヴィヴィオ泣き止んだね」

「そう言われればそうだよな」

高町とフェイトはお互い頷き合う。 なんか展開が読めた。

「……俺にお守りをしろと？」

頷かれた。 どうしろと言うんだ。 保育士の資格持っていないから勝手がわからんぞ。 ……ああ、元の世界で必要ないからと行かなかったがセミナー行つとけばよかった……。

「お兄ちゃんなら大丈夫ですって!!」

「そうですよ、私達のお兄ちゃんなら大丈夫ですって!!」

……ちょいまで。

「パパに次いでお兄ちゃん？」

「…だってリニアレールの時に励ましてもらいましたし、あれから面倒見てもらってますし」

「なんかお兄ちゃんってこんな感じなのかなあって」

確かにあれ以来世話をやくようになったな。 仕事なら仕方ないがオフの時はまだ二桁に入ってたばかりの子供になるんだ、こんな時期だからこそ色々知識を手に入れておかないと、と思い面倒をみだしたのがきつかけだな。

「まあ、パパよりはマシだけども……」

だったら先生が適切じゃないのか、と少し迷うがそう呼びたいって事は少なからずその存在に飢えているということか。 ……ここはこの二人の意志を尊重しよう。

「オーケー、呼びたいように呼べばいい。 ヴィヴィオも呼びたきゃ呼べ」

目の前のヴィヴィオの頭を撫でると目を細め嬉しそうに笑った。

「ていうか、高町達早く行かなくて良いのか？」

確か呼出しを受けてるだよな。

「あ、そうだった！！ フェイトちゃん行こう！」

「うん、なのは！」

「そだ。 高町これ後で試食してくれ」

そういつて包みに入った菓子を渡す。

「これは？」

「新作のスコーンだ、お前の親父さんに頼まれててな。まずはお前の感想が聞きたい」

「そういえばお父さんとお母さん神崎さんの作るお菓子絶賛してたような……もう、そんなこと頼んで」

「いや、好きでやってるから気にするな。流石にオペラは時間が掛かるから無理だが」

オペラとは幾重もの層で成り立つ洋菓子で手間と時間が他の洋菓子より掛かってしまう。

丸一日かけても満足いくオペラが出来るかどうかだからな。流石に喫茶店で出せる代物じゃあない。

「まあ確かにあれは無理ですね……。これ、ありがとうございます、向こうで皆でいただきます。ヴィヴィオ、ちゃんといい子にしてるんだよ？」

「うん!!」

ヴィヴィオは元気良く頷き、二人を見送った。

そしてエリキャラ（二人を呼ぶ時はこれで）のついでに生徒が一人増えた。

回想終了。

「あ、そうだ。　ヴィータからクッキーを依頼されてたんだった」

頭上のヴィヴィオと戦い（？）ながら別件を思い出し行動に移る。

「ヴィヴィオ、ちょっとお菓子作りするから手伝ってくれるか？」

頭上にいるヴィヴィヴは目を輝かせながら（顔は見えないが漏れてくる言葉でわかる）こちらを見ている。

「お菓子！？　手伝う！！」

「よしよし。　エルム、約束のミルフィーユも作るからお前も手伝え」

「了解でっす、隊長！！」

ミルフィーユという単語に惹かれ軍人もビックリな姿勢と敬礼で返事した。

「そっぴゃ、スバル達も誘わなきゃなあ、…ダンテやネロは他のをくわせろとせがむから声掛けないようにしよう」

と、独り言をしながら厨房を借りに食堂へ向かう。

*

『~~~~』

「ん？」

食堂に入った瞬間歌声が鼓膜を刺激した。

つられて視線を向けるとテレビで一人の女性がステージの上でフリルのついた衣装を着て歌っていた。

外見的に可愛い分類に入るであろうそれはいわゆるアイドルって感じた。

いわゆるもなにもアイドルなんだろうけどな。

「へえ、この世界にもアイドルなんて居るんだな」

「そりや居るでしょうよ、旦那の世界にも居るでしょう？」

不意に呟いた言葉だったがまさかの返事があるとは思わなかった。

「ヴァイス」

「あれ？ その娘先日のお守りですかい？」

ヴァイスとはバイクやら銃関係で気が合い歳も近いというのもありなにかと話しをする仲だ、ティアナの兄の話しもヴァイスを介して知ったしコイツ自身の過去も聞いた。

「そんなとこだ、今からこのガキンチョと菓子作りしにいだだだ

「!!」

ガキンチョ呼ばわりされたのが気に障ったのか今だ肩車状態で乗っているヴィヴィオが髪の毛を引っ張った。

「ガキンチョじゃないもん、ヴィヴィオだもん!!」

「ヴィヴィオ、わかったから手を離せ!! 二十歳で薄毛になりたくないわ!!」

「えへへ」

名前を呼ばれたのが嬉しいのかヴィヴィオは笑顔になり頭に抱き着いてきた。

しかしなんでこんなに懐くかねえ、共通点なんで金髪以外無いのにな。

「へえ、旦那。そうしていると親子みたいじゃないですか」

「だってパパだもん!!」

「……へえ」

…コイツもか。

「……おいヴァイス、勘違いしないように確認するが、異世界人だぞ俺は」

「ええ知ってますぜ」

「……ヴィヴィオ、悪いけどこの馬鹿と話があるから先に厨房の方に行っててくれ。すぐ終わるから。エルム、ヴィヴィオを（惨劇が聞こえないよう）頼む」

「アイアイサー」

「えっ、ちよつ旦那！？ 冗談ですよね！？」

むんずとヴァイスの襟を掴み食堂から出る。その時叫び上げるヴァイスに食堂に居た局員が合掌しているのが見えた。誰も助けようとしなののか。

まあとばつちりは喰らいたくないらしいな。

とりあえず制裁するときに――

「ブウルアアアッ！！」↑俺

「ひでぶルアアアッ！？」↑ヴァイス

――な、カオスなネタが入ったが突っ込んだら駄目。これを見ている奴、自分の胸の内に閉まっというてくれ、そして直ぐさま別世界の彼方に捨て去ってくれ。

「あれ？ なにか聞こえたような？」

「んゝ、そう？ 聞こえなかったけど。……あ、ヴィヴィオちゃん、薄力粉こぼれてるよ！！」

「はにゃあ!?!」

こちらは平和にお菓子作りの為の下準備をしていた。

リテラエルネルア10万ヒット記念（前書き）

祝10万ヒットお！！

この度は当作品リテラエルネルアが10万ヒットしたお礼に特別編を投稿しましたー！！

前編後編という二部構成でお送り致しますー！！

今回の特別編はリリカルなのはStrikerSのサウンドステージ01『出張・機動六課』ですー！！まあ時間軸はリニアールの数日後としてますがw

それでは前編をお楽しみくださいー！！

リテラエルネルア10万ヒット記念

「出張？ 俺もか？」

リニアレールの事件から間もない頃、八神から出張同行の話が出て来た。

俺は魔力で作ったターゲットをアグニとルドラで撃ち抜く日課の訓練をしている最中だ。

「そや、暁さんも地球生まれやゆうしこの世界の地球にも興味ないんかなあとおもってな」

まあ興味ないなんていつたら嘘になるわな、もしかしたらパラルワールドじゃないかも知れないから帰れる可能性がある。

「別にそつちがいいんなら参加するが……別に通信でもよかったんじゃないのか？」

そう、俺は六課宿舍から離れた森林の中に居たのだ。それをわざわざ直接言いに来る必要性が無い。

「いや、ちよいと気分転換もかねて暁さんを探してたんや。もお書類ばっかで嫌になるわ……」

なるほど、確かに書類ばかりだと気が滅入るよな。 かくいう俺も元の世界でも書類仕事は面倒だと思うときがある。

まあ、肩書が支部長という面倒極まりない役職を任されているか

ら部下に迷惑をかける訳にもいかずやるしかないのだが。

「支部長って、曉さん元の世界で何してたんですか？」

「ああ……おいまで、いつ俺が元の世界での仕事の話しをした？」

「なんとなくそう感じたんや」

こいつ……、前世はアムロをも凌ぐニュータイプだったんじゃないのか？

「まあいい、俺は表社会では人材派遣会社の支部長としてその座に座っていたからな。それで？ その出張っていつ行くんだ？」

「明日や」

「急だなおいッ!？」

急すぎて声を荒げて突っ込んでしまった。

「いやぁ皆には既に言ってるんやけどどうせなら曉さんもって思ってたな」

「はあ、なるほどね」

思わずため息がでてしまう。

まあ今日の訓練は午前中しかないようなのであとは準備の時間にあてよう。

「んで、曉さんは私と一緒に行動やから一足先に向かって現地で下準備や」

…この場合一足先ってのが異様に不安感を煽るのはなんなんだろうな。

「一応聞いておくが一足先についていつなんだ？」

「今日の午後や」

「……なあハリセンで叩いて良いか？ そんな頭、修正してやる」

更に唐突になりやがった、こちらの都合お構いなしか。

「そんな訳やから準備しといてや」

「あ、おい待て八神！！」

背中に伸ばした手を途中で止め走り去る八神の制止を呼び掛けるがその言葉は虚しく響いた。

「……まじかよ」

ポツリと呟いた言葉もまた、虚しく響いた。

*

あれから数時間後。

俺と八神は転送ポートにてこの世界の地球に降り立った。

「うおぶ」

「だ、大丈夫なん？」

しかし転送時の独特な浮遊感が合わないらしく気分ががた落ちした。転送酔いだ。

基本的に乗り物酔いはしない質だがこれは別格だ。

リテラエルネルア10万ヒット記念

魔法少女リリカルなのはStrikers サウンドステージ0
1 始まります……うおぶ、吐きそう。

「——あゝあゝ……」

魔術で作った氷を額に乗せ、木陰の下で横になっていた。

まだ気分は最悪、転送なんて作った奴出てこい。ハリセンで成層圏まで狙い飛ばしてやる。

「なっさけないわねえ、たかが転送ごときで酔ってんじゃないわよ」

「ほっとけ、俺はあの浮遊感は合わないようだ……」

この状態にダメだしされたのはこの地球での今回の現地協力者、名前はアリサ・バニングス。話を聞くと彼女は八神や高町、フエイトと幼馴染みらしい。あともう一人いるみたいだが……。

この世界の地球は管理局の手がない管理外世界という事らしい。そのため魔法と言う存在は秘密らしいのだが家族や親しい友人は知っているらしい。

あと一応、俺も自己紹介し鳴海市外出身と言った。

「はやても大変ねえ、こんな彼氏もって」

「かかかか彼氏!？」

「あら、違うの?」

……なにやら誤解があるようだが訂正するのは八神に任せよう、今はコンディションを戻す事が優先だ。

「あ、曉さんは仕事上の付き合いで協力者で今回の仕事について来てくれたんよ……!!」

「ふうん、てつきり彼氏連れての仕事かと思ったわよ。良く見たら結構イケてるわね」

「ああ、お褒めに預かり光栄だ、自分的には標準的って感じなんだがな」

いくらか回復したため、立ち上がる。まだいくらかふらつきは

あるが大丈夫だろ。

しかしまあ見渡せば湖にいくらかの小家がちらほら……コテージだよな。

現地協力者が彼女だとするとどこぞの御令嬢というわけか。

「んで、八神。俺達は先行したわけだがなんか理由があるのか？」

仕事内容をはっきりと聞いた訳じゃないからな。 悪魔関係……じゃないのは確かだな

「それは私達が『専門』に扱ってる物の探し物や」

専門？ 確か八神達が探しているのってロストロギアだったよな。……おいおい、なんでそんな管理外世界にロストロギアなんてあるんだよ！！

『いやな？ 回収したロストロギアの一部が運送中のトラブルで紛失したんや。それでその紛失したロストロギアの反応がこの地球であったんや。そこで地理を把握し故郷である私達にその仕事が出来たつちゆうことや』

俺の視線に気付いた八神が念話で話し掛けてきた。

なるほどね。

「とりあえず現地協力者のアリサちゃん少し話す事があるやけど曉さんはどうするんや？」

「友人同士の話に介入したいほど野暮な事はしないさ、鳴海市の地理を少し把握したいからぶらついてくる」

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。お礼にウチの使用人に鳴海市の案内させてあげようか？」

「いや、自分の足で行くよ。じゃあ八神、夕方ぐらいには戻るからな」

「了解や」

俺は手を振りながら湖畔を後にした。

*

数十分後。

「なんだよ、これ……」

迷彩魔術を使用し、住宅地を屋根伝いで移動して行くとある違和感を感じた。

そしてその違和感を確かめるために小高い丘へと来て愕然とした。

「まんま桜木市じゃねえか……」

この丘から見える小、中、高の学校の位置、サッカーグラウンド

がある広場。商店街の区域。桜木市の特徴である桜並木群が無い以外は俺の世界の住んでいる街に酷似していた。

流石、平行世界。

そうなる気になるのは、この世界での俺の家の住所だな。

この丘の見える景色であそこが高校だとすると……あの辺か。

再び迷彩魔術を使用し丘を降り、住宅地を駆ける。

*

『八神部隊長、先程鳴海市内で魔力反応を感知しました。けどこれって』

その頃、はやてはシャーリーから魔力感知の報告を受けていた。その感知パターンから知り合いのモノと一緒にだったのだ。

「……多分神崎さんやろなあ」

報告を受けたはやては若干、自身の顔の引き攣りを感じた。

『良いんでしょうか……？市街地での魔力行使は禁止されてるはずなのに』

「あの曉さんやから別に危険はなさそうやし無視してええよ。反応履歴も削除しといてな」

こちらの魔法世界の法なんて知らない彼だ、別に悪さしている訳ではないのだからこのまま放つとした方が良くないのかも知れないと思
いシャーリーに改竄をお願いした。

『了解しました』

シャーリーもいくらか表情が引き攣っていたがはやての指示に反
応し通信を切った。

「なに？ あの時崎って奴も魔法使えるの？」

今の会話を聞いていたアリサが疑問を口にした。
その疑問に対してはやては言葉を濁す。

「ああ、ちよつと説明ややこしくなるかな……」

「どういう事よ？」

「暁さんのは私やなのはちゃん達とは違う魔力行使をするんですよ。
だから勝手も違うし……ん、私もようわからないんですよ……」

腕を組み、頭を垂れながら困惑していた。

*

「『翠屋』？」

見当していた場所に着くとそこは喫茶店らしい。

「まあ高町達が桜木市を知らないって言う時点でパラレルワールドだとはわかっていたが……」

實際目の当たりをすると嫌でも実感させられる。

「あら？　どうかなさいました？」

店前で立っていた為ドアから店員らしき女性が現れた。

「あ、いえ。　なんでもありません」

「そうなんですか。　あ、よろしかったら寄って行ってください、当店の品はどれもイチ押しですよ」

そういや少し小腹が空いたな。　軽く食っていくのも問題無いだろう、八神やアリサへの土産も手に入りそうだからいいか。

「じゃあ、お邪魔します」

「はい、『翠屋』へようこそ」

*

「……フムフム、なるほどそういう中身もありか」

「中身に入れるクラッシュゼリーを用意するので時間がその分か

かりますが少し暑めな時期には清涼感もあるため若い女性にも受けるかと思えます」

俺は今、この店の店主とお菓子談議している。

結果から言うとかかなり美味かった。

このレベルの味をここまで低価格で出来るなんて相当な腕だ。十分一流のパティシエとしてやっていける程に。

そう感心していると一人の男性がこちらに来て談議が始まった。

「ふむ、少し試してみるか……暁君と言ったね。よかったら協力してくれないか？」

「あ、はい。って良いんですか？俺は一般客ですよ？」

「良いって良いって、君は真っ直ぐな青年そうだし、何より君みたいな者と談議出来て嬉しいし」

「はあ……」

そういつて女性店員の顔を見る、あの人は本気なのかどうかを。

すると女性店員は笑顔で頷いた。

どうやらこの店主は本気で一般客の俺を厨房に入れる気だ。

「まあいいつか、せめて調理を楽しもうか」

あそこまで子供のように楽しそうに話す人物だ余程作ることにがすきなのだろうな。

俺は店主を追い厨房へ入る。

「あ、すいません。 予備のエプロン貸してくれませんか？」

「じゃこれどうぞ」

そう言っで渡されたのはチェック柄の腰巻き状のエプロン。 それを受け取った俺は上着を脱いで邪魔にならないところに置き、エプロンを身につける。

「なかなか様になってるよ」

「ありがとうございます。 さて、何から始めましょうか？」

「そうだね、先程話していたシュークリームでも取り掛かるうか。 暁君はどうやってるんだい？」

「俺はサンドする方ですね。 クラツシュゼリーを混ぜたクリームを入れるので」

「よし、じゃあ生地は俺がやろう。 その間中身の方を頼むよ、材料は好きなものを使うといい」

これはありがたい、それなら意外なものも作れるかもしれない。

それから約二時間が経とうとしている頃。

「三番さんクラブハウスサンド上がりです桃子さん!!」

「暁君、次ホットケーキ三枚焼いてくれ!」

「了解!」

「六番さんショートケーキの生ハーブティセット入りました!!」

「了解!!」

いつの間にか手伝っている俺が居た。

*

「いやあ助かったよ、ほんとありがとう暁君」

さらに一時間ちよつとした後来客も落ち着いてきたので一息ついた。

「いつもはそんなに来ない時間帯なんだけどね、娘も出かけてていない状態だったからホント助かったわ」

「いえ、お役に立てて幸いです」

頂いたコーヒーを口にし豊潤な香りが広がる。 やはりコーヒー一つにしても美味しい。

「暁君は普段どんな仕事しているんだい?」

「一応派遣会社の支部長をしています」

「へえ、そんな若いのにたいしたものだ」

「別にたいしたものじゃ無いですよ、支部長と言っても肩書だけで書類仕事以外は自らも現場に行きますから」

まあウチの支部の人間が優秀だから俺も裏ハンターとして行動できる訳だ。

「支障がなければどういふものか聞いてもいいかな？」

「いいですよ。基本的には一般の人材派遣会社と同じと思って頂いたほうがわかりやすいかと。唯一の違いが要人保護等も引き受けるとかですね」

マルチタスクな人材派遣ってコンセプトらしいからな。

「じゃあ暁君もその要人保護の依頼に赴く事も？」

「そうですね、一応体術や武術を心得ていますので。指名依頼なんてのも来ます、しかしなんでそう思うんですか？」

「道理で、いやあ筋肉の付き方とかが嗜んでいるものの独特の感じだからね。それじゃ君はかなり腕に自身があるようだね」

「まあほとんど顔見知りからの依頼ですけどね。あ、そろそろ行かないと」

時計を見ると五時前を示していた、夕方には戻ると言っただからそ

ろそろ戻らんと。

「ん、ああ。もうそんな時間が暁君今日はありがとう、後……」

士郎さんが立ち上がり厨房の中に入るとすぐなにかを持って出て来た。

「さっき君と作ったシュークリームだ、かなりの数だからお土産としてもって行くといい」

「あ、はい、ありがとうございます。あ、それと先程注文した代金、まだ払ってませんでしたね。おいくらですか？」

「代金はいいよ、手伝ってくれた賃金がわりだ」

ああ、まあ等価交換って意味ならいいかな？

「そうですね、では失礼します」

「また来てくれよ？」

俺は「はい」と返事をして桃子さんにも挨拶し翠屋を出た。

夕暮れという時間もあって空はオレンジ色に染まり、もうじき闇夜が世界を覆うとしていた。

「……急ぐか」

手にした土産物を崩さぬよう、かつ早急に戻るため再び迷彩魔術をしようし屋根伝いに移動を始めた。

リテラエルネルア10万ヒット記念後編（前書き）

時間かかりましたが後編をどうぞW

リテラエルネルア10万ヒット記念後編

とまあ先行組、……俺と八神だけなんだが。——が合流したのが五時半でそれから飯食って、翠屋のスイーツを食べ、八神は再びアリサと談笑に勤しんだ。俺はほとりにて横になり夜空を見ていた。

「しかしまあ、世界は違っても地球は地球だよな」

まだ人間としては総年齢の一割にもなっていないが地球のこの何とも言えない心地良さは一緒だ。

時期が時期なのだろうが寒くもなく、暑くもなく過ごしやすい夜だ。

「アグニ」

ふとアグニをデバイス化し、右手に持ち、銃口を月に向ける。

「ダアン」

口で銃声を真似したあと、アグニを待機状態に戻す。

「あいつらちゃんと飯食ってっかなあ」

元の世界の身内を案じる、基本的に家事は俺が担当している。やらせたくないってのが第一だからな。

「やべ、なんか無性に家の事が心配になってきた……」

想像できうる光景に余計に心配の種を自分で植え付けてしまった。

リテラエルネルア10万ヒット記念リリカルなのはStrike
rsサウンドステージ01『出張・機動六課』後編。

夜が明け、後行組が来る時間になると八神の指示を受け、あるポイントに待機していた。

八神から『このポイントわかる?』と聞かれたが昨日の地理把握と桜木市の地理を脳内合成したため大丈夫だと言った。

「あ、神崎さん」

時間を確認しようと腕時計を見ると聞き慣れた声がエンジン音に重なって聞こえたのでそちらを向く。

「高町?」

どうやら俺はスターズと一緒に行動するようだな。しかし車が……
てかあれはトヨタのプリウスじゃないのか？ ホントパラレルワールドには驚かされる。

「お待たせしました、助手席にどうぞ」

案内を受け、俺は助手席に座る。後部座席にはスバルとティアナが居た。

「んで、具体的に何をするんだ？」

「あれ？ はやてちゃんから聞いてないんですか？」

「八神からは『来た分隊と合流して手伝って』としか聞いてない」

「もう、はやてちゃん……」

おい八神、高町が呆れているぞ？

とりあえず高町の説明を聞くとスターズとライトニングで振り分けた担当ポイントにサーチャーというものを設置するのが当面の仕事らしい。

まあスバルやティアナが良くやってくれているから俺が手を出さとかえって邪魔になるから周辺を警戒していた。

「ねえ、皆のところに行く前にちょっと寄り道していいかな？」

担当ポイントが終了し、後は合流するのみとなったのだが高町が寄り道を提案した。

「俺は構わないぞ、後ろの二人はどうだ？」

「はい、大丈夫です」

「同じく大丈夫です」

―だ、そうだ。　そういう意味合いで視線を向けると高町はケータイを取り出し、どこかへ連絡する。

「もしもし？　お母さん？」

お袋さんに連絡？　そーいや高町や八神、フェイトはこの出身だったな。

まあ出張とは言え実家が近いんだ、身内に顔出しとくのも悪くはないだろう。

……しかし、電話から聞こえてくる声。　どこかで聞いたな。

「――うん、じゃあ後でね。　よし、じゃあ行くから皆シートベルトしてね」

「「はい！」」

「了解」

高町はキーを回し車に息を吹き込む。　眠りから目覚めた車は運転手である高町に従い目的地へと向かう。

*

「あ、フェイトちゃん達もうついてる」

目的地に着くと、そこは昨日お世話になった喫茶店、翠屋だった。ここまで接点出来るとはね、いやはや並行世界、世の中広しといえども案外狭いもんだね。

「あ、なのは」

そう思いながら降りると向こうも気付いたようで高町の名前を呼ぶ。エリキャラも居るようだが……

「なあティアナ、あの後ろにいるやつって」

「はい、リイン曹長ですよ」

「でかくなれたんだ」

「ええ、でも燃費が悪いとか言っていましたね」

けど見た目がエリキャラと同じぐらいだからちびっ子はちびっ子だ。

「むっ……」

「……なんだ？」

するとそのちびっ子がこちらを頬を膨らませて睨んでいた。

「ちびっ子で悪かったですね!!」

「……お前もか」

流石八神のデバイス、お前もニュータイプの素質あるのか。

「あら、暁君？」

「こんにちは桃子さん」

「あれ、お母さん神崎さんのこと知ってるの？」

……………。

オーケー、確認だ。 今高町はいま何て言った？

間違いなく『お母さん』っていったな。

「「「「「お母さん!?!?!」」」」」

「若すぎるだろ!?!」

不意に突っ込んでしまった、昨日は士郎さんと桃子さんは夫婦で若いなとは思っていた。

昨日士郎さんが娘がどの言っていたから、その娘さんはおそらく中学生辺りかなと思っていた。

しかし、高町は19歳だ。それをふまえると桃子さんと土郎さんは失礼ながら最低40代だろう。

「まあ、暁君褒めても何も出ないわよ？」

「いやいや、本心だから……」

なんでだ！？　なんでこうも若いんだ！？　明らかにおかしいだろ！！

まさか悪魔……なわけないか。

「暁君は昨日ウチにきてね、お父さんとお菓子の話して盛り上がっててね。ついでにお手伝いしてもらったのよ、ちょっとまってね。——土郎さんなのはと暁君きましたよ」

桃子さんがいうやいなや、地響きを比喩した文字が出そうな勢いでその人物は現れた。

「なのはああ！！」

「きゃああ！？」

現れた人物はいきなり高町に抱き着き、高町は悲鳴をあげた。

あ、叩き伏せた。

「お、お父さん！？　いきなりなにをするの！！」

いやあ、このやり取り。 身内を思い出すなあ……

「おや、暁君じゃないか。 なんで君がなのはと一緒なんだい？」

地面に減り込んだかと思ったら何事もなかったかのようにこつちに話題をふつたよ。

「お父さん、実はカクカクシカジカで……」

「なるほど、事情はわかったよ。 暁君、娘のなのはが世話になってるね。 これも君の仕事なのかい？」

「詳しくは言えませんが仕事ですね。 そして高町達にはよくしてもらってます、こちらが厄介になってるぐらいですから。 しかし、高町のいまの会話でよく通じましたね？」

「それは親子だからね！」

うわ、清々しい笑顔で言い切った。 言葉的には素晴らしいけどキラキラしたバックが現れたために鬱陶しく思ってしまう。

「君みたいな者が居ると俺達も安心だ、なのはの事よろしく頼むよ」

「ちょ、ちよっとお父さん……!!」

「いや、高町は一人でも大丈夫だと思いますけど……？」

その一言に全員が高町を見る。

「え……なに、どうしたのかな？」

白い悪魔って言われてるからなあ、多分一人で戦艦級の火力を保
有してるんだろうな。

「しかし高町がこの娘さんだとは……」

「にやははは……」

ふとスターズの二人を見ると呆けていたのでどうしたのか聞く。

「いや、普通の女の子みたいだなと思ひまして……」

「なんかなのはさんの意外な一面を垣間見たような……」

「そりゃそうだろ、管理局でこそエース・オブ・エースと言われ
ているがそれ以前に19歳の若者だ、二人と大差ないぞ」

そうやって言い聞かせる。 ティアナはともかくスバルはなにや
ら崇高しているような気がしなくはない。

だからこそ自分と同じ年頃なんだとわからせなくちゃ、あとあと
やな予感がする。

そうこうしている内合流しなければならぬ時間が近づいてきた
ため、一同湖へと向かう。

*

「……銭湯？」

八神達から次の行動について聞かされた。

このコテージにはシャワー設備がない、水浴びをする季節でもないので市内にあるスーパー銭湯に行くというのだ。

やはりあそこだよな。

てなわけで着きましたスーパー銭湯。

流石に大人数だから入った瞬間店員の顔が引き攣ったな。

「ふい〜」

身体を洗い湯舟に浸かる。やはり気持ちが良い、これがホントに癒されるって感じた。

しかしまあ……

「お前も苦勞するなあ、エリオ」

「あはは……」

入る時にキャロとの攻防を繰り広げた（主にエリオ防戦のみ）が男同士と言うことで助け船をだした。

そして今お互い頭にタオルを乗せている。

「「ふい〜」」

ま、今はこの極楽気分を満喫するでしょう。

「エリオくん」

——が。そうはいってられなかった。

身体にタオルを巻き付けたキャラが敵陣（男湯）に単身乗り込んできた。

流石に俺は呆然とするしかなかった。

「きゃ、キャラ、キャラ！？　ここ男湯！！？？」

「うん、知ってるよ。　けど１１歳未満なら大丈夫だってえ」

どうやら規約を逆手にとった裏技を行使してきたようだ。

「か、神崎さん…！」

「諦めるエリオ、お前の負けだ。　大人しく混浴の露天風呂行つてこい、キャラ連れて行ってやってくれ」

「はあい！」

「そ、そんなあ……」

湯舟から引つ張り出されたエリオはキャラに引きずられながら表

の露天風呂へと連行されて行った。

——折角の機会だ、お互いの交流を深めとけよ。と一方通行の念話を送つといた。

俺は先上がり、備え付けられているマッサージチェアを目当てに身体を拭き着替える。

……と、ついでに珈琲牛乳買わんと。

すると背筋に寒気が走る。

「——来たか」

感じる気配に口元が上がるのを感じながら銭湯をでて八神に連絡する。

『八神、悪魔が出た。これから現場に向かう』

『なんやて！？ ちょいまっててな、今『ああ良い良い。気配からそこまで強い奴じゃないから俺一人で行くよ』せやけど……』

洩る八神に俺はふう、と息を吐き――

『俺はデビルハンター、悪魔を狩るのが仕事だ』

と、笑っている自分を自覚する。

『あれ、暁さんは確かなんかの支部長してたんじゃない？』

『それは表の顔だ。　じゃあ行ってくる、終わったらコテージに戻る』

『了解や』

回線が切れる音が頭に響き、俺は待機状態の相棒をデバイス化し気配の出所を探る。

河川敷の方からだな。

迷彩魔術を使用し民家の屋根に上り、屋根伝いに移動を開始する。

アネモネはまだデバイス化に出来てないからガンスタイル中心でやるしかない。

最悪の場合クラウド・ソラスを使う事も考えとかないと。

そう思っただけ現場について目に入った光景は赤、青、緑、黄色等色とりどりのゼラチン質な物体が広がっていた。

「……………ぷよぷよ？」

あれか？　同じ色四つ以上繋がれば消えるのか？

いや、まさかな。　気配は悪魔なんだが力は強くない、こんなやつ初めてだ。

試しに何発か放って見ると魔力で形成した弾丸がぷよぷよに当たると消滅した上、魔力の結晶であるレッドオーブが出て来て俺の身体に吸収された。　完璧に悪魔だ。

「隔絶結界張っておくか」

俺は結界の範囲を座標を指定して決定する。 河川敷グラウンド
を中心に半径500Mあれば十分だ。

範囲が決まり結界を発動させると世界が変わった。

夕焼けを思わせる赤い世界に変わったのだ。

「オーケー、それじゃ全消し狙いでやってみますかー!!」

未知の悪魔だろうが俺の邪魔をするならぶちのめす、今までも、
そしてこれからも!!

お前もこの場に居たら同意するだろ？

なあ、スパ―ダ―!!――

リテラエルネルア10万ヒット記念後編（後書き）

さて、終わり方が納得いかない方もいらっしゃるかと思いますが、まずは申し訳ありません！！

本来ならキャラが封印に挑戦するシーンを書こうと思いましたが、何故か暁が最下級の悪魔の力を取り込んだスライム（ぷよぷよ）と対峙するというシーンになってしまいました。

あれゝ… なんてこうなっただろ……。

ともあれ、おかげさまで10万ヒットを越えることが出来ました！！
！！ これからもよろしく願いします！！

キャラプロフィール&キャラ画（前書き）

みてみん様をご利用させていただいて現時点の主人公、神崎暁とエラムのプロフと画像をアップしました。

キャラプロフ&キャラ画

神崎 暁

> i 8 2 6 2 — 8 0 3 <

悪魔名「アムカディム」

元悪魔という過去を持つ悪魔狩人。 スパーダと同じ思想を持ち人間に近い思考と容姿から魔界では異質な悪魔として存在していた。

高度な工学知識・技術を有しているためスパーダの持つ閻魔刀、リベリオン、フォースエッジ（魔剣スパーダ）を作り上げたのも彼。

人間になってからは人間界に移り、人材派遣会社の支部長という肩書をもちながらも指名依頼があれば自身も現場に向かう。 しかしそれは表の顔であり裏では時計塔に所属する魔術師であり悪魔関係の専門ハンター。

小太刀より長い刀を二振り、朱と翠の装飾銃。さらには自らが設計、製作した大剣『クラウ・ソラス』、魔術を使用しハンターとして動いている。

表の人材派遣会社はマルチな人材派遣をコンセプトとしているため様々な職種の依頼が日々来ている。

エルム

> i 8 2 6 3 — 8 0 3 <

エルムは悪魔としての名前であり人間の時の名前は『柳 楓』と
しているがあえてエルムと名乗っている。

暁と同じ人間になったものの力の関係で幼い容姿になってしまっ
た。

戦闘では姿に似合わず肉弾戦が得意、しかし法衣が何故か巫女服
のため中距離補助がメイン。 符を利用した結界や下級・中級召喚
を使用。

第十四話

「んで、街に出て来た訳だが……どこだここ」

なにが『んで』かは読者の皆にはわからないだろう。

現在俺はミッドチルダの街に來ている。 目的はこの世界のある
ブローカーに頼んだ代物を引取にだ。

そして指定された場所に向かつていたはずなんだが……。

「ぬう……誰か連れて来ればよかった」

なかなか見つからず、その場で唸っていると喧騒が耳に入った。

なにやら人だかりが出来ていたので向かつてみる。

「なにがあつたんですか？」

近くにいた人に聞いてみるとその人は慌てた表情で応えてくれた。

「銀行強盗の犯人が女の子を人質にしてるんだよ……！」

その人が指す先を見ると二人の男女、フードを被ってはいるが顔
の輪郭やスタイルを見ると女性だろう。 その女性は犯人であろう
男性にデバイスだろう杖を突き付けられ震えていた。

銀行強盗に入ったらしいがあの女性に邪魔され失敗したらしい。

「管理局員は……すでに居るのか」

仕事が早いことで……しかし人質が居るからか迂闊に手を出せずの様子を伺っている。

仕方ない。俺は見かけた手前放っておけない節がある。

俺はその場から離れ、路地に入り犯人が背を向けているビルに回り込み裏口から中に入る。

3階くらいでいいか？

俺は階段を駆け上がり犯人の真上となる位置を探す。

「さつき見えたかぎりだと……ここか？」

窓から下を見下ろすと若干ズレてはいるが犯人の頭上に出た。

「アグニ」

待機状態の装飾銃をデバイス化しタイミングを図る。その時に局員の一人がこちらに気付き目を見開くが、アグニを見せて協力するというジェスチャーをすると真剣な目になり頷いた。理解が早くて助かる。

「さて、——つとー！」

俺は足に魔力を送り強化すると窓から跳び降りる。

「な、なんだデメエはッ!？」

気配に気付いた犯人はこちらに杖を向けるが遅い。

アグニの引き金を引き朱の魔力弾が男の持っていたデバイスに当たり落とす。

「ぐっ!？」

そして俺はデバイスの上に落下した勢いを上乗せして叩き折るように着地する。鈍い音とガラスが砕ける音を発しながら杖状のデバイスは折れた。

「デメエエエツ!!」

激昂した犯人は人質を突き放し殴りかかってくる。生身の身体で俺にダメージを与えるやつなんて身内しかないつつつの。

「雑魚が…」

俺はそう吐き捨てるとアグニを上投げて両手で拳を受け――

「俺に勝とうなんざ千年早いんだよボケが」

相手の勢いを利用し、背負い投げの要領で地面にたたき付ける。

「ぐげっ! ギャアアッ!!」

たたき付けた瞬間骨が折れる音が聞こえた、無理に背負い投げしたから腕の骨が折れたんだろう。

「アアアッ！！！！　グアッ！？」

腕を抑え、のたうちまわる犯人の胸を足で押さえ付け落ちてきたアグニを取り銃口を向ける。それを見た犯人は観念したのかガタガタと身体を震わせこちらを見ていた。

「Jack pot．　おい局員、逮捕頼む」

「あ、はい！」

締めを頼むと野次馬から歓声上がり、先程俺の存在に気付いた局員が犯人にバインドで拘束すると俺に敬礼してきた。

「ご協力ありがとうございました、失礼ですがあなたは？」

「時空管理局　古代遺物管理部、機動六課の民間協力者、神崎 暁。私用で街に来たのだが今回の事件を見て勝手ながら手をだした」

アグニを待機状態にしてとりあえず敬礼で返し、身分といきさつを話した。

「あ、あの」

「ん？」

背後から声をかけられ振り向くと人質だった女性が居た、ただその後ろにスーツ姿の女性が控えているのが気になる。

「助けていただいて、ありがとうございます…！」

「いや、勝手に手をだしたただけだ。無事ならそれでいいよ」

「せめてお礼をさせて下さい……」

「悪いが俺も用事残ってね、そこまで時間無いんだよ」

「で、では後日改めてお礼を……」

「いや、だからいいって」

なんとか断ろうとするも引く気はないらしい。すると後ろにいた女性が近づいてきた。

「すみません。あの、この娘もこう言ってるのでそこを何とか出来ませんか？」

「……あなたは？」

「申し遅れました私この娘のマネージャーをしています『アイリ・フラウ』です」

「……マネージャー？」

マネージャーってあれか？ 芸能人のマネージャーか？

「ああ〜ッ！！？」

そう訝しんでいると近くにいた局員が大声を出した。あまりの音量に耳を塞ぐ。

「うおッ！？ なんだいきなり！？」

「どこかで見たことあると思ったらアイドルの『ヴィオラ・セイ
ン』ちゃん！？」

「あ、はい……！」

少女がフードを取ると先程とは違う歓声が上がった。それはもう
地響きを引き起こすほどだ。

「なんだなんだ！？」

「神崎さん！ この娘トップアイドルの一人ですよ、いやあまさ
かこの目で生で見られる日が来るとは……！」

目の前にいる局員は拳を強くにぎりしめ、感動のあまり涙を流し
ていた。

よくみると先日食堂のテレビで見た事がある顔つきだ。 変装の
為か上着に隠していたピンク色の髪を両の手ですくうとサラサラと
髪質を演出した。

なんかどっかで見たような……。

「あ、あの、なにか？」

ジロジロ見てしまいそれが気味悪がったのか一歩後ずさる。

「……いや、悪い。 知り合いに似ていたものでつい」

知り合い、てか身内だな。　こうしてマジマジと見るとわかる、この娘俺の義妹に瓜二つだ。

髪色は違うものの、顔つきや目、瞳などあいつと同じだからおどろきだ。　よくよく考えるとこの娘の名前であるヴィオラ……学名ではあるが、英名はバイオレット、和名は『堇』、花だ。　元の世界に居る義妹の名前でもある。

てことは、平行世界である堇の存在はこの娘って事になる。

「……………なんでそういう奇跡的な確率を引くかな俺は」

本来なら平行世界にある同一的存在と出会うなんて万分の一、億分の一以下の確率なんだ。　その確率を当てるなんて……………だったら宝くじ当たってほしいよ。

「話を戻すけど俺は礼が目当てで手を出した訳じゃないから気にしないで…そだ。　だったらこの場所教えてくれるか？」

俺は一枚の紙片を取り出し書かれている内容を見せる。　そういや当初の問題忘れてたよ。

「『ガローラ』ですか？　それならあの酒場ですね——」

そういつて、道順を教えてもらい俺はその場所に向かうために足を向ける。

「あれ、アイリさん。　そういえばあの人機動六課がどうのこうのっていつてましたよね？　たしか次の仕事って」

「そういえば今度の仕事で管理局のある部隊の取材をする予定だったわね……うん、機動六課の取材ね」

ヴィオラに聞かれたアイリは懐から手帳を取り出し予定を確認する。

「そっか、また会えるんだ」

「ならその時にちゃんとお礼いっとなかないとね」

「はい！」

*

ヴィオラのおかげでガローラに着いた俺は中に入る。

「ご注文は？」

タバコ独特の臭いと紫煙を掻き分けカウンター席に座ると、ふきんでグラスを拭きつつけるマスターがこちらを見ずに注文を聞く。

「『彼の者の贈り物』を」

「……………」

ブローカーと合わせた合言葉。　ここのマスターに渡しておくからこの合言葉を言えばわかる。　と言っていた。

するとマスターは動きを止め、こちらに向く。

「しばし待て」

グラスとふきを置きマスターは店の奥へと姿を消した。

「——待たせたな」

戻ってきたマスターの手には拳大程のケースが握られていた。

俺はマスターからそれを受け取ると中身を確認するためにケースを開ける。

「……よし」

中身を確認すると蓋をしてポーチに入れると席を立つ。

「……あんたも物好きだな。そんな希少な物を手に入れて何に使う?」

店を去ろうとするとマスターが俺を引き止めた。

「なあに、ある物を創るためにコイツの持っている特性が必要っただけだ」

マスターの問いに簡潔に応えた俺は店からでた。

「さて、と」

酒場からでると来た道を戻りショッピングセンターへと向かう。

「!？」

突如襲つ寒気と同時に世界が切り替えられたのを感知した。

「……来たな」

俺は原因の出所を探し見当を付ける。

気配は中の上。 ベオウルフ程ではないが中々力のある悪魔だろう。

「おい、八神。 聞こえるか？」

簡易デバイス化された時に追加された通信機能を使い八神に報告しようとするが――

『ザ――……』

返ってくる音はノイズ音だけ。

「……ま、いつか」

別にムンドウスのドアホがでしゃばって来てるわけじゃないし事後報告で良いだろ。

ダンテ達も気づいてはいるだろうが、俺が近くに居るから動かないだろうな。

「――んじゃ、行きますかね」

＊

「……………あれ？」

迷彩魔術を使い、違う世界に切り替えられた街中を駆け出所に向かうとどうやら先客が居たようだ。

「こんちくしょーッ！！なんなんだよコイツは！？」

全員似たボディースーツを着こなし、三頭を有する蒼い氷狼と対峙していた。気配の主はケルベロスのような。

「気をつける！！ このアンノウンは氷の鎧に護られているぞ！！」

まああいつの特徴がその氷だからな碎いて一気に決めるつてのが正解なんだが、いや堅い堅い。何とかするまで一苦労なんだよな、めんどくさい事に。

「堅いつすゝ！？」

赤い髪をした奴の攻撃が弾かれ弱音を吐く、まあ生半可な攻撃じゃ意味ない。

「泣き言言う暇あったらその分氷を削れ！！」

【グオアアアア——ッ！！】

ケルベロスが吠えると空中に氷の塊がいくつも出来て、それらは奴らの頭上から襲ってきた。

「ちい、！！」

ちっさい奴がナイフをケルベロスに向かって投げる。

ナイフが氷に当たると爆発を起こして氷を砕いた。

その衝撃波で他の氷も吹き飛ぶ。その一部が俺に向かってくる。

「……なんでピンポイントでこっちにくるかね」

回転しながら迫り来る氷塊を避けると背後の建物から凄い音がした。

壁ぶち破ったんだろうな。

「さて、そろそろ加勢するかな」

迷彩魔術を解き、アネモネとアグニをデバイス化し一刀一銃の形を用意する。

【！？ ……この気配、まさか】

ケルベロスは俺の魔力を感知し動きを止め、視線を向けた。

それに訝しんだ奴らもケルベロスにつられこちらを見た。

「よう、大変そうだなお前ら」

「神崎、暁……！！」

ちっさい奴が俺の名を呟く、なんで知ってるんだ？ それはさておきケルベロスを見射る。

「ベオウルフに次いで今度はお前か。なんで居るんだ？」

【まさか、アムカディムか……貴殿、生きていたのか】

「勝手に殺すな、人間になっただけだ。　んで、なんでケルベロスがここに居るんだ？」

【……解らぬ、我は再び魔界で門番をしていたのだがいきなりこのような場に出たのだ】

いきなり？　魔界とこの世界の間で亀裂が入ったというのか？

「——ふうん、まあいい。　お前が居るとなればちょうど良い。　単刀直入でいう、お前の力を貸せ」

【貴殿の實力は把握している。　しかしそれは一昔前の事、脆弱なる人間に姿を変えた貴殿に以前ほどの力があるとは思えん】

徐々にケルベロスを覆う氷に鋭利さが加わっていく。

【今の貴殿の力、計らせて貰う……！】

ケルベロスが咆哮を上げるとそれが衝撃波となり周囲を襲う。

「くっ……」

「巻き添え喰らわないようにしろよ?」

胸のプレートに『?』と刻まれているちっさい奴に注意を促すと俺は臨戦体制に入る。

「さあ騷の時間だぜ、L e t ' s R o c k ! !」

俺は掛け声と共に地を蹴る。

「お前とやるのも久々だな、遠慮は……不粋だな! ?」

アグニとアネモネに魔力を送りながら間合いを詰め、ケルベロスに確認する。

【無論だ、我は力ある者に我の力を貸す。それ故手加減は不要!!】

その言葉で遠慮する必要は無くなった。ケルベロスは他の悪魔と違い力を示した者に敬意を表し、自分の力を貸すのだ。

そのため確認したのだが余計な事だったようだ。

「はっはあッ!! なら派手に行くぜえええ!!」

引き金を引き、アグニに溜めた魔力を解き放つ。行き場を失っ

た魔力が奔流となってケルベロスに向かう。弾は氷の一部を破壊しただけだった。

「《エアリアル》！！」

瞬時に魔法陣の足場を作り、踏み台にして跳躍、後退する。

今居た場所に地面から氷柱が出現した。

「《サーキット》！！」

肉体強化の魔術をかけ、再度接近……魔力を付加したアネモネで連続して剣撃を与える。

【ぬうッ…！】

氷鎧に亀裂が入り込み追撃の一発を叩き込む。

「まだまだッ！ 碎ける！」

再び魔力弾を放ち亀裂が入った箇所当たる。すると破裂音が生じたあと氷は碎けた。

【動きと戦闘方法が昔と違うな…】

「まあな、人間としての概念を学んだからその恩恵だ」

悪魔の時はただ力を使っていれば良かっただけだからな。人間になってからいろいろ学ばせて貰ったよ、魔術とか世界の概念とか色々とな。

「つくづく人間は脆弱な存在ながらも強さを持っているって思い知らされる」

【……確かに、力を持っている人間をよくみる】

頭の一つが俺の後方を——アイツらを——見る、まあこの世界はそういう世界だからな。

「行き過ぎた力じゃなければマシなんだがな。 アグニ解除、2ndモード！」

普通に会話しながらも激しい戦闘を繰り広げる俺達。 余波が周りの建物に影響し跡がはつきりと残る。

俺はアグニを待機状態にし、アネモネを2ndモードに、二刀流——ソードスタイル——に戦闘方を変える。

【しばらく見ない内に随分と様変わりしたものだな】

「昔の俺とは違うんだよ、昔の俺とは……！」

言っててあれだがなんかこの似た台詞どこかで聞いたな……。

【確かに。しかしそれでも以前の貴殿のほうが悪々しさがあったぞ……！】

ケルベロスは吠えながら己の爪で攻撃してきたので再度後退し避ける。 昔の俺を評価してくれるのは構わないんだが……もう限界。

「だああ！？ サラウンドで話すんじゃねえ！！」

頭部が三つ。しかも同じ台詞を同時に話すものだから不快感極まりない。俺は嫌いだこれは、精神的にク。

【仕方なかるう！！】

開き直り、ケルベロスは口からブリザードを吐き出した。

「ち、来たれ火炎！！」

辺りが氷結の世界になり徐々に身体に纏わり付いて来る氷に対抗し、火の魔術をアネモネに纏わせて振り回し炎熱で氷を溶かす。

【そのような炎で我を倒せるとはよもや思っではないだろうな？】

「まさか、お前を倒すには。——ハアアアッ！！」

自身に眠る悪魔の力を一部解放する。

「これくらいいしないとなあッ！！」

魔力の靄を立ち上らせ発動する力の威力を底上げる。

自身の前に等身大の魔法陣を出現させ発動までの工程を瞬時に終わらせる。

「『《ヴォルカニック・ブラスト》！！！！」

二重になった声と共に魔法陣から放たれる灼熱の奔流。業火を連想させる炎熱はケルベロスによって形成されていた氷結の世界を蝕みながら飲み込む。

【又ウウ!!】

ケルベロスは苦痛の声を上げる。

徐々に溶けだしてきたケルベロスの氷鎧、やがて自らの重さに耐え切れなくなり剥がれ落ちる。辺りの氷も水に液化し一面を水溜まりにした。

「来たれ雷電!!」

言葉を紡ぎアネモネに紫電が纏わる。

「おい、お前ら巻き添え喰らうんじゃねえぞ!？」

一応警告はした、文句は受け付けない。

「お、おい待て、お前まさか!？」

赤い髪の奴がなんか言ってるが、

受け付けない!!

「さあこの躰は結構効くぜ犬っころ!」

【また我を犬扱いする気が、貴殿は!!】

こつちも文句言っているが、

受け付けない！！

「焦がれる、襲爪……」

アネモネを逆手に持ち直す。

「く、全員上へ飛べ……」

『？』のちっさい奴が皆に指示する。

「雷陣撃ッ……」

アネモネを地面に突き刺すと水の通電性を生かしケルベロスを襲う。

本来なら斬りつける技だが場の条件が良い。

「アベベベベベ……」

【グウウウ……】

なんか背後で巻き添え喰らってる奴が居る。

シカトだ、俺は警告した。

【まだだ、まだ終わらん……】

すみません、その台詞知ってて言ってる？

そう思いながらもケルベロスは氷塊を落としてくる。

俺はアネモネを放し、バックジャンプで距離を置き――

「ウオオラアアッ!」

瞬時に踏み込み氷塊に前蹴りを入れる。前蹴りと言っても所謂ドロップキックだが。

【フンガッ!】

飛んで行った氷塊はケルベロスの頭の一つに当たり、うなだれる。

残りの頭の目にはうつすら球状の水が見えるが、液化した氷つてことにしとこう。

「……終いだな?」

一応戦闘態勢を維持しつつ呼び掛ける。

【し、仕方あるまいな。いま再び貴殿に我の力を貸そう、我が牙の加護があらんことを――】

ケルベロスは遠吠えするように咆哮すると光に包まれた。

光は1メートル程に収束し俺に向かってきた。

アネモネを待機状態にし、それを手に取ると一際強い光を放つと俺の手には三叉^{ケルベロス}昆が握られていた。

「オーケー、時を越えて再び、だな」

俺は笑みを浮かべると感触を思い出すようにケルベロスを振るいだす。

「はッ、せいッ、よッ!!」

ヌンチャクと似た形状によりまずはテレビでも見かける演舞をする。

「シュッ!!」

次に三本の昆を繋ぐ輪っかに手を入れ、振り回す。

「お次は…」

ケルベロス的一本を手にし、腰を落とし構える。

「飛んでけ!!」

遠心力を生かしブーメランのように投げる。

ケルベロスは冷気を撒き散らしながら孤を描くように飛んで行き…。

「Welcome back! (おかえり)」

手元に戻ってきたのを受け取り、肩にかける。

「さて、と」

俺は後ろを見て先程の奴らを見る。

「……………」

すると、そこには黒焦げになっている奴が一名。

「ウェンディ、大丈夫か！」

「痺れたっすう……………」

「ご丁寧にアフロ化されているから大丈夫だろ。」

ん、コイツらが着ているボディスーツ……………確かに以前逃げられた奴のと同じだな。

『やあ、はじめまして。お初お目にかかるよ』

そう思っていると目の前にウィンドウが現れ、一人の男性が映し出された。確かコイツ、フェイトが追っている奴じゃないか？

「ドクター！？」

プレートに『？』と刻まれている奴が現れた人物の事を呼んだ。関係者か、てことはコイツら……………。

『こうして君と顔を合わせるのは初めてだね、私はスカリエツィ。君が協力している機動六課で相手になつてるガジェットの実の親だ』

「……なんのようだ？」

人を見下したような目線で話し出すスカリエッティ、基本的にこう言った人種は嫌いだ。

『君の戦い方見せてもらったよ、さすがかのスパイダと同様の力を持っているだけの事はある』

「さあ、なんの話しだ？」

この平行世界にスパイダの伝説はおろか魔界の存在すら認知されていないらしい。なのに何故スカリエッティは俺やスパイダの事を知っている……？

『なに、私ほどの腕があれば簡単に調べられるよ神崎 暁くん、いや『アムカデム』と呼ぶべきなのかな？』

「ちッ」

思わず舌打ちをしてしまう、どうやら本気で調べあげたらしいな。

『私はね君の事をリスペクトしているのだよ？ 君の作り上げた作品の数々、実に素晴らしい物ばかりではないか』

「そりゃどうも」

俺の創った物までも知っているのか……。釘さしとくか。

「ただし一つ言っておくぞ」

『なにかな？』

「俺の創った物を知っているようだが真似しようとしないうが身のためだ、なまじ人間が真似出来るような物はない」

俺自身が使うことを前提にしたのが殆どだ。それを人間が使うなんて自殺行為に等しい。

『ご忠告ありがとうございます。安心したまえ、君の工学技術はこの世界では解明しきれない。無論、私でもね』

「ドクターでさえも…！？」

『？』とかかれたちっさい奴が驚愕の顔をしている。

『そのとおりだよチンク、だからこの私さえも解明出来ない技術を持っている彼を心から尊敬しているのだよ』

チンク、確かどこぞの言葉で数字を意味していたな。　てことは他の奴らもプレートに刻まれている文字が名前だな。

てことはさっきのは『？』だから――

ノーヴエ、か。

『君は『アルハザード』の技術に一番近い工学技術を有している。どうか？ 私にその知識を分けてくれないかね、その分相応なお礼は用意するよ』

「断る」

「うわお、即答っすね……」

当たり前だ、ただでさえオーバーテクノロジーの技術や知識を与えるなんて馬鹿な事はしない。世界の均衡に傾きが出るからな。

しかしアルハザード？ アラブの魔術師アブドウル・アルハザードとは違うのか？ 高町達に聞いてみるか。とその前に確認してくか。

「なあスカリエツティと言ったな」

『そうだよ、なにかな？』

「『地獄門』……知ってるよな、この世界にあるのか？」

『悪魔を喚び出す建造物だったかい？ 残念ながらないね』

「そうか、ならいい」

それだけ確認できればいい。俺は話を強制的に終了し、その場をさろつと踵を返す。

「……結界、まだ消えてないんだな」

今だ切り替えられた世界を見遣り、俺はケルベロスに話しかける。

「ケルベロス、結界解けよ」

【すまぬ、忘れていた……】

ケルベロスが応えるとパリン、と巨大な音を出しながら元の世界に戻る。

「お前ら今度あった時に捕まえるからな？」

そう言い捨て俺は機動六課の宿舎に戻る為、暗くなった街中を歩く。

ああここまで遅くなる予定はなかったんだがなあ、高町達にどやされるな……。

第十四話（後書き）

すいません…随分と間を空けてしまいましたorz

第十五話（前書き）

誤字修正しましたw 報告してくださったかたありがとうございます！

第十五話

ケルベロスを手に入れ、六課宿舎に戻った暁。

戻った時には白い悪魔、黒い死神、茶色のチビタヌキがオーラを纏い暁を迎えた。

理由はあの強盗事件がテレビで放送されていたらしく、それを六課メンバーが見ていたということではあるが、暁は理由は知らずとも雰囲気で危険を察知し、即座に逃げ出し闇夜のリアル鬼ごっこが開始された。

結果、暁が逃げ切ったとのことだがそれはまた別の話し。

*

次の日、暁は六課の宿舎内を歩きダンテを探していた。

すると食堂のテーブル群の一面を占領し大小様々な数ある部品を広げて作業している姿を見つけた。同じ食堂にいた局員がその様子を遠くでチラチラと気にしていたがダンテの風貌であまり見ることはできなかった。

近づいて見るとダンテは愛銃を分解してメンテナンスしているところだった。

「おいダンテ、久々に一手やるか？」

それもお構い無しに暁はダンテに模擬戦を申し込んだ。

「…なに？」

作業していた手を止め、ダンテは嫌そうな表情を暁に向けた。

「いや、久しくお前とやってないからな」

「なんで俺がやらなきゃならないんだよ、やりたきゃ坊やとやれよ」

同じ悪魔の力を持つネロに頼めよと言うが暁はその案を却下した。

「ネロはヴィヴィオに捕まってるから無理だ」

というか押し付けてきたと言わんばかりに暗い笑みを浮かべた。

「じゃあ嬢ちゃんと」

「エルムは八神とコスプレ談議。入り込む余地と巻き込まれたくないからノー」

次の候補を出そうとしたが最後まで言わずに言葉を上乘せする。

「……それが本音だろ」

「ああ」

「断言すんなよ……そういう訳でも見ての通り俺は今忙しいんだ、

他を当たれよ」

そついいながら再び作業を開始するダンテ、そこに暁からダンテにとつて至高の誘惑が放たれる。

「ピザでどうだ？」

「……」

その言葉に再び作業する手を止める。

「シンプルイズベスト、モッツアレラを使ったマルゲリータピザ……しかも市販されてないビックサイズ、魔術で一気に焼き上げるからサクサクとしたドウにとろりととろけるモッツアレラ……その上フレッシュトマトのソース、その一体感が味わえる俺特製マルゲリータピザでどうだ？ 今ならトリッシュやレディさんがいないから邪魔はされない」

「……………」

ダンテの頭には直径1Mはありそうな巨大なピザが思い描かれていた。

元の世界じゃ相方と仕事仲間に邪魔されピザなんて滅多に食えない。しかし暁の言う通り今その二人が居ないというのは心置きなくピザを頬張れるチャンスなのだ。

というか料理に魔術使うなよ。

「ストロベリーサンデーは付くんだろっな？」

そこに追加条件を挙げる。

「オーケー、デザートとしてダブルサイズというおまけつきで出そう」

「そこまで言うならしかたねえな、良いぜ付き合ってやるよ」

やはり面倒より食欲をとった伝説の魔剣士の息子であった。

*

「模擬戦……ですか？ 神崎さんとダンテさんが？」

上の許可をもらいに隊長陣を探していると書類を抱えたフェイトと出くわした。 ちようど良いと思いフェイトに許可をもらおうと話しかけた。

「ああ、だから空間シミュレーションの設備を借りたいんだ。いいか？」

「ダメっていう訳じゃないんですけど。 わたしだけじゃなんとも言えなくて、ちよつとなのはやはやてに聞いて見ますね」

「頼むよ」

「……………」

するとフェイトは黙り込みなにやらうつん顔していた。

「……………。お待たせしました、結果からいうと使用許可は出ました」

「お、サンキュー」

許可が下りたことにより暁は若干心を躍らせた。

「そして、その模擬戦はフォワード達や他の隊長、副隊長陣も観戦するようです」

隊長陣と聞き暁の脳裏にあるちび狸の姿が過ぎった。

「…………八神は取り込み中じゃなかったのか？」

「なんか『今から談議が最高潮に達するところやったがそつちの方が気になるな』とか言っていました……。何なのかはおよそ見当付きませんが」

エルムの法衣にはやてのマニアック魂に火が着きシャルを交えて談議に入ったはずだ。だから巻き込まれないようにダンテに模擬戦を申し入れたのだ。

「…………悪い、その話し身内も絡んでる。じゃあ許可も出たことだし向かうとするか」

これで心置きなくやれると思い踵を返す。

「そうそう」

「？」

途中でなにかを思い出した暁は立ち止まりフェイトに再び顔を向ける。

「エリオとキャラロには注意しとけよ、あの歳の奴に俺達の闘い見せると悪影響与える可能性あるからな」

「え、それってどういう……」

「ダンテの言葉を借りるならR指定だからさ」

再び歩を進め手をヒラヒラさせながら空間シミュレータへと向かう。

「———そーいや俺の工房に繋がるのかな？」

道中、暁はなにもない空間に手を延ばすとその腕が途中から見えなくなった。

「お、接続は出来た」
リンク

そこから暁はなにかを探すように腕を動かしていた。

「よっ」

とりあえず触れた物を手にし取り出す。

バチバチ——

プラズマを放ちながら取り出したのは鎌状の魔具。魔剣スパー
ダの持つ形態のプロトタイプとして作った魔具だ。

「出来た…」

平行世界であるにも関わらず自分の工房に接続出来たことに暁は
新たな疑問が出来た。しかし頭を振り、結論づける情報が無いため
この件を保留した。

*

空間シミュレーター

空間設定は平野。遮るものが無いスタンダードな設定。

「アキラ、俺達の戦いをガキや嬢ちゃん達に見せるのは教育上マ
ズじゃないか？」

リベリオンを担ぎながら頭をポリポリかく。

「一応忠告はしたからその時は大丈夫だろ」

対してアネモネではなくクラウド・ソラスを展開している暁。

「んで？ ルールは？」

「いつも通り、倒れるまで」

「オーケー、約束のブツ……忘れんなよ？」

「オーライ、回復したら直ぐさま取り掛かるう。八神、合図を頼む」

『了解や、では——』

二人の間にはやてが映し出されたウィンドウがでてきて――

『始め!!』

開始を放った。

「ハアアアッ！」

先に動いたのは暁だった。

脇構えに構え上体を低くしダンテとの間合いを詰める。

「ほお、前よりか速くなったじゃないか」

対するダンテは余裕の表情を浮かべていた。

暁の繰り出す斬撃を難無く避ける。避けるときにクラウ・ソラスの風切り音が鼓膜を刺激した。

「んじゃま、一丁揉んでやるか」

不敵な笑みを浮かべダンテは担いだリベリオンをそのまま暁に振り下ろした。

暁も直ぐさま斬り返す。

クラウド・ソラスの魔力で形成された刃とリベリオンの刃が擦れ小さな火花を咲かせた。

「力も上がってきたしそろそろ『あの戦い』で失った力が戻ってきたんじゃないか？」

「『アレ』から悪魔と戦ってきたからな大分戻ってきたと思う」

「そうかい、ならこちらもう少し本気で行こうか？」

「出来ればしないで貰いたい……、絶対タダじゃ済まなくなる」

暁はダンテの本来のやり方を思い出し制止した。

模擬戦とは言え、本来なら悪魔同士の戦いだ。

暁はともかくダンテが周りの被害を考えて加減する器用さは持ち合わせてはいない、話し合うより行動。それがダンテだ。要は深く考えない。

「ハアアア！」

間合いを離れたダンテが剣を引き、腰を落し低く構えた。

「<ラウンド・トリップ>!!」

リベリオンに回転を加えて投げる父、スパード直伝の技。魔力で操作して投げているため一時的に滞空し、その場で回転しつづけるのだ。

「<アイシクル>!!」

それに対して暁は魔術による物理的障壁を出し弾く。

「まだまだ!」

ダンテは無手の状態で瞬時にギルガメスに持ち替えつつ、トリックスターにスタイル変更し暁に肉薄。クラウド・ソラスを弾く。

「ち…!!」

暁は舌打ちし相棒の一つ、アグニとルドラをデバイス化し魔力を送る。撃ち放つのではなく形成するために。

ルドラで形成したそれをダンテに向かって薙ぎ払う。

「おっと」

しかしその予想外な一撃もダンテは難無く避ける。

よくみると双銃の銃口から己を表す色と同色の魔力刃が現れていた。

『それ』を観戦していたある人物は驚愕した。

『あれはクロスミラージュの…！？』

『形は違うが銃での近接戦闘形態だな。よくみとけよティアナ、今のあいつの戦闘技術…盗めるだけ盗め』

『はい！』

自分と同じ双銃での戦闘、しかも同じダガーモードによる戦闘。

ティアナにとってこれは思ってみない状況、ある意味この模擬戦を見学出来たのは自分にとってプラスになる。

「珍しいな、アキラ」

ダンテは物珍しい目を暁に向けてそう言い放った。

「ちょいと思入れがあってね、少しこれでやらせてもらっよ」

暁は自らの工房に接続し、歪んだ空間に両脚を通す。

空間を通り過ぎると両の脚には銀色に輝くレガースが装備されていた。

「お、『接続』はできるのか」

「ついさっき出来るようになったけどな」

暁は自分の後方に工房を接続させる。

すると空間の歪みが六つ現れそこから何かが見えていた。

「射出―ファイアー―!!」

暁の言葉を皮切りに、歪んだ空間からでていた物体がダンテの足元に放たれた。

ダンテは避けるまでもなくギルガメスで弾く。

弾かれたそれはそれぞれ微妙にデザインが違うが細身の剣だ。

「セアアツ―!!」

今度は暁がダンテに近付き回し蹴りを見舞う。

「ハアツ―!!」

ダンテも同じ回し蹴りで対抗する。

鈍い音をたてながらお互い反動で弾かれ――

「おお、つと」

弾かれた勢いで後ろに下がる。

「取り出すんじゃないくてそのまま射出か……」

ダンテが言葉を発するが。

「両手が塞がっている状態にや最適だな」

視線の先には双銃を構えている暁の姿。

それを見て自身も二つの相棒を取り出す。 射――！！

二人の相棒による牙が相手を穿たんと数多の数を放つ。

ある弾は弾かれ地面に穴を空け、ある弾は相手をかすり傷を作るもののダメージは少ない。

しかしお互いの放つ連射速度は常識を逸していた。

まるで両手でマシンガンを撃ち放ってるかのような連射速度……

否、マシンガン以上の連射速度を行って居るのだ。

見る見るうちに二人の周りの地面が草原の緑から焼け野原のような茶色に姿に変えていた。

*

「な、なんちゅう速度や……」

「あんなに速く連射してたら銃が耐えられなくなってしまいますよ！？」

通常、そこまでの連射を一般の銃で行ったら部品や銃口が耐え切れなくなり最悪爆発する、なんてことも有り得る。

しかしそれは『通常』、『一般』での話だ。

「まあ暁ちゃんの銃は当たり前だけどダンテの銃も自分仕様カスタマイズしてるからその辺は大丈夫よ」

同じく観戦側にいたエルムがティアナの心配を杞憂だとする。

ダンテの銃は昔、とある知り合いに依頼し独自のカスタマイズを加えているため他の銃を凌駕する性能を誇っている。

暁の銃はデザートイーグルを基にしているがその弱点補うために全体的に改良、弾倉を改造し回路を作り、フレームや威力の強化をしている。

姿はデザートイーグルではあるがその実は全く別の銃となっている。

その事実を皆に話したところ、一様に呆然としていた。

「……有り得ないな」

「そうだねえ……」

「まあ私含め、悪魔の血を引くものは大概そんな感じよ？」

率直な感想を述べたシグナムとなのはにエルムは苦笑いを浮かべていた。

「それにしても剣、銃、体術、魔法…あ、魔術っていったね。

それに優れた工学技術……神崎さんってなんでも出来るんだね」

「工学技術はただ単に好きだからよ。まあ変な物も造るけど、『世界で一番強い『ハリセン』を創る!!』とか豪語してホントに創ったり」

ビク——ッ!!

『ハリセン』という言葉を目にした被害者はまるで条件反射のようになんて後退りした。

「……なるほど貴方達が餌食になったのね」

後退りしたメンバーを見ながら憐れんだ。

「それはそうとはやてちゃん？」

「な、なんや？」

「……動揺しなくていいから。さっきいたはやてちゃんの部屋のデスクにあったカレンダーになんか予定らしいメモ書きが今日の日付にあったのだけど……なにかあるの？」

ピタッ——

「ザ・ワールド……かな？」

動きを止めた六課メンバー。そして時は動き出す。

「あああゝ!!? 忘れとったわあ——!!」

「今日って確か取材が来る予定だったよね!？」

「そうだよね!？ もう来ちゃうかも知れないよ!？」

『はやてちゃん!！』

隊長陣が慌てているとリインフォース?から通信が入る。

「なんやリイン、まさかもう取材の人達が来たんか!？」

『そのまさかですよ! いまどこにいるんですかあ!？』

「今空間シミュレータや! 今から行くから取材の人達に待ってもらおうように伝えてちょうだいな!！」

『はいですう!！!』

それから空間シミュレータ内では慌ただしくなり、宿舎へ戻る為迅速に行動を開始したのであった。

第十六話（前書き）

今回話しが短いです。

第十六話

はやてから模擬戦中止の連絡を受け、二人は些かすつきりしないまま皆と宿舎へと戻った。

「取材？ 六課の何を取材するんだ？」

とりあえず食堂で例の約束を行っていると、何やら話しに上がっていた内容を近くにいたヴァイスに意味を聞いた。

「ほら、うちは女性陣が美人ばかり居るじゃないか。その上部隊長の八神部隊長、執務官のフェイト隊長、管理局のエース・オブ・エースの高町隊長どれも局内で人気が高い美人揃い。話題にならないほうがおかしいってもんよ！」

「なるほどねえ」

ヴァイスと話しをしながら暁はドウと呼ばれるピザの土台となる生地をこねていた。

「まあ民間協力者とはいえ、異世界から来た俺達は取材班の前に出ないほうがいいな。本来ならここには居ないはずだし」

「それは八神部隊長が決めるから良いとして、お前さん。一体何してんだ？」

「みてわからないかヴァイス。生地を作ってたんだよ」

「なんらかの生地だったのはわかってるが……、かなりでかくないか？」

生地を円く広げる作業を見てその大きさに思わず口をだしてしまっ
った。

「ダンテと約束した特注品だ。残りは裏の方でやるから食堂の
小さいテーブルを一台運んでくれ」

「そのくらい別に構わないが…旦那はそれ食いきれるのか？」

ザツと目算したら軽く直径一メートルは越えて居そうなそんな特大
サイズの生地だ。焼き上がり時には多少縮むとはいえ、まさに
特注だ。

「あいつは食うときはかなり食うからな、その時はスバルやエリ
オとタメ張れるぞ」

「……やべえ、聞いただけで胃がもたれそう」

その光景を想像しヴァイスは胃から込み上げて来るものを感じた。

「そういえばそれを焼き上げるための窯なんてないが…どう焼き
上げるんだ？」

「魔術」

「おいこら、待てやそこな旦那」

サラッと発言した暁にヴァイスが突っ込む。

「釜戸が無いんだから仕方ないだろ。安心しろ悪魔の力使って隔絶結界張るから魔力感知は無いはずだ。多分」

「何最後の方自信なさげにいつてんだよ！ しかも宿舎の敷地内で結界使っなよ！」

「気にするなつて。オバチャントマト何個か貰うよ」

「はいよ」

厨房にいた恰幅のいいおばちゃんの手承を得て暁は手頃な大きさのトマトを何個か手にし――

「よっ」

ボウツ――

軽く放り上げ火の魔術を使い、器用にヘタと皮を焦がす。

「…ホントに料理に使ったよ、結界も張らずに…。しかし器用な事するなあ」

「ガスでやるよりか確実に速いからな」

焦げ付いたトマトを水の張ったボウルにいれ焦げたヘタと皮を取り除く。

「ホント器用な事しますね神崎さん」

「ん？」

不意に聞こえた高い声に主を確認しようと顔を上げた。すると何かを発見したかのような表情をしたのはがいた。

「高町か」

「高町隊長、お疲れさまですー!!」

やはり上下関係がある組織、上が現れたら敬礼で挨拶をするヴァイス。

「公の場じゃないからそんな畏まらなくてもいいよ。それにしてもそこまで器用に扱える様になるには緻密な演算が必要になるのに……」

この世界の魔力行使はデハイスの演算による補助が必要となるが暁の世界での魔力行使は根本的に異なるのだ。

「俺の世界には『概念』なる物を理解する必要があるからな、こればかりは世界の違いとして割り切るしかない。それよりどうした？ 取材が来てるんだろ？」

「あ、そうそう、そのことについて何ですが……、ヴィオラってアイドル、知ってますよね？ なんか神崎さんの事探してるみたいですよ」

「……ヴィオラが来てるのか？ なんで？」

「今日の六課の取材をヴィオラちゃんがやってて…、一通り終ったんですが神崎さんの事を探してるみたいなんです、ロビーで待っててもらってますが……何かしました？」

トップアイドルの一人が一人の男性を探している。真相はともかくその事実を聞いた男性局員の視線に敵意が混ざり睨に向けられる。

その視線には無視することを良しとし、彼女の自分を探すという理由がわからないまま作業を止めエプロン姿のまま厨房からでた。

「いや、先日事件に巻き込まれてた所を手を出したぐらいだ、…礼はいらないって言ったはずなんだけどな。オバチャン、トマト冷蔵庫に仕舞っというて」

厨房のオバチャンにやりかけのトマトをお願いして。

*

宿舎・ロビー

「あ」

高町と暁がロビーに行くと先日会った顔が二人を見つけた。正確には暁を、だが。

「よおヴィオラ、まずは六課の取材お疲れ様」

「ありがとうございます」

「それで？ 俺を探しているとの事なんだが…礼なら道を教えてもらったからチャラなんだが？」

「いえ、それでは私の気が収まりません。それで今日神崎さんの事を探してたのはこれを渡す為です」

「これは…チケットの様だがヴィオラのライブかなんか？」

よく見るとチケットにはコンサートと書かれていた。

「はい、神崎さんには是非。私の歌を聞いてもらいたいのので、絶対来て下さいね？」

日付を見るとコンサートは六日後の様だ。

この日は特にはやてからなにも言われてないのを思い出し、特にこれといった予定はない。

前にテレビから流れる歌声を聞いた時は何か惹かれるモノを感じた。

それ以前に断る理由がない。ふとなのはの方を見ると『笑顔』の表情を浮かべていた。

その表情を問題無し、と受け取った暁はヴィオラに了承の意で応

えた。……後ろで笑みを浮かべつつづけている白い悪魔に気づかないまま。

「良かったわね、ヴィオラ」

「はい、ありがとうございますアイリさん！」

後ろで控えていたアイリが嬉しそうなヴィオラに笑顔で言った。

「では当日お越しの際は関係者にそのチケットをお見せ下さい。スタッフには話を通しておきますので」

「了解した。けどどのくらい前までに来てれば大丈夫なんだ？」

「そうですね…大体一時間ぐらい前までですね」

まあ、そのくらいが妥当だろう。と暁自身も納得する時間だ。

「あのお…一ついいですか？」

おず…と手を挙げるヴィオラ。

「どうした？」

その意味が分からず先を促す。

「なぜにエプロン姿なんですか？」

「ん？ ああ、今厨房借りてピザ作ってたから」

「ピザ…ですか？」

意外なのかヴィオラはきょとんとして暁に聞き返していた。

「…食いたいのか？」

「え？」

「別にいいよな？ 高町」

「はい。 とうか最後に食堂の取材があるんですよ。 そこで食事して取材終了なんです」

「ああ、 だから食堂のスタッフが慌ただしかったのか」

さながら戦場と比喻するのが正しいかのようなスタッフの数と慌ただしさを思い出し、苦笑する。 自身も昔は某有名なレストランの依頼で厨房に立った時期があったので思い出したのだろう。

「悪い高町、あと任せた。 厨房に戻るわ」

そういつて暁は身を翻しスタッフの手伝いをするため厨房に戻っていった。

第十七話（前書き）

いやはや、早いもので投稿開始から一年が立とうとしています。
これも一重に読んでくださる読者様あつての賜物、今年も残すと
ころ僅かになつてきましたがよろしく願ひします。

m (——) m

第十七話

「すげー……」

ヴィオラから貰ったコンサートチケット。 当日そのコンサート会場に向かつてみると――

人。

人人。

人人人。

人人人人人人人人人人人人人人人人。

――という人の集団でできた塊が遠くからも分かるようにうごめいていたのを見て暁は絶句した。

「にやは……」

同行としてついて来たのはもあまりの人だけに開いた口が塞がらない状態だった。

ヴィオラから直々にチケットを貰ったという噂が男性局員の間で瞬く間に広がり、暁から略奪しようとしてありとあらゆる手を駆使したが鬱陶しく感じた暁がリーサルウェポンを取り出し鎮圧した。

特に主犯格のヴァイスには暁直々によってフルボッコにされそのうえではやてに突き出された。 途中クロノとかいう高階級の者も

居たが例に漏れずフルボッコにしたという。　はやての上司でフェイトの兄だと言っていたが共犯は共犯。

男の嫉妬から暴挙に出たようだが悪魔とマッドの力を持った暁には到底敵うはずもなくただの人間による人海戦術は無意味に散った。

「別にレリック関係じゃないんだし、高町まで来なくてもよかったんじゃないのか？」

今のミッドチルダを代表するトップアイドルだ、ロストロギアとの関係が無きに等しいはず。　ロストロギア、主にレリックを専門とする六課の隊長が来る必要は無いように思える。

そもそも、仕事はどうした？

「大丈夫ですよ。　特別急ぐような仕事は無いですしレリックやガジェット達も最近現れてないですね。　それに実を言うと私、ヴィオラちゃんのファンなんですすよね」

これには驚いた、あまり興味がなさそうに見えたのはがヴィオラのファンだという。

ちなみにヴィヴィオが着いていききたいと駄々をこねたがネロに押し付けておいた、ネロって意外と面倒見が良いからなキリエちゃんと孤児の面倒みてたりするから扱いがちゃんとできるんだろっとな。文句を言いながらも引き受けてくれた。

しばらく歩いていると人ばかりから歓声が上がった。

二人はその歓声の先を見る。

会場に向かっていく高級車、それが意味することはヴィオラが乗っているであろうからだ。

そんな考えからその高級車に歓声をあげながら群がる男女（およそ8：2の割合で）。

「通常に考えたら困なんだろうけどな」

「神崎さん、わかるんですか？」

「昔、元の世界でそっちのアルバイトしてたからな」

「へえ」

「一例だが有名人が来る〃高級車で、というイメージが一般的に植え付けられているからそれを逆手にとって乗用車で行けば安全に会場に入り込める。例えば……あのワゴンとかな」

反対側の数十メートル後ろに離れた路肩に駐車している白いワゴンを指す。するとワゴン車のドアが開き、スーツを着た女性が降りてきた。

「あ、誰か降りてきた」

「あ…アイリさんだ」

降りてきた人物を確認するとそれはヴィオラのマネージャーを勤めるアイリだった。

「……なんか手招きしてますね？」

「『こい』って事だろ？」

とりあえず手招きされるままに反対側に渡りワゴンに乗り込む。

「……ほんとに神崎さんの言う通りでしたね」

「だろ？」

「なにがですか？」

ワゴン車に乗り込むと運転手とアイリ、暁の言う通りヴィオラが居た。なにやら固まっているようだが。

「さっき向かって行った高級車が囲ってこと」

「あ、バレバレでしたか」

「俺も昔アルバイトしてたからな」

「なるほど。ほらヴィオラ、ちゃんと挨拶……って」

「高町さんと一緒に…高町さんと一緒に…高町さんと一緒に…高町さんと（ry）」

文字だから何言っているのか分かるものの、実際は消え入るような細かい声で呟いているため、四人には何言っているか聞こえない。

しかしその表情は絶望した！！と言うよりか信じられないといっ

た表情で青ざめていた。

「おーい、どした？」

「…はっ、私は一体？」

帰ってこれたようなのでアイリが息を吐く。

「はあ…。ヴィオラ、神崎さんがいらしたんだから挨拶しなさい」

「あ、はい。おはようございま——ってえええッ！？なんで神崎さんが目の前にい！？」

車内に響く悲鳴……悲鳴か？

キィ——ン

狭い密室だ、ヴィオラの声が全員の鼓膜に被害を及ぼす。ちょうどその横を歩いていたサラリーマンの男性が驚いて持っていた鞆を落とすと言うリアクションがあった。

「いっつう…」

「いきなり何なんだ…」

「あうあう、ごめんなさい…」

我に返ったヴィオラが一先ず謝罪した。

運転手はいきなりの攻（口）撃に成す統べなく身に受け口からプ

ラズマが出ていた。

「ははあ、ヴィオラ。まさか神崎さんの事、好きになったんじゃないの？」

ピク――

いつの間にか装備していた耳栓を外し、小声でヴィオラに耳打ちするアイリ。すると見る見るうちにヴィオラが茹蛸のように真っ赤になっていく。

どういうわけかこう言った内容では驚異の聴力を発揮するのは、ヴィオラとは対照的に笑顔から闇の笑顔に切り替わった。

管理局の白い悪魔、降臨。

ぶるる――

「…なんだ？」

我が身に襲う寒気、悪魔が現れるときとは違う寒気に暁は警戒する。実際は悪魔違いだが。

「あら？ お二人方どうかしました？」

違和感を感じたアイリが暁となのはに問う。片方は険しい表情だがもう片方は笑顔なのに笑顔ではない。

「いえ、なんでもアリマセンヨ？」

暁に代わりなのはが応えたのだが最後の方が何故か片言なのだが誰も気づかなかった。

*

「じゃあん!!」

「「おー」」

特に問題無く会場に入った二人は特別待合室に通された。

それから数十分後、その特別待合室にコンサート衣装を身に纏ったヴィオラが現れた。

緑系の衣装に統一された外観がヴィオラ自身のピンクの髪が一際印象的だった。

「いやホント、本物のアイドルみたいだな」

「いやいや、私一応トップアイドルの一人ですが…、ところで？」

「ん？」

話を変え、ヴィオラら暁達の向かい側の椅子に座る。些か表情が真剣だ。

「お二人ってどういう関係なんですか？」

「え」

ヴィオラの質問に顔が茹蛸のように真っ赤になっていくのは。

「赤くなる要素あるか？ 仕事上の奴で協力関係にある仲さ」

「そう、ですか？」

ちらりとなのはを見るヴィオラ、何やら影が指したような表情が浮かんでいた。

「（以前士郎さんからよろしく頼むと言われてたから…それを思い出したのか？）」

心当たりある出来事が思い浮かびなのはの赤くなった原因を推測する。

「（以前お父さんが言ってた言葉を思い出しちゃった……、どうしよう顔真っ赤だよ）」

しかし暗い影が見えたのは一瞬、だがヴィオラが確認するには十分な一瞬だった。

「（あの反応は高町さんも神崎さんが好きなのかなあ）」

ヴィオラがそんな事を考えているとコンコン、と扉を叩く音が聞こえた。その後扉が開かれ叩いた人物が姿を表した。

「ヴィオラ、そろそろ時間よ」

「あ、わかりました。それじゃ神崎さん、高町さん楽しんでいて下さいね」

椅子から立つとぺこりと頭を下げ、笑顔を見せながら部屋から出て行った。出て行ったヴィオラの後ろを付く様にアイリも出て行った。

「ではお二人方、会場の方に案内します」

別のスタッフが二人を会場の方に案内しようと促す、が暁は一つお願いをする。

「出来たら会場ではなく舞台袖の方でお願いできますか？」

「それは私一人では判断できかねますね。…ですがアイリさんから許可が出ればそれも可能かと思えます、聞いてきますか？」

「はい、お願いします」

「わかりました、では聞いてきますのでここでもうしばらくお待ち下さい」

そういうとスタッフはその場から離れ、アイリを追った。

「神崎さん、なんで舞台袖なんですか？ 会場の方が良いんじゃない？」

「いやな？ ヴィオラから貰ったチケットの事をすこし調べてみたんだが、これファンクラブ限定のチケットらしいんだ」

「ふ、ファンクラブ…？」

「んでそこから連想出来るのが、会場に案内されその場に行く↓
コンサート開始↓ファンクラブの奴らが騒ぎ出す。そんな中で純
粋にヴィオラの歌声を聞けるわけが無い」

「だから舞台袖をお願いしたんですね」

「そゆこと」

アイドルのコンサートであるからこそ熱狂的に騒ぎ出すファンク
ラブの人達。それがトップアイドルのとなればその熱狂ぶりは計り
知れない。

だからこそ純粋にヴィオラの歌声を聞いてみたい暁は失礼と思い
ながらも舞台袖をお願いしたのだ。

果たして暁の要望は聞き入れてもらえるだろうか。

第十八話（前書き）

遅くなりましたが明けましておめでとうございます。今年最初の投稿になります。

さて前回かなり……経ちましたね、はい……楽しみにしていた
だいた方々、申し訳ありませんでした。

前話に引き続きライブの話になります。

それでは今年もよろしく願います!!

第十八話

「神崎さん達が？」

スタッフの一人が二人を追い、暁の言うお願いを話した。

「どういうこと？」

意味がわからないといった感じでアイリが聞き返す。

「いえ、詳しくは言ってますでしたが…」

かくいうスタッフも暁に言われたお願いのためその本意がわからないでいた。

「そう……。ん、ちょっとまって？」

そこで思い出してみた、確か機動六課の取材の時にヴィオラが暁に渡したチケット。あれは一般用として販売してるチケットではなかった。

「ねえヴィオラ神崎さんに渡したチケットって確か」

その事実を確かめようとヴィオラに確認をとる。

「はい、ファンクラブ限定のチケットですが。それがなにか？」

さも当然の様に返すヴィオラ。その答えによりアイリは暁の本意の一つにたどり着いた。

「ああ……なるほどね。　良いわ、神崎さん達を連れて来て。念のためスタッフカードをかけるようにね」

恐らくアレを懸念してとのことだろうと思いスタッフに指示を出した。

「わかりました」

「……アイリさんなにか問題があるんですか？」

離れていくスタッフを見て自分はやらかしてしまったのかと心配する。

「あのねヴィオラ、最近のファンクラブの人達って盛り上がり方がハンパないじゃない？　そんな中であなたの歌声なんて聴いてられる？」

自分が行き着いた暁の本意をヴィオラに説明する。

「……………確かに」

「でしょ？」

ステージ上からみるファンクラブの人達の盛り上がり方、熱狂ぶり。　どれも最近になってから過激的になってきている、それを思い浮かべその輪に暁やなのはを入れてみる。　二人が浮いてるのが容易に想像できた。

だからこそヴィオラは苦笑いを浮かべた。

「さて、そろそろ時間ねヴィオラ。　いつてらっしゃい」

「はい、いつてきます!」

*

「アイリさん」

「あ、いらっしゃい神崎さん、高町さん。　スタッフカードは…
…受け取ってますね」

ヴィオラがステージで幕が開くるのを待つて居る時二人が現れた。

アイリは二人が首から下げてるケースを見て確認をとる。

「申し訳ありません、ヴィオラがよかれと思ってファンクラブ限定のチケット渡しちゃって」

「いえ、ヴィオラの厚意を無にするようなお願いしてしまったのは俺ですから謝らないでください。　こちら申し訳ないとも思いますが出来る限り気楽にヴィオラの歌を聞きたいので」

やはり自分が行き着いた答えと同じだ。とアイリは思った。

「そう。　さっきもヴィオラとも話したのでそこはわかってると思います」

すると会場から開演ブザーが鳴ると地面を揺るがさんばかりの喚声が響く。

『みんなあ、今日は来てくれてありがとう!!』

舞台に現れたヴィオラが集まった観客達の前で出だしの挨拶をした。こんなところも共通してゐるな。

「ヴィオラちゃ——ん!!」

「愛してる——!!」

「ん?」

恐らくファンクラブのメンバーらしい人物がヴィオラに向けて愛を叫んだ。しかしどこかで聞いた様な声だな。なんか高町と反応が被った。

「やっぱり今日もか……」

アイリさんはなんか頭抱えている。

「高町、今の『愛してる』って声聞こえた?」

「神崎さんも聞こえました? それに『ヴィオラちゃん』って声も……確かにあれは……」

念のため高町に確認をしてみるがやはり聞いたことがあるらしい。い。

そこで目立たぬよう観客達を二人で覗いて見ると——

「……………居た」

「ヴィオラちゃ——ん！！ ゴルア貴様あ、声が小さい！！
そんな声でファンクラブが務まると思っっているのかああっ！！」

「イエスサー！！ 申し訳ありませんクロノ会長兼親衛隊長！！」

「よろしい！ いいかヴァイス親衛隊員、俺達はファンクラブの
中でも有能なる者を集めた親衛隊だ！！ 他の者もその誇りを忘れ
るな！！」

「……サー、イエスサー！！」

観客達の最前列、丁度ステージの真ん前に出来ているピンクの法
被を着ている集団……そこには六課で見知った人物と以前俺に襲撃
し返り討ちにした人物がいた。

あの二人が親衛隊員かよ。

通りである時、あの二人だけ目の色が違ってた訳か。

「……………とりあえず黙らせるか」

なにやら黙らした方が良さそうな気がしてきてアグニをデバイス
化する。

「か、神崎さんデバイス出しちゃダメえ……！？」

しかし高町に腕を抱き掴まれ阻まれる。

「良いのか、あれ？」

返り討ちにはしたけど意趣返ししようとしたんだが……。

「良くはないけどダメえ……!？」

そこまで必死にならなくても良いと思うんだが。

「ん？」

悪魔とは違う違和感を受け、俺は再び観客達を見渡す。

「? どうしたんですか、神崎さん？」

高町は感じなかったようで俺に聞いてきた。

「(いま青タイトの奴の気配がしたような)」

ケルベロスが現れた時にいた青タイト集団を思い出した。

何だつてこんなところに現れるんだ？

……気配はもうしない、恐らくこの場から離脱したか気配を消したか……後者ならまずいな。

こんなところで戦闘なんかされたら洒落にならん。

願わくば何事もなきようにしてもらいたい……。

「あらあらお二人は仲がよろしいんですね」

「ッ!?!」

アイリさんの言葉でバツッと離れる高町。 離れるまでは俺の腕に高町が抱き着いているという構図。

抱き着かれている腕からは高町の豊かな二山の感触が、ね。

『ではまず一曲目いきまあす!~!』

ヴィオラのこの一言で会場は瞬く間に静まり、ヴァイオリンやピアノによる静かなる出だし。

その直後にギターやベースによるアップテンポな演奏。 会場を盛り上げるには最適かと思われるイントロが流れる。

ヴィオラは後ろに居るバックダンサー六人と共にダンスをしながら歌う。 以前六課の食堂で聞いた事はあるがその時とはまるで違う。

生で聞いてみてわかる。 この透き通る歌声は、人々を魅了する。ヴィオラにはそんな力が備わっているアイドルの中のアイドルだ。

「ほえ〜……」

隣の高町も感動しているのか開いた口が塞がらないといった感じだ。

確か高町もヴィオラのファンだ、とか言っていたな。

「如何ですか、あの娘の歌は？」
「いや、もう流石の一言に尽きます。まだ成人してないのに此処までとは……ヴィオラの才能や努力の賜物でしょう。才能だけでは歌で此処まで魅了出来ませんからね」

これは素直に賛辞を言う。

それだけのレベルをヴィオラは持っているのだ。

しかしまあ……

「「「ヴィオラちゃああん！！！」」」

顔見知りの人物を目にしたただただ呆れ、ため息が出る。

本気であいつらを倒した方が良さそうな気がする。

＊

さて、時間は進み昼休みになったわけだが。

「……なんですかこれは？」

俺はなぜかアイリさんからエプロンを差し出されている。

「それがヴィオラが是非とも言つこととして」

前に六課の取材として来たときに料理の腕を振る舞った。その時のヴィオラの表情からは凄い美味そうに食べてたな、作った身としては嬉しいかぎりだ。

だが、それはそれだ。

「仕出し弁当があるじゃないですか」

「え、折角ですから神崎さんの料理食べたいです」

頬を膨らませ駄々をこねるヴィオラ、そこにアイドルという顔は無く年相応の女の子としていた。

「いいじゃないですか神崎さん、作ってあげても」

「お前も食いたいただけだろ、そんな顔したら魂胆バレバレだ」

高町の口元にははしたなくも涎が溢れそうだった。

「……つたく、仕方ない。アイリさんちよっと手伝ってください」

「わかりました」

結局作るしかないと判断しアイリさんに協力を仰ぎ二人で出ていく時、後ろの二人がガッツポーズしている気配を感じた。

昼休みが終わるまであと1時間とすこし、時間はあまりかけてはいられない……。

「ヴィオラは好き嫌いありますか？」

「え？ そうねあの娘、基本的にはよく食べる方だけど……ただどうしても食べれないのがあるんですよ」

……………まさかな。

「あの……まさかとは思いますがニンジンですか？」

「あら、よくわかりましたね？ そうなんですよあの娘好き嫌いなくなんでも食べてたのになぜかニンジンだけはどうしても食べれないんですよ」

やはりニンジンか……。アイツにとことん似てるな。

「さて時間もそんなにないですし、さっさと作りますか」

「そうですね」

*

「「うまあ~~~~い」」

「お褒めに与り光栄」

俺の隣に高町、向かい側にヴィオラとアイリさんと言う構図。

高町とヴィオラが料理を頬張りながら頬を押さえて悦に入ってい

た。

そこから擬音が付くのではないだろうかという食いつきで料理を次々に口に運んでいる。

にも関わらず食い散らかしてはいない。

「あらホント、以前もそうでしたがすごく美味しいです」

流石に褒められると嬉しいな、自然と笑みを浮かべる。

しかしまあよく食うなあ。

アイドルとは言え結局は体が資本なんだろう、流石にエリオやスバルほど食わないが。

いや、あの二人が異常なだけか……。

そう思いながらもドンドン食べていく、作った本人から言えば嬉しいかぎりだ。

「あゝ、美味しかった！ 神崎さんごちそうさまでした！！」

「ごちそうさまでした！」

結局用意した料理を全て平らげたようだ。 俺は「おそまつさま」と返し自身の食事を終えた。

時計を見るとちょうど午後の舞台が始まる15分前だ、なら後片付けは後にして食休みと行きますか。

——といった物の、流石に紅一点ならぬ黒一点。女性の中に男一人というのは会話的に居づらい……エルムが居ればまだマシなんだが。

内容が恋ばなとか…ついていけねえよ。

そんなことを思いつつ苦笑いを浮かべる俺が居た。

第十八話（後書き）

因みにヴィオラが歌っていたのは水樹奈々の『PHANTOM MINDS』です。

ヴィオラのイメージボイスは水樹奈々としていますw

第十九話

午後の部も始まり今はヴィオラのトークタイムとなっている。

俺と高町はアイリさんと共に舞台裏に居る。

「このまま何事も無く終われば良いのにね……」

「え？」

不意にアイリさんが呟いた。高町は聞き取れなかったみたいだが俺ははっきり聞こえた。

「どういうことですか？」

だからこそ俺はその真意を問い質す。

「以前、事務所の社長からヴィオラの周りに不穏な人影があるから気をつけてくれと言われましてね。そのせいか最近やな予感しかしないんですよ」

「まさかストーカー？」

んな単純な訳あるまい。

「いえ、ストーカーの方がまだマシだと私の勘が言ってます」

どついう勘してんだよ。

「ステージに異変や違和感とかはなかったんですか？」

「いえ、その点は断言できるほど問題はないです」

となると、俺の中にある懸念事項…青タイツ軍団だな。

スカリエッティがなんらかのアプローチしてくる可能性も否定出来ない。

しかしこんな民衆の面前でやる意味はただの誇示にしかないからな。

限りなく無い可能性だが。

「ドクター……なにをしてるんですか？」

「なについて見てわからないのかいチンク。 ヴィオラのコンサート
の生放送を見ているんだよ？」

「ピンクの法被を着て鉢巻きまでして……。 まさかドクターが
研究以外に興味を持っているものがあるとは思いませんでした
が……」

「私だって人間だよ。 研究以外にも興味を持っているものだって
一つや二つあるのだよ」

これは、絶対ありえねえ。

仮にそんなことをやってたら管理局だって苦労しねえよ。

『——それで最近の話になりますけど、私銀行強盗に人質にされた事があるんですよ』

ん？ ヴィオラの奴何を話してるんだ？

『ああ、その事件知ってますよテレビでやってたのを見ましたから』

トークの相方である女性が当時の事を思い出しているようだ。

『はい、それでその時私を助けてくれた人が居たんですよ』

『それは勇敢な人ですね。 管理局の方ですか？』

ソイツは俺の事だよな。 高町とアイリさんに顔を向けると二人とも頷いた。

しかしなんでトークタイムにそんな話をするんだ？

『いえ、その方は管理局の人では無いんですが民間協力者として管理局に居るんです。しかも以前私が取材に行った新しい部署の機動六課に居たんですよ』

『あの美人揃いと噂の機動六課にですか？ それは羨ましい出会いじゃないですか』

………なんだこの展開、著しく嫌な予感しかない。

高町を見ると青筋を浮かべている。
管理局の白い悪魔再び、か？

アイリさんは苦笑いしてるし。

『それに今日のコンサートに招待して、来ていただいているんですよ』

『それは展開として嬉しいですね！ 呼んでいただいて良いですか？』

『はい、神崎 暁さんです！』

沸き上がる歓声にどうやらステージに出るしかない空気に覚悟を決めるしかなかった。

舞台袖からステージにでると歓声と拍手が出迎えてくれた。一部からは嫉妬と殺意の入った視線が向けられたが出所はあの集団だ……。

メンドクセエ…。

『貴方が神崎さんですか？ お名前から察すると地球出身のようですが』

スタッフからマイクを受け取り、質問に答える。

『はい、ある案件で民間協力者として管理局の機動六課にいます』

『先ほどの話に出ていましたが彼女が銀行強盗に人質として捕まっていたところを助けた上に事件解決に貢献したようですが経緯はどういったものですか？』

どうしたものかな……。流石に悪魔関連とかは言えないが、事実を話すだけなら良しとしよう。

第十九話

「フッフ、悪魔の力か。これさえあれば」

暗い部屋、人の動きがようやくわかる程度の明かりしかない部屋で男の声が響く。

「悪魔の力が手に入れば私の願いが叶う。そして我々の未来は安泰だ、いかなる時元犯罪でもこの力さえあれば恐れるに足りん！あの男からの情報だと言うから訝しかったがこれは僥倖だ！」

パラ、と紙をめくる音が聞こえる。こんな暗い中で読めるのかと思っぐらい暗い中で何度も紙をめくる音と男の声が部屋の中で反響する。

「いまにみておれ、空の連中よ。精々小娘達の見ておるがいい
！！」

男は一際大きな笑い声を上げながら紙をめくり続けていった。

トークタイムも終了してステージから去った訳だが。

どうもさつきから嫌な感じが体を纏わり付く。

「？ 神崎さんどうかしたんですか？」

恐らく表情も険しいだろうと思う。だからこそ高町が聞いてきた。

『どうもさつきからやな予感がする』

アイリさんが近くに居るから念話をする。すると息を飲むような声が頭に響いた。

『！？ まさか悪魔ですか？』

『可能性はある、だから警戒を怠るな。悪魔の出現にはこの場では俺が一番敏感だ』

悪魔の出現時には独特の寒気を及ぼす。

『高町はアイリさんに避難経路の確認を頼む、悪魔が出て来たら俺が引き受ける。その間に観客を逃がしてくれ』

『わかりました』

ん、いまふと思ったが、ベオウルフはどうやってこの世界に来たかはわからないがケル——ケルベロスの略称——は気がついたらこの世界にいたという。

俺はレリックの内包魔力によってこの世界に飛ばされた。

ダンテとネロはハロを撃ち抜いたらこの世界に来たらしい。

エルムは空間魔石を使い俺を探しにこの世界に来た。

………統一性無いな。

しかもダンテ達がネロを撃ち抜いてこの世界に来たのがおかしい。

俺はレリックというこの世界の接点に触れたから来ているしエルムは俺の魔力を辿り、来ているが……ダンテ達の場合は遥かにかしい。

ハ口だぞ、ガンダムだぞ。

飛ばされたならガンダムの世界だろうに…。

……おっと思考がそれた。

このように全員が別々の方法でこの世界に集まっている。

……この世界になにかあるのか？

それとも『この世界』に喚ばれたのか？

可能性は低いが有り得るな、あのド阿呆ムンドゥスの抑止力として俺達を選んだ事となる。

だがそうなると時計塔で俺に依頼した奴は誰だ？ それにダンテ達にも同じ依頼をした人物が気になる…、ゼルレッチじゃなければ面倒無いんだがな。

……まあそんなことはどうでもいい。

悪魔が出たら狩る。それが俺達デビルハンターだから。

【なあにかっこよく決めようとしてるのかしら？】

自分の中から女性の声が聞こえてきた。

(……ネヴァン。お前ようやく起きたのか？)

【ようやくって、酷い言われようね。『あの戦い』で失った貴方の力を誰が補ったか忘れたのかしら？】

自身の内にいる悪魔、ネヴァン。『あの戦い』で失った魔力を補うために俺の中に居てくれている。

（忘れたわけじゃないが、かなり時間かったな）

【……どのくらいかったかしら？】

（一年ぐらいだな）

フォルトウナの時だからそのくらいだな。

【そ。それより今どこにいるのよ、明らかに魔界でもないみだし空気も違うし】

（並行世界だ）

【は？】

（は？ じゃねえよ、ある事情で元いた世界からこの並行世界にわたってきた。あろうことが悪魔も関わっている）

【ふうん、ま私にはどうでもいい事ね】

ほう、じゃあこのことを聞いても同じことと言えるのかな？

（ムンドウスのド阿呆も関わってるぞ）

【あの死にぞこないが？】

・・・意外にひどいな、ネヴァン。

まあ同感だが。

【あなたもつくづくあいつと縁切れないわねえ、退屈しないでいけどね】

（おまえってそんな性格だったのか？）

【魔界にいたころにはなあんにも面白味がなかったからねえ】

（さいか・・・）

「・・・さん？」

【あら？　かわいい子じゃない】

（？）

「神崎さん？」

声のほうに向くと高町がキョトンとしてこちらを見ていた？

「どうしたんですか？　ぼうつとして」

「いや、ちよつと考え事をな」

【なに、エルムから乗り換えたのかしら？】

（人聞きの悪いことを言うな、あいつとはそんな関係じゃないし彼女は这个世界の住人で協力関係にある仲だ）

【ま、それもどっちでもいいわ。——……ねえアムカディム】

（……ああわかつてる、来やがった）

悪魔出現の予兆である寒気を感じ取る。

「高町、悪魔だ！ 客席に居るヴァイスとフェイトの兄貴に連絡し協力を仰ぎ、他の管理局員と共に観客を誘導しろ！！」

「わかりました！ ヴィオラちゃんは！？」

「ヴィオラ！！」

「俺がやる！」

よりによって悪魔が出現する場所が——

——ヴヴヴヴヴヴ——

ヴィオラの真上かよ——！！

「え、なにッ!？」

「オラアアッ!！」

突如の巨大な羽ばたき音と寒気を感じたヴィオラは縮こまる。

悪魔が空間から出て来ると俺は駆け出し、ヴィオラに落ちて来るその悪魔を前蹴りで蹴飛ばした。

【グギャ!？」

蹴飛ばしたその悪魔は呻き声を上げステージの上を滑っていく。

観客もその異変さに気付く瞬間にパニックになる。観客達は高町達に任せる。

俺はヴィオラを守るように前にでる。

そこでその悪魔が何なのか思い出した。

【アムカディム。あの悪魔、あの時の】

（ああ。わかってる。だがこの力……）

そう、この悪魔はフォルトゥナでダンテがトドメを刺したはずの悪魔。

その上この力、ベオウルフと同じ――。

「テメエもムンドウスに力を与えられたか『アグナス』!！」

第十九話（後書き）

さあさあDMC作品から新たに二人の登場しました。

それと20万ヒット…ありがたい事です、今特別話を考案中です。
恐らくそれが25万ヒット記念の投稿になります。出来たらお楽しみにですw

いやあDMC3の曲はいいですねえ、三ッ宅さあーん!!（空耳）

第二十話（前書き）

テレビ見てると急に現れる緊急地震速報にビクビクする毎日です。
被災された皆様頑張ってください。

第二十話

【ア、ア、アムカディムかかか？】

「なぜ貴様がこの世界にいる？　そして何故ムンドウスの力を受けている」

【そ、それは貴様らに復讐するためだダ】

「なら、そのふざけた口を封じるとしようか」

俺は直ぐさまアグニの銃口をアグナスに向け引き金を引いた。

朱い尾を引いた魔力弾がアグナスの眉間に食らいつかんとするとアグナスは羽ばたきをして上空に浮かんで避けた。

「……ヴィオラ、走ってアイリさんのところにいけ」

アグナスを見詰めながらヴィオラにここから離れるように促す。

「でも、神崎さんは…！？」

「俺はあいつを殺す」

「ッ！？」

発言に驚いたのだろうヴィオラが息を飲んだ。

「これは俺が管理局に協力する理由だ。　いま高町達が観客とス

タッフを誘導しているヴィオラはそれに従え」

「……………わかりました」

ヴィオラは数秒間を開け返事をして、離れて行った。

心配事が一つ減ったので少し息を吐く。

【ねえアムカデム？ 私を使う気はない？】

（ネヴァン？）

【あんな俄仕込みの悪魔の力の癖にね…………、格の違いとやらを見せ付けないといけないわ】

確かにアグナスは知的好奇心から悪魔に手を出した。

人間にしては身に過ぎた力だしムンドウスの力を受けている。引導を渡してやらなければならない。

（わかった、お前の状況も確認しないといけないから使うぞ。不調があればすぐに言えよ）

【そのくらい分かってるわよ】

俺はアグニを待機状態にして胸に手を翳す。

「【Are you ready!?!?】」

雷鳴が轟き光を放つ。

目の前にエレキギターを模した魔具『ネヴァン』が現れた。

俺はそれを手に取ると担ぐように構える。こいつの特性として俺の身体には紫電が迸っていて髪も若干逆立つ。この世界の言葉を使えば魔力変換資質が雷つてとこだ。

「さあエセ悪魔、格の違いって奴を見せてやるよ」

第二十話

「なんやて！？ 新手の悪魔！？」
コンサート会場いるのはから通信を受け驚愕の声をあげるはやて。

『今神崎さんが時間を稼いでくれるの、だからクロノくんとヴァイス他局員でお客様達を誘導してるんだけど人手が足りないの』

「わかった、緊急配備でこっちのメンバーをそっちに行かせるわ」

『ありがとう！――プッー』

なのはとの通信を終えるとはやては六課全体に緊急出動の放送を流す。

『緊急配備連絡や、現地の高町隊長から出動要請！！ スターズ分隊、ライトニング分隊は至急ヘリポートに集合や！！ 繰り返す——』

（……新手の悪魔？ ベオウルフの時と同じこの力、またムンドウスの差し金ね）

はやてと談義していたエルムはなのはとはやてのやり取りを聞いていた。

そして感知した力にエルムの表情は険しくなっていた。

「エルムちゃん、急でわるいんやけど談義はまたの機会でつちゆうことで」

「あ、大丈夫だよはやてちゃん。それでねお願いがあるんだけど」

「なんや？」

「私『達』も連れて行って」

「！？」

エルムが言う『達』っていうのはダンテやネロも言うことだ。その意味をわかったうえではやては驚いた。

伝説の魔剣士スパードの息子、ダンテとその血族ネロ。先のベ
オウルフとの戦いで相手は手負いとはいえ圧倒的な力で倒した事は
記憶に新しいし、模擬戦では暁を上回る実力をダンテは持っている
のだ。

「なんか嫌な予感がするのよ」

「…わかった、ほんならダンテさん達に屋上に来るよう伝えても
ろうてええ？」

「わかったわ」

そういつてエルムは部屋から出る。

（ヴィオラちゃん、董ちゃんに瓜二つだったわね……。勘が外
れてしまえばいいのだけど）

もやもやとした直感を拭えず嫌な予感が胸を支配する。これが
杞憂であれば良いと切に願いながら二人を呼びに向かった。

魔具・ネヴァンを手にした俺は、弦を掻き鳴らしチューンアップ
を行う。

「調子は上々、ムードは最悪。場所はオーケー、観客は悪魔一
匹ってのは癪だが。ワンマンライブ開始だ!!」

一際弦を掻き鳴らすとコウモリが俺の周りに現れた。

どれもホントのコウモリではなく魔力で出来たもので紫電を纏っている。

「Goッ!!」

合図と共に弦を鳴らしコウモリ達に命令を送る。

コウモリ達は列を作りながらアグナスに突進する。

しかしアグナスは飛び回りコウモリの突進から避けていた。

自分自身その攻撃で何とかなるとは思ってもいない。

これはあとの攻撃による布石、だがまだ足りない。

「ドンドン行くぜ!!」

テンポを速め、コウモリの数を増やしていく。

観客の避難も終わってないで使つと余計な犠牲が増えかねない。

出来るのはアイツの注意を俺に集中させ時間を稼ぐこと。 ならその時間稼ぎにこちらの大技を出すための下拵えをせんとな。

アグナスは背中の中にある器官を使い、擬似魔界に閉まってある独自開発した魔剣と鳥を配合した人工悪魔——グラディウスを放ってきた。

飼い主に忠実な意志を持つそれは羽ばたきながらこちらに向かって来る。

こんなの同じ『魔剣』で対抗してやる。

工房にリンクし放つ魔剣を瞬時に選定、射出準備に即座に移行。

大した魔力も込められてない魔剣なんて俺に取ってなまくら並に脆い物だ。

空間を裂いて工房から射出された魔剣はグラディウス達を貫く。

アグナスの動向を気にしながらふと会場を見渡す。

まだ完全に避難は済んでないようだ。

急げよ。

あのふざけた気配を感じるんだ。 アレが来たらここら一帯焼き野原になっちまうからな。

「……またかよ」

エルムに悪魔を感知したという話を聞きダントは頭を抱えた。

「ムンドウスって言ったか？ 随分執着してるな」

「おいおい坊や、人事の様に言ってるがお前も親父の血族なんだから」

「……わかってるよ」

ネロは自信の腕を見つめる。 以前悪魔と対峙した時に負った怪我が原因で異形と化した我が右腕、この腕になった時は神を恨んだ。しかしフォルトゥナで起こった出来事では心の一部では感謝しているのも事実。

力を手に入れ捕らえられた愛する人を助けることができ、決着をつけたのだから。

「感傷に浸るのは良いけど急がないと置いてかれるわよ？」

「だよ」

「…ああ」

三人は己の武具を手にとると部屋を飛び出し、廊下を駆け出た。

第二十一話

「落ち着いて！ 落ち着いて行動してください！！」

暁に言われ観客の避難誘導を手伝うのは、混乱状態の観客が喚き立てる声に負けじと声を上げるが何万人規模の悲鳴がなのは声を掻き消していた。

念話でクロノやヴァイスに協力を仰ぎ離れた場所で誘導をしてもらっている。

しかし自分でこの状況だから二人もきつと同じ状況なのだろうと思った。

「高町隊長！！」

すると自分の名を呼ぶ声が聞こえた、声の出所を見つけようと首を回す。

すると逃げ惑う観客達の波を逆らうように押し避けこちらに向かって来るヴァイスが見えた。

「全然ダメっす！ 観客に対する警備員、局員の数少な過ぎます…！」

言ってる言葉だけみればまともなのだが如何せんヴァイスが着ている法被がその緊張感を見事にぶち壊している。

「…確かに」

なのはは敢えてそこには突っ込まなかった自分を心の中で讃えた。

「あの、隊長」

「なに？」

「アレも悪魔……ですか？」

ヴァイスにつられ空に浮かぶ白い異形をみる。

『悪魔』

その単語を聞いてなのはは以前曉に言われた言葉を思い出した。

『足手まとい』

恐怖に身が竦んでしまったのを思い出し小さく震えた。

時空管理局に身を置き、今やエース・オブ・エースと呼ばれている自分が足手まとい呼ばわりされた。

今更ながら苦虫を噛む思いだ。

管理世界に居る原生生物なら退治に出動したことがあるが、悪魔の恐怖を知った今ならどれだけ原生生物の方が楽かを思い知らされたのだ。

しかし彼のベオウルフと対峙した曉は悪魔の恐怖をものともせず大胆不敵な態度さえしていたのだ。自身が元悪魔だとしてもだ。

「高町隊長、どうされました？」

ヴァイスの言葉でハツとした。今は悔しがつている場合ではない、一分でも一秒でも早く観客達を避難させなければならぬと切り替えるため頭を振った。

暁は自分に避難を任せただの少なくとも信用はされてるはず、ならばその期待に応えねば。と。

「ううん、なんでもないよ。もう少しで六課からみんなが来るから、それまで一人でも多く避難させるよ!!」

「合点承知！」

気合い十分なようだ、やはり法被のせいで緊張感をぶち壊すヴァイスだった。

唯一の救いがクロノと一緒にじゃなかった事だ。

【ギギギギギ】

「いい加減くたばれ阿呆！」

跳躍しネヴァンを鎌モードにして羽根器官を切り裂く。

これでグラディウスやらの人工悪魔は出せないはずだ。

——はずなのだが、どうもおかしい。

アグナスの呂律が可笑しいのは当たり前だが今回はそれ以上に何か様子がおかしい。

アグナスはムンドウスから力を受けたと言った、しかしその力はフォルトウナの時と同じ……いや、劣化しているといっても過言ではない。

この程度で復讐？ 有り得ん。

ムンドウスが関与してるならこの程度で終わるわけがない。

【グギギギ…、ギギガ…】

するとアグナスがいきなり呻き声をあげた。

【アキラ、様子がおかしいわよ！！】

その豹変ぶりにネヴァンが声を荒げる。

注意深くアグナスを見ていると身体がドンドン肥大化していく、

それと同時にあのふざけた気配が明確に感じ取れる。

そういうことが……。

「悪魔といえども元は人間、そこを狙ったかムンドウス！」

【ムムムンドウス様、ななな何故で——】

アグナスは最後まで言葉を放てずに膨張しきった身体は破裂した。

元は人間、つまりアグナスの人間の部分を使ってこちらに送り込む。アグナスはこちらに『アレ』を送り込む為の生贄として利用されたのだ。

最凶最悪の上級悪魔……。

「『ナイトメア』」

上空で破裂したアグナスの肉片がどす黒く変色しゲル状になりながら地面に落ち不快感を催す音を撒き散らす。

【あらあ、厄介な事になったわねアムカデム。まさかナイトメアがでてくるとわね】

「微弱だが気配は確かにあった。しかしアグナスを生贄にしてこちらによこすとは思わなかった、まんまとやられたよ」

だが肉片が飛び散った事が幸いして完全に現界しているわけではない。

俺はネヴァンを弄りコウモリの数を確認する。

…… 36か、まだまだ足りない。

「ネヴァン、ジャムセッションいけるか」

【いけなくは無いけど、数が少ないわよ】

「承知の上だ、しかし今叩かなければ面倒だ」

【……わかったわ】

ネヴァンは渋々といった感じで受け入れてくれた。

出来るなら俺も今は使いたくはない。しかし今叩かなければこの
一帯は焦土と化してしまう。

「よし、いくぜ」

ネヴァンの弦を掻き鳴らしコウモリを自分の周囲に集まらせる。

「【JAM SESSION!!】」

自分を中心に中範囲の落雷を撒き散らす。

ジャムセッションは威力はそんなに強くは無いがコウモリの数で
強弱は左右される技だ。

時間は掛かるもののコウモリが多ければそれに比例して威力が上
がる。

36という不安な数で決定的なダメージが与えられはしないだろう。だが、奴の『コア』に近づけばあとは手はある。

技の締めに一際大きな雷を落とし、轟音が響き渡る。

立ち上る砂煙を見ながら様子を伺う。するとネヴァンが光を放ち魔具から悪魔のネヴァンへと姿を変えた。

【はあ…、はあ…、アムカディム。悪いけど少し休ませてもらうわ】

ネヴァンは今にも倒れそうな表情で話し掛けてきた。見ると身に纏うコウモリが極端に少ないのがわかった、もはや裸体に近い状態だったからだ。

「ああ、悪いな無理させて」

【……ふふ、昔の貴方なら…そんな台詞は言わなかったのにね…】
段々とネヴァンが光に包まれそのまま俺のなかに吸い込まれていった。

俺は一度その場から離れ砂煙が晴れるのを待った。

気配から言えばナイトメアは弱まっていらない、問題はコア近くまでいってるかどうかだ。

『高町、今から半径50Mに結界をはる。結界とはいえ外部に余波がいかないとは限らない出来るだけ遠くに逃げるように頼む』

ナイトメアを仕留めるには結界内ではできない。

『そんな！？ 一人じゃ危ないで』はい却下』』

高町の反論はわかっていたので言葉を遮る。

そして結界を作るためにオーマネームを紡ぐ。

「漆黒にして時空が命じる、周囲の空間を遮断しろ」

紡ぎ終わると喧騒は聞こえなくなり回りの景色の色が変わった。

「さあて、本番だ。 起きろ《クラウ・ソラス》」

ペンダントを手にして待機状態のクラウ・ソラスを起こし、悪魔化する。

砂煙が晴れるにつれて徐々にナイトメアの姿が明らかになる。

スライム状の体に所々に人骨が浮かび上がる恐怖を誘う姿。

俺はそんなナイトメアに近づくと――

「キャアアッ！！！」

外界から遮断されたこの空間に響く悲鳴が後ろから聞こえた。

聞き覚えのある声に俺は驚愕した。

「ヴィオラ!？」

なぜヴィオラがこの空間に!？

いや、それよりもヴィオラの足元にある物体——ナイトメアの部だ。ヴィオラを飲み込まれようとしている。

「クソツタレ!!」

羽を広げ飛び、徐々に沈んでいくヴィオラの手を掴み——

——ドブン……

ヴィオラ共々、ナイトメアに飲み込まれた。

第二十一話（後書き）

オーマについて

暁のオーマについてですが捏造ですw

ご存知の方もいらっしゃると思いますがオーマは白、黒、青、赤、緑、黄、橙とあります。系統から言えば暁は黒に当たりますが何色にも染まらないという事で漆黒です。時空を一時的に操れる、空間断絶や遮断——まあDMCという悪魔との戦闘という赤い結界を空間的に行える——力があるため『漆黒にして時空』ということですよw

とまあ聞くだけではチートキャラですが、世界からの抑止力によって色々負荷がかかります。

リンク
接続

自分が作成した魔具を自身の工房と呼ぶ亜空間に接続し目当ての魔具を取り出す。これは時空の力を利用した物です。

ダンテとの模擬戦で見せた射出はイメージは某金ぴか慢心王の宝具『王の財宝』劣化版です。

現時点でできそうな補足はこれぐらいですね

ではでは次回もよろしくお願いします！！

PS、弓兵も良いですが、慢心王も個人的には好きですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3885i/>

リテラエルネルア

2011年11月15日01時25分発行